798-167
1200501607582
798
167

203

讀花全集

東京帝國大學圖書之印

798
167

目次

靈象（明治四十年一月）……一
縁結び（明治四十年一月）……八九
雌蝶（明治四十一年一月）……一三
草迷宮（明治四十一年一月）……一六九
頬白鳥（明治四十一年三月）……三三五
沼夫人（明治四十一年六月）……四四三
星女郎（明治四十一年十二月）……五四一
七草（明治四十二年一月）……六八五

帝國圖書館藏
靈
象

「唯今何時でございませう、」

と時間を聞きながら、幅廣な博多の角帶の間から、被せか、鍍金か、正のものか、金色の燦爛たる懐中時計を、對手に見えるやうに、鎖長く引出したのは、年紀三十二三の盲人で。

目鼻立は尋常であるが、縮れッ毛の生際から細く尖つた頤まで、揉上、耳朶をかけて、ぺろりと一皮剝いた肌へ、白粉を叩き込んだやうな不氣味に生白い、而して眉の薄い、曇つた顏色。

黑の繭紬の羽織に、紺の萬筋銘仙の袷、其の博多の帶と、是はあるべかゝり仔細はないが、汗取の肌襦袢、木綿の白襟を幅廣く、きちんと咽喉もとで搔合はせたのと、淺葱の唐縮緬の襦袢の袖のちら〳〵は、聊か氣になる。

これに黑の山高帽子、脫がず、被つたまゝで、トある荒物屋の店の、これから商物を並べようと云ふ、土間の緣臺の端の處へ、ちやんと畏つて、少し前屈みになつて、今其の時計を引出した。

對向ひに腰かけたのは四十年配、棒縞の廣袖に浴衣を襲ねて、三尺帶、旅籠屋か何ぞの寢衣のまゝで出たものらしい、赤ら顏で小肥りに肥つた漢。

馴れた風に、時計の表を一寸覗いて、

「五時半……些とまはりましたな。」

「はあ、五時半、」

と言ひながら胸を伸すと、引張ッこで、鎖を膝なりに向うへ突張つたが、節の高い、細長い、器用さうな指で、硝子蓋をコツとはづして、輕く細かに二つばかり、時の針に觸つて見た、成程器用なものである。

仰向いてニヤリと笑ひ、

「七分ばかりまはつたですね。」

と又ニヤリ。パチンと鳴らして、ざら〳〵と鎖を捌いて、最う一息反つて、下から帶をぐいと上げて、上からすッと挾んで、下の手でトンと叩くと、其の手で件の白襟をずいと扱いて、直ぐに兩手で袖口を引張つたまゝ、膝頭へ重手に組んで、据ゑ帽子の猫背になり、腮だけ突出して、

「へゝゝ、」

と笑つて、

「憚り、」

とばかり鷹揚に些と高慢。
何んだ、自分で分るくらゐなら聞くには及ぶまい、見せつけがましい、小面の憎い、それにしても感のいゝ、とじろ〳〵、眼を据ゑて見上げ見下し、
「お前さん、器用なもんだね。」
と構はず、然りとては山高を見下げたものいひ。
「不自由はないが見えないばかりさ。」
とまんじりとした顏で、
「お前さん、遠方かい。」
賣つた(お前さん)を、買つた(お前さん)負けずに遣る。此處等の土地では、此の(お前さん)は失禮に當るから。
「直き其處だア。」
「近所かね、」
「目と鼻の先だよ。」
「隣家かね、」
「鼻の先だといふに、」
「分らない。」
と顏を傾ける。
「分るまい、矢張り盲目だ。それ、すぐお前さんの側に腰を掛けて居るぢやないか。」
盲人は眉を顰めた。額のあたりに嶮が見えたが、聞かぬ振をして、
「眞面目に……何處から來なすつたんだ。」
「つい居まはりの旅籠屋から、起拔けに來たんだがね、實は旅商人さ。」
「はあ、商人か、」
と輕んずる色を泛べた。
「何うです、儲かりますかな。」

二

「串戲を言つちや不可え。」
と對手は何故か突懸り氣味になつて、
「人ごみを見掛けて餡パンを賣つたり、蜜柑、煙草を商ふんぢやないぜ。お菓子はよしかにしてやあがら。恁う見えても、否さ、お前さんには見えやしまいが、しらきちやうめんの見物だぜ。

おい、」
「見物？何を見物するんです。」
「何をッて、あれよ。向うの監獄の門が開くと、亭主殺しの別嬪が、御年貢が濟んで、久しぶりで今朝娑婆の風に當るのが、追付け出て來る。それを觀るのよ。」
「變な見世物だね、牢を出る罪人を見物も可笑なものだ。」
と乾燥いだ下唇を眞赤な舌で一寸濕して、ごつくり唾をのみながら鼻の尖でせゝら笑ふ。
商人は目をぎろり。
異う言ひなさるもんだ。えゝ、おい、お前さんだつて見物だらう。おまけに煙草盆なんぞ借込んでよ。隨分人群集はして居るが、そんな念入なのは一人も居ねえぜ。馬鹿にしねえ。」
忌々しさうに、手を廣袖へ突込んで、二の腕のあたりをごし〳〵と搔きながら、横向きになつて取合はない風をする。
盲人は指を反らして、膝頭を一つ彈き、
「邪慳だね、君は、はゝゝはゝ、」
と吐出すやうな笑ひ方をして、
「私の言ふ事が何んだか一々氣になるやうだね。」

「當前よ、」
と流眄に懸けたが、又此の商人といふ漢の目の、きよろ〳〵と働くのは、對手が盲目だけに尙著しい。
「小癪に障るかね。」
「ちよッ煩え。」
と舌打をする。
「まるで喧嘩だね。仇同士のやうだ、はゝは、」
件の其の笑方をして、ぐッと仰向き、身體ごと手を腰へ廻して、羽織の裏を引覆すやうにして、煙草入を拔きながら、ト笏を構へた體に、兩手で筒を膝に突立て、最う一息斜ッかひに仰向いて、
「時に、君、仇同士と極まつた處で、一つお願ひがあるが聽いてくれませんか。君も私が小癪に障る。
私もまた、先刻からの樣子で、君を優しい人とも、しんせつな人とも思はない。宜しいか、」
と念を入れ、唇をぺろりと嘗め、
「意地の惡い、邪慳な、鋭い、油斷ならない人間だと思ふんだ。宜しいか。處で、其處を見込んで、お願ひだ。」

「妙な願ひだな。」
と釣寄せられた形で、くるりと向き直つて、
「何んだ、言つて見ねえ。」
スポンと筒を抜く、煙管を出すかと思ふと然うでない、するりと又箝めて、上から壓へて、
「他ぢやないがね。」
と其の煙管筒を筋違ひに——並行に胸を曲げて、耳を煙草盆に差寄せたは、是から低聲になります、恁うして、お聞きなさいの仕方。
「お互に、處で、それ其の監獄から出て來る人を、疾い話が見物をするんだがね。私は此の通り目が見えないから、口惜くッても、什麼風だか、容子だか、些とも分らないと言つたもんです。其のさ、娑婆へ出た處の、態、恰好、其邊の工合、見物の様子なんか、一つ委しく話をして下さらんか。
ねえ、君、
たゞは使ひません。相當の、いや、過分の禮をするよ。
と恁う言つたら、君、又小癪に障るだらうね。處で、何うせ最初から小癪に障つてお在でなさるもんだから、癪づいでに、是非賴まれてくれたまへ。」
と故とか、書生のやうな口の利き方をして、
「此處なんです、意地の惡い、不深切な人と見込んで賴むと言ふのは……」

三

「どうせ何んだよ。君、盲人が、こんな場所へ出しやばつて、其處等の人を捉まへて、いま放免された婦人はどんな様子ですか、如何な風です、衣服は、帶は、と聞いて見たまへ。按摩の癖に、と先方が別嬪だけ尙の事さ。
聞かれたものは、假令柔和でも、お心好でも、穩當な、しんせつな人でも、私だけには誰でも邪慳に、突慳貪に成らうと言ふもんだ。
其處で、始めから不しんせつな仇同士のやうな、仲の惡い、君を見立てて賴むんだからね、はゝゝ、」
と衣紋を迫上げて、
「小癪に障る、憎い奴の賴む事だ。禮金の處は、隨分阿漕に吃驚するほどお取んなさるが可いのさ。何うだね、君も商人だ、此處等が算盤の持處だらう。」
泰然とした様子を見せよう爲か、肩を落して、首を長うして空嘯いたが、思切つたやうで、悟

つたやうで、太々しい中にもあきらめた狀が見えて――盲人だけに――憎々しくも哀れであつた。

「うむ、」

と太い聲で、商人は一つ氣を入れて、

「可かろ！錢金づくなら何んだつて賴まれら。お前さんも可いものに賴んだぜ、婦人にかけては恐らく女衒も行る男だ、委しく話して聞かせて上げよう。

何また商賣冥利だ。禮だつて滿更、盲目の目を拔くやうな酷い事はしやしないよ。

だが、お前、」

と煙草盆を押して馴々しく膝を寄せて、

「恐ろしく氣張んなさるぢやないか、何う云ふ因緣だね。」

「因緣とは……」

「否さ、お前さん、其の婦人とは知己かね。」

「知己とも、」

と言つた時、塞いだ下に眼球をくるりと動かして、唇に得も言はれず一種の冷笑を泛べたのである。

「其癖、何だね、別に迎に來なすつた樣子でもないやうだ。」

「そりや、」

と押被せるやうに調子を高めたが、ぐツと又聲を低うして、

「當前さ。夫を殺したといふ婦人ぢやないか。外聞に係ります。身内も少くはないんだけれど、確か、誰一人として迎ひになんぞ來るものはない筈になつて居るのさ。」

商人も四邊を眄し、

「ぢやあ、此の人だかりは、こりや皆見物なのか。おや〳〵、」

と今更呆れたらしい口吻で、

「兩側は雜と人垣を拵へたぜ。すると隣の店を借りて居る、女まじりの、(連中)と云つたやうな一組なんぞも、矢張御見物で在らつしやるかい。

私は又大した財産家の御新姐だと聞いたから、こりや素ばらしい出迎だ。此の人數で引包めば、白晝も暗夜にして、當人の淺ましい姿も、人目に觸れねえで濟むだらう。大樹の蔭だ、何の道も

と思つてたんだが、皆見物ぢや、さて、娑婆へ出た處が思ひ遣られる。」

「大分集つたかね。」

と盲人は耳を外の方へ傾けて、物音、人聲を掬ひ込むやうに顏をしやくつた。

「わや〳〵、がや〳〵、むゝ、出た〳〵。」

「出たにも何んにも。」
廂の下から、小溝の上へ、半身を乘出して、
「突當りの、あの遠くの坂なんざ、蟻の這ふやうだ。どうだい、處々砂煙が立つて居る。
尤もな、」
と自分で合點して一つ頷き、
「坂の上の廣場にや、象の見世物があつて、其處も大概な人出だからな。」
「いくら地方だつて、今時象の見世物ぐらゐに、そんなに人が出るもんかね、皆な監獄の門が當なんだね。」
「些と仰山過ぎやしないか、此處だけでは。
お前さん、象の方も大評判だぜ。象より黑人を見に行くんだ。印度人とか亞剌比亞人とか云ふ黑人を。」
「それにしてもこんなに朝蚤く……七時……七時に地獄の釜の蓋が開くんだもの。」
と見えぬ目を瞬いて、强ひて我言の眞なるよしを、觀たさうに悶くは何故か。

四

「だがね、恁う言つちや如何だけれど、物見高いことに掛けては、日本國中何處へ出しても餘り敗は取らない御國柄だ。私あ度々御世話に成りに來て知つてるけれど、」
と言ひかけてフトロを噤む。八百屋が來て、小溝の前に荷を下ろした。ト荷繩を捌いて笊の兩方へ天秤を渡したから、今日は、と此の荒物屋へ入るだらうと思ふと、然うでない。悠々笠の紐を解いて、脫いだのを片手に提げて、徐ろに其の天秤棒に腰を掛けた。仕込みも少いか輕さうで、白露かゝる靑物には、しなはなかつた商賣道具が、椅子に成つたのでギウと鳴る。
笠を取つた段は、扨案ずるに、(前の人帽子を)と言はれぬ前の、大入場の賢い用意と見える。
是に機を得て、五六人ばら〳〵と、吹寄せられた木の葉のやうに溜つて來た。就中八百屋と並んで立つたのは、古洋服の腰辨當、口髯を生やした中爺さん。
トばた〳〵慌しく奥から驅けて來たものがある。仲仕切の障子の破れから店前を覗いたのは、荒物屋の女房で、表へ寄せて來た跫音に、驚破で誘はれたものらしい。
「まだ〳〵、どうして、」
と言つて濡手を拭いたナ、前垂のすれる音。
「時間にやならない。七時かつきり懸直なしぢや、」
と男の聲、四五人が其處にも居る。

盲人はものの氣勢に聞く耳立てて、
「何か、何か來ましたか。」
「見物、見物、」
勿論低聲で、
「そウらね、だから言はないことではない。御門跡には大屋根へ上る。舊藩主がと申せば、橋の上へ莫蓙を敷いて土下座だ。一頃なんざ、天狗煙草の廣告が珍らしいッて押返したわ、近在から握飯を背負つて出掛けたもんだね。
だもの、お前さん、片や、亞剌比亞黑人、片や、紅蓮の池から雪の膚出現とお出でなすつたんだ。坂の上下轉しますぜ、引くりかへるやうな騷ぎや當前だ。おゝ、おゝ、」
三四名、巡査が出て來た。
「御人拂、御人拂、下アに、下アに——」
と商人は浮かれ氣味で、
「はゝゝはゝ、世話はねえ、追散らされれば、ぞろ〳〵と黑人見物。直ぐに立停まつて別嬪迎へだ。あゝ、あゝ、おつと、壓されたわ。えゝ、おい、串戲ぢやねえ。目の腫ぼつたい、髷がッくりといふ婀娜なものが出ましたぜ。寢床から驅出したと見えて、風に吹捲られたと云ふだらしの

ない風をして。やあ、故と壓す奴がある。はゝはゝ、何處の國も變らない。どつこい。溝へ落ちまいぞ。此方の溝ア甘えぞ。」
ちゆ〳〵と鼠鳴をして、何時の間にか突立つて、背伸をしながら、又笑ひ、
「こりや可い、こりや可い。兵隊さんが、綏々と四五人づれで行つたり來たり、監獄の前を歩行き出したわ。むゝ、咎め人がなくッて洒落れて居る。おまけに今日は日曜だ。コリヤ、」
「君、君、」
と盲人は膝をずらし、漸と拔出した煙管の皿で、緣臺をこと〳〵遣り、
「門が開いたら直ぐに賴むよ、うつかりしないやうにな。」
「然うだ、」
と心着いて又腰を掛けた。
「大丈夫、まだ〳〵監獄の門は夜が明けないやうに寂然として居ら。
だが、何だぜ。其處等の樣子もと言ふ註文だから、今のなんぞも勘定の中へ入るだらう。商人は此處等が算盤珠だ、何うだね。」
盲人は苦笑ひして、頤を空ざまに傲然と空へ頷き、
「まあ、可いさ。」

「でも、先刻は何んだぜ、地獄の門まで見通しで、正面上等の桟敷だつたが、それ、何かと申す内に、略此處の前も充滿だ。見るのに骨が折れようから、些と増して貰はうか、」

とさすがに忍笑ひをして、屈みなりに上目で見上げる。

五

盲人は悠々と煙草を捻つて、

「勞力盗みはしないから、」

と考へるやうに顔を曲げつつ、

「成程——此處の前も塞つたね。お庇で暖いが、其かはり曇つたやうに暗くなつた。他は推して知るべしか、」

と俄然漢語を使つたが、身體も急に乘出して、一服深く吸ひつける。

「知るべしだとも。」

何か知らぬが負けない氣らしく、商人は堅くるしく應答して、

「軒毎に旗を出して、提灯を點けないばかりさ。」

「萬人に面を見られるか。へゝへゝ、業曝しな、」と煙管を引いて乘上つて、打棄るやうに蔑んだ語氣で呟いたが、得意は滿面に露はれた。

顔の色を窺つて、

「憎てらしく言ひなさるが、何かね、亭主殺しだつて、お前さんは其の殺された人と懇意でもあんなさるか。」

「兩方ともさ。婦人の方は、島田に結つて緋手絡を掛けた時分から知つてるんだ。」

と知つてるんだに恐しく力を入れて、吸ひさしの煙管を握つた。細長い指がぶる〳〵と震へ、

「いつでも手を引いて貰つたもんです。」

とニッと微笑む。此の微笑は自分が目が見えないから、何時の間にか人は見ないものと思ひ極めて、其の以後はじまつたものらしい。語をかへて言へば、臆面のない獨笑である。

商人は忌々しさうな樣子で、一寸面を背けて、

「亭主殺しと手を引いたとなつちや、お前さんも掛り合ひだらう。」

「まあそんなものさ。」

丁と煙管を拂いたが、灰吹が向うへ搖れた。あとを一つスポンと吹くと、なごりの煙がたまになつてスッと出る。

其奴を狙つて、吹飛ばして置いて、

「緋い手絡の島田髷か、」
と不意に唯饒舌ると、盲人は眞面目になつて、老實なものいひで、
「質實な娘で、銀杏返が好きで、それで毛が有り餘るもんだから、髪結が殺し兼ねると言つたッけ。色が白くつて髪の艶が好いとなると、何に結つても似合ふんだ。
半襟の色だつて、や、紫は色を白く見せることの、淺葱は媚かしいの、黒は强過ぎるの、と選好みをするにも當らずか。おまけに目の好かつたッたらないんだもの、」
と目さきにちらつきでもするやうに、盲ひた目の働きは、縱に、宙の幻影を追ふが如く見ゆ。
心のゆくまゝ煙管が搖れて——
「大分委しいね。其のくらゐ見えりやお前さん、目の通辯は要りさうもないもんだ。」
と冷評すやうに嘲つたが、自分が其の目の通辯たるに心着いて苦笑ひ。
「そりや久しい馴染だからだね。いきなり其處へ來たんぢや、衣服の色なんか分りッこはない。それも近間ならばだけれども、こんな處から見るんぢや。……」
「膚はどうだ。」
と商人は唐突に言つた。巫山戲た狀で。
盲人はまじ〳〵と、

「あんな處に入つて居るんだ、白い上にも、雪だつて、綿だつて、較べものにはなるまいが。」
「否さ、お前さんの觸つて知つてるさ。」
「手か、私を引いてくれた手か。」
と口をあけて、
「手、手の其の綺麗な、柔々と、華奢な事なんざ、」
と、うつかりした樣子で煙管を落すと、商人は矢庭に其の膝頭を磕と打つて、
「賴むぜ、隊長。緊乎しねえ。膚と聞きや、手と言はあ。
恁う、禮を貴ふかはりにや、半襟ぐらゐの事ちやない。今に出て來たら、何よ、亭主を殺すほどの婦人だ、どんなのをメめてるか、其の褌の模樣を聞かせて遣らあ、此處が價値だぜ。」
「えへ、えへ、えへゝ、」
時に二人は額を鳩めて居たのであつた。誰そ、今や監獄を出づべき女囚は、あはれ、身を照らす日の光とともに、かゝる人々の目に、其の下がひの褄をさへ、見通されようとするのである。

六

周圍が、もののざわつくほど、彼等の談話はひつそりとなつた。

「何だらう、いづれ派手なものにや違ひはないが、成らう事なら緋縮緬に願ひたい、色が白いと引立つぜ、昔から悪くないもんだ。」
「まさか、そんなもの。それに質素な婦人だから、以前から然うぢやなかつた。年紀も取つたし……」
と(内の)ののやうに親しく饒舌る。
「幾歳だ。」
「今年丁ど(三十)になるのさ。」
「へい、だつてお前さん、緋の手絡で島田だと言つたぢやないか。」
「それは、」と大いに意氣組んで、急に顏色を颯と變へ、
「それは、結納の祝のあつた晩の事だ。」
「結納?」
「彼家へ緣附く時さ。」
「彼處へッて、」
と一度句切つて、商人は更めて、
「一體、何處の家の御新姐なんだ。別嬪が監獄を出ると聞いたばかりだが、」

「他國の人ぢや、然うかも知れん。土地では誰一人知らないものはない。此の騷ぎを見ても分るだらうがね、山名と言ふ豪商だ、尤も其後微祿をして、はや跡方もないけれど。」
商人は聞く中に目を圓にして、
「や、山名の、」
「知つてるのか。」
「知らねえで。ぢや、あの評判の奥方か。」
「知つて居るね、むゝ、」
「見た見ないは格別、此の土地を知つたほどのもので、あの奥方の事を聞かない奴があるもんか。薄茶の中へ毒を入れて、山名の旦那を毒殺した一件だ。私等が國の方でも今頃だつて一つ話だ。」
と烈しく身體を搖りながら、腰掛けた脚をばた〳〵とやつて、
「串戲ぢやねえ。私も隨分オイソレもんだぜ。人先に驅出して來ながら、何處の什麼罪人だか氣がつかなかつた。然うか、山名の一件か。餘り目立つたことだから、眞晝間だと思つたばかりで太陽を見ないと同一よ。
こりや、拜まう、確乎見物するこつた。」
と胸を搔合はせて、はだかつた裾を引張り、

「黒人を引合ひなんざ勿體なかつた、お月様に炭團で居やあがる。道理こそ……」
とまだそは〳〵して、きよろつく次手に、更めて、盲人を……しばらく熟と、見詰めた氣が、其處へ打附つたやうに膝を叩いて、
「お前さん、」
「むゝ、」
「ぢやあないか、なんぢやないか。えゝ?!裁判中に、毒殺の連累だつて名告つて出た盲目があつたつて、騒いだが。」
「知つてるか。」
と横柄に言つた。
吃驚するか、顔色でも變へるだらう、と瞶めて居た商人は、其の大面なのに氣拔けの體で……ト大いに我折つて、
「呆れたもんだぜ。」
「呆れが禮をするから可からう。」
と洒落のやうなことを眞面目にいつて、煙管の雁首を吹く鼻息、フゝン。
「亭主殺しは未だ見えんか。」

羅綾にも堪へまじきが、不思議に監獄に生存へて、刑期滿ちて、今朝放免されようとする山名の夫人が、毒茶を以て夫を殺害した。事の發因は去ぬる年、五月の初め、雨上りの月夜であつた。市の警察づきの何某刑事が、賊の檢べものがあつて、一の橋——山と町との間にかけた大川の川上あたり——土地では場末の、宵から人通の少ない橋の此方、土手の松を縫つて通つた。
川浪の末遙に、夜の緋鯉の灯が流れて、三味線の音遠く、近く谺に溯るのは、二の橋に臨んだ一廓。
刑事は此の上流に棹さしつつ、月の光を岸に辿つて、白浪のあとを慕ひながら、花柳の巷に行くなりけり。

七

松の葉越の月明く、柳の影は暗かつた。兩岸にはちらほらと、鷺も鴉も見えさうに、雨あがりの空、水の色、澄渡つて蒼きが中へ、一條の橋は仄白う、霞のやうにかゝつて、神か、人か、渡るものを昔から靜に待つて居る趣。
刑事は町盡から、山の方へ、其の一の橋を渡らうとしたが、向う岸から流を覗いて、黒髪を水の中、綠の色の滴るやうな、山の頭を打仰いで何ともなしに行んだ。這般職責にあるものさへ、

兎もすれば月の風情にあこがるゝは、我が敷島の習ひにこそ。

トしとやかな足取も、恁る折から能く聞える。からころ、橋板を渡る音して、月の下へ影がさした。其の影よりもすらりと高く、低い欄干を裾にして、やがて彳んだ婦人がある。

刑事が控へた方からだと、對岸の月夜を仕切つて繪襖のやうに見える、山の根に、柱も屋根も肉落ちて、明いだけに骨の出た、古家が五六軒。一世紀ばかり前の廓の跡が、淺ましい其の俤を殘した處で、中には二階家も現にあるが、何處のか物置に使はれる。店を壞して奥座敷に、世捨人のやうに暮すもあり、時々の出水に暴されて、根太を繕ふ力なく、中二階に所帶して、泥田に變つた池の鮒を、茫乎釣つて居るのもある。住む人のないではないが、蝙蝠の數は、はた其よりも多からう。月の光に消さるゝとは言へ、戸を漏る灯影は一つもない。

其の孰方の軒を離れて出たか、橋に徜徉ふ婦人の姿。思ひなしか悄然と流に臨んで、帶のあたりを欄干で劃つた風采、躍り入るまでもない、がつくり一呼吸引くが最後、泡に消えさうに思はれる。要こそあれ、身構へして、屹と見た刑事の瞳に、敏しく映つて、認めたのは月恥かしき顏よ。

市に隨一の貴婦人だつた、美波子といふ、豪商山名の令夫人。梅、桃、櫻、海棠の、爛漫として揃ふ席にも餘り聯つたことのない、籠勝ちな婦人であるから、其の俤は音に聞くのみ、見知ら

ぬものも多からう。但此の刑事は職掌柄、其の容色に接して居た。

一度瞳に宿つたものの、夜目にも見紛ふことはない。世の罪惡をばかり見る梟の如き刑事の目にも、美しき色は月の光とともに、明かに宿つたのである。

川向うの何の家か、其の邊の一室を借りて、竈の下の灰までも、旋風に吹去られたやうに分散の悲境に陷つた、山名の主人藤次といふのが、火事場のあとの幻に似た、細き煙を立てて居ることを、警察だけは知つて居た。人は皆、跡を暗まして、他國へ出奔をしたと思うて居るので、刑事自身さへ、此の婦人が、夫とともに此邊にあらうとは思ひがけぬ。蓋し山名家沒落の際、美波は其の實家方へ引取られて了つたから。

尤も家計上分れただけで、緣は其のまゝ妻、夫。藤次の隱家に訪れたらう、それに不思議はなかつたが、心がかりな橋の上。

驚破、其の立姿、峰の影に分れたら、月に激がかゝるであらうと、將に驅け出さうとする時、早や水の音が沈んで、ドブン。

僥倖、一條の絲が、夫人の手から、欄干を越して、川面に繫つて、其の人はありのまゝ。絲や、玉の緒の影かと見えたが、非ず、流を汲む綱だつたのである。

頃刻して水を離れたのは、一個の釣瓶で、雫は小蓑を顫ふやうに亂れかゝつた。

此の界隈の衰微も、一つは其が因を爲さう、一の橋あたりは、井戸が惡く、殊に雨上りは全然泥水。

飲用水を中流へ汲みに、と合點が行くにつけても、水仕の業が、其人だけに、刑事の目には尊かつた。

八

昨日までも青柳の絲を釣瓶に結んで、玉轆轤を曳かせた身が、と刑事は優しく思遣り、近づいて其の釣瓶を手傳はうと、我知らず片袖をかゝげた時、又もや、橋向うへ一個の人影が露れて、中程へ來かゝると、黑い上衣を片腕に引掛けたが、外套であるらしい。紋附さうな羽織を着て、着流しの姿ではなかつたから。

中折帽の色は分らず、中脊と見えたのが、時に川水を汲上げて、月の光で蓋したやうに、釣瓶を橋の上へ置いて、一息つきながら、刑事の方へは背を向けて、家路へ立直つた夫人と、出合つたと思ふと、男の頭が、低く且つ圓くなる。

挨拶をしたらしい。山名の美波も、半纏か、羽織か、其の端が細腰にひたと着く。

直ぐに二言三言、言交へたやうだつたが、腰蓑のないばかり、釣瓶が松風の裾まで上ると、男

の影は中腰になつて、底へ手をかけたものと見える。綱を控へた、お美波の白い手の下から、颯と傾けて、川水の滿を引くと、新しい月影が、ひた〳〵と婦人の背後へ濡れ擴がる。

醉つたやうな足取だ、と刑事が心着く時、夫人の駒下駄は入交つて、再び欄干に臨んだと思ふと、男の形が衝と寄つて、其の綱に手を掛けたが、釣瓶はふら〳〵と左右に搖れて、井戸ならなくに朝顏に、月夜鴉の縺れた風情、雪の頸も黑髮も、袖も裳も靡いたのである。

さては、汲みかへむとする程に、否我こそとや爭ふ、と見ると男はつか〳〵と、ものの二三尺衝と退つた。

釣瓶は潑と落込んだ。綱は手に控へながら、お美波は水を汲まうともしないで、斜に男を打見遣る、肩つきが細りと、鬢に風の添ふ狀で、鼻筋の通つた立姿は、氷りついたもののやう。

二三分經つてから、急に言が入交つて、囁くともなく語ふ聲。聲の響が影になつて、空に雁の描かれたやう。言の音に浪あつて、水に文字の映るやう。俯し且つ仰いで、漫に其の言語が見たくなつた。刑事の耳には、偏に流の音が哄と高くなつたばかり。却つて風を傳ふ妙なる薰が、ほんのりと來て、其の面を打つた、二人の聲は、花の香の迷ふに似て。

堪らず、履物を脫いで、刑事は跣足で、蹲ると、身體を押して橋詰から、欄干の外へ廻つて、板の端を流の上。

五寸には足りない處を、鳥打帽の庇の下に、袖口を組んで押立膝、拱いた腕を支へ、棚の達磨さんを一寸、熟いもの。

摺足の音を忍んで、目ばかり光らし、むく〳〵と尻で渡りはじめた。

固より氣取られるやうな手練でない。首尾よく、二人が右に立つた其の左の欄干の外まで辿つて、占めた顏に差出した、聞く耳に、ざぶり水の音。

釣瓶は夫人の手にきり〳〵きり、聲は其時ハタと止む。

話合が着いたらしい、釣瓶は川水を湛へたまゝ、髮のすなほな、目鼻立の好い、學生上りらしい、(刑事の目に)羽織、袴の薩張した扮裝の、三十恰好の男の手に渡つて、婦人は夜風に袖を組んだ。

髮は飾りのない、しかし、髷のふつくりした銀杏返で、帽子を脫つた天窓とや、對丈に並んで、肩を合はせて、早や歩行き出す跫音、水の流の音。

(チョッ。)

舌打を袖で包んで、其まゝ蛙で二三間。溢れて一文字が月下に長い、釣瓶の傾くのを横ざまに見た時、男の、其の左手の腕に引掛けた——外套であつた——持物が、はらりと橋を引摺つた。

九

あとで見ると、夫人が月下に着て居た羽織は、中古ぢやあつたが紫紺に、白で細い雨絽の、お召縮緬であつた。其の右の肩がしなつて、今、引摺つた外套の下へ、袖を差入れて擡げて遣る時、あらぬ方を見向いたのが、人なき樣子を伺つて、其處で手を握つたやうに考へられる。

恁う云ふことは、默りでする事で、唯雙方の掌へ心が籠るのだ、と看て取つて、刑事も拳を握りざまに二足三足あとをつけた。

二人は橋を渡り果てても、何もものは言はなかつた。同じ姿勢で、橋詰を左へ切れ、筋違に見える、低い格子戸の前へ留まつて、唯筵戸でないばかり、婦人も屈まねば潛られまい。軒の低い茅屋で、表の蔀は夜だから下してあるが、大な落書が薄茫乎相々傘だの、變なものだの、中にも天狗の面などは、月に俤がうかぶくらゐ。恐らく三十年五十年前の古筆であらう、今時こんな處へ立つて、惡戯をするものはありさうにも思はれぬ。

畫間は其處を店にして、一人住みの婆さんが、墓參りの、花、線香などを商ふ、傍ら、草履、鼻紙なんど。此の春、此の邊へ白首が立廻るといふ噂があつて、夥伴が目を附けた事があつた。此の花屋なぞも、納戸が怪しまれたものだつたが、何事なく沙汰が止んで、やがて暗夜になる。

と、又人魂が出ると云つて、橋向うへわや〳〵と人だかり。五人七人眞夜中まで固まつた影さへ殘つたが、卯の花くたしが降りはじめては、宵から提灯の影も消える、丁ど今が間の節で、最う些と經つて、螢の一番が顯れるまでは、蝙蝠を追ふ長棹も、此處までは屆かない。

門口で、又言が交はされた。美しい男女が、恁うして口を利く時は、動かぬ姿も薫のする時、花の何となく搖れるやうな氣勢があるのと、視める目には似るのである。

刑事は、聲の移香の、手に取られぬのがもどかしかつたが、生憎身を忍ぶ樹立も隈もなかつたので、橋の外に蹲んだまゝ、睨み詰めて居ると、男の手が、釣瓶をばつたり、落した、いや、擲つたと看て取られた。

横倒れになつて、軒の下へざつと流れかゝると見るや、怪飛んだやうに、橋へ上つた、男の姿は、星の精の飛ぶ如く、欄干の間を縫つて、町の方の、土手の松へ消え込んだ。

裳もすら〳〵二三間、門口から跡を追つた夫人の手は、ハタと橋詰の欄干にかゝつて、足が留つて、伸上たやうにして、對手の馳走つた方を視めた時、同一其方を見送つて、むつくり頭を擡げて居た刑事は、ハツと心着いて、サソクに腹這になつて忍んだ、蛇の如く長く。

知られて憚るわけはないが、何故恁うしたか、自分にも分らない。恐らくお美波の天命の、然らしめたものであらう、と刑事は後に語るのであつた。

背姿しを〳〵と、お美波は力なげな足取で、差俯向きつつ元の門口。しばらく寂しさうにイんだが、漸々倒れた釣瓶を起し、片手で地を搔探るやうに、綱の端を拾ひ取るまで、如何なる時にも其の氣高さ。此の世の人とは思はれず、たゞ月に描けるもののやうであつたが、がた〳〵と格子戸を開けた時は、恐ろしく影が窶れた、世話女房の風采で。

騎虎の勢、刑事は、其の消えたあとの門口へ密と寄つた。

足袋が冷りと踏込んだは、今の水のこぼれたので、手で摑んで、月明に踵を透かして、泥だらけになつたのに、又舌打しつつ、ぴたりと格子に附着いた、恰も其の小店の蔀の落書の影に髣髴として。

對手は云ふまでもなく、其の夫であらう。刑事が此處で聞いたしめやかに語らふ聲音は、戸の内だけに極めて陰氣で、先刻のが、ほんのりと唇を撫でる花の香なら、これはしん〳〵と眉を襲うて、霜夜の露の凍る氣勢。

十

時間に積ると餘程であつたらう。納戸の話聲がぱつたり止んでからも、未だ立離れることをしないで、戸口に附着いた刑事は、引入れられさうな心地がした。

尤も、此の人たちに、露ばかり嫌疑があつたのではなく、餘り夫人の美しさに、偶然其の話聲を間近に聞いて見たかつたに過ぎなかつたのが、思はず恐ろしい犯罪の、現場を見る事になつたのは、刑事が所謂天命であらう。

あゝ、茫乎して眠氣がさした、馬鹿々々しい、と生欠伸を嚙んで、最う去かうとした耳を抉つて、然も苦しげな呻吟聲が、納戸から絲を震つて、ぶる〳〵と刑事を驚かした。

ヒイと忍び泣きに悲鳴を包んだ婦人の聲。昨日夜あがりの、又雨催ひか、月に暈のかゝつたのも、折から尋常事にてはあるべからず。

（御免、）

と刑事は、對手の身分を知つただけに、相應に會釋はしたが、格子戸を蹴開く勢。暗がりに馴れた目にも、土間に躍込んで何にか躓いて、はずみを啖つて、ばつたり突當ると、襖が倒れる。

一間は陰々とした燈火に、墓の中を透す光景。月も花も穴藏の底に沈んだかと、二人は頭を入違ひに、はたと破疊に俯向き伏した。

瀨戸ものの火鉢に、火はあるが、瓦の色に火氣が弱つて、鐵瓶の湯氣も絶々で。

其の鐵瓶の蓋を外して、柄杓が斜ッかけに乘つて居た。火鉢の前に、黑塗の棗の茶入、茶筅が並んで、其處へ突のめつたのは山名藤次。羽織は着ず。慌しい場合なれば、品物は氣がつかなか

うたが、鼠の茶の縱縞の、さすがに小薩張した袷を着て、帶腰の形素直に、角帶をメめた、衣紋がうしろへ脫げて、黑八の襦袢の半襟が見えた。

横へ、前髪を落し合はせて、身體は疊のへりをかけ、眞白な手首で額を疊に擦つけて、片袖胸へ搔込んで、犇と乳のあたりを壓すらしい。脇あけをこぼれて、はらりと紫の散つたのを、腸や溢るゝと驚いたのは、非ず、帶に挾んだ鹽瀨の袱紗で。

飛込んだ人の狀に、衝と手を疊に身を起した、夫人の顏はつゝがなかつたが。……

襟首に手を掛けて、矢庭に背後へ引仰向けると、藤次の唇は血を嚙んで、俯伏になつて疊についた口のあとは、眞紅な土蜘蛛の形して、堆かりし鮮血。

（婆々は居らんか、婆々、婆々！）

と刑事は、見る〳〵天眼に白くなりゆく、藤次の瞳を瞶めながら、どん〳〵足蹈をして呼はつた。

唯、夫人は絲織の細りした、膝を中腰になつて、羽織の紐の解けて居たばかり、袱紗も落さず、褄も亂れず。

（お水を持つて參りませうか。）

善か、惡か、言ふこともうつとりとして居る。

（奥さん。）

と屹と見た、刑事の眼は狼の如く輝いて、

（何うしたんです。）

（はッ、）

と言ふのが溜息のやうで、衣紋の外へ動悸がうつッた。驚いたやうに下へつく手が、膝許の薄茶茶碗に觸れたと見ると、片手に藤次を抱いたまゝ、刑事の猿臂は衝と伸びて、稲妻の閃く如く、鋭く、夫人の手を拂ひ退けて、

（觸つちや不可ん！）

と怒鳴つて、

（動いてはならんのだ。）

夫人の姿は、絲を抜いたやうに崩折れた。

トタンに呼子笛が、刑事の口で高らかに吹鳴らされると、寂とした川浪に、恰も無人島あたりに響く、難破船の汽笛の如く聞えたのである。

式の如く、やがて朱筋の提灯が入亂れて、靴を穿つた黒い脚は、恰も根太を抜いた竹の如く、幾條ともなく縱横に一室の間に入亂れて、唯一人夫人の狀は、昔語に傳へたる八岐のをろちの前に頸を垂れた媛に肖て居た。何時の間にか髪も解けて。

十一

藝妓まじりに人雪崩を打つて、哄と橋詰へ押寄せた群集の中に、用達から歸つた家主の婆々は、唯くる〳〵と廻つて居た。

家は犇と鎖された。

直に腰繩を打つて拘く處、後れて來た警部の計らひで、荷車に乘せて橋の音、とゞろ虚空に轟かして、夫人を將て去つたのである。

輪の軌る音は、眞夜中の月の前を、折から立蔽うた黑雲に、遠雷の如き響が殘した。

此處に立ち盡したものさへある。明くれば一國唯是沙汰。

降り出して小止みのない、五月雨の雫とともに、其の風聞の絶間はあらず。じと〳〵と濕つて來て、汗するばかり人々の耳に聞えたのは、山名の夫人が、夫を毒殺したと云ふのである。

現場に有合はせた、薄茶茶碗に、未だ飲さしが殘つて居た。毒は其の中に交へてあつて、刑事に見咎められた時、お美波は其を取棄てようとしたとも云ふし、又言譯のなさに自分も飲まむとしたのだなどとも傳はる。

で、此の犯罪には共犯がある。それは毒茶が煮らるゝ前に、夫人が川水を汲みに出た時、豫て打合はせがしてあつたと見えて、恰も橋の上に來て、釣瓶縄に摺れつ縺れつ、もろともに水を汲んだ、學生上りの清げな若もの、勿論密夫に相違ない。怪しからざる淫婦姦夫、世の見せしめに其の釣瓶縄で、一所に絞罪にして了へ、と口々に喧しい。

尤も湯の中にも毒があつた。最初、其の密夫の手から、水へ投込んだものだとある。

一日新聞が號外を出した。其の密夫が捕縛になつたと、否、名乘つて出たと。……滿目聳動、是如何なるものぞ！瀧山澤夫、自分で澤、又、澤と名告る人も知つた金持の按摩である。

はッ恐れながら、姦夫は手前で。山名の御新姐が、未だ緣附ませぬ、緋い手絡の時分から馴染めまして、人の女房となりまして後も、繁々深閨に出入をいたし、盲目の便宜には、人目の關も破り易く、首尾よく媾曳を重ね居りましたる處、山名家分散いたし、お美波は實家方へ返されまするし、又、主人藤次出奔と聞えて遠國仕りましたれば、卽離別も同樣。やがては表向申入れ、手前宿の妻にもと彼是内談いたし居りました折から、藤次事、美妻のために心ひかされて浮ばれ申さず、一の橋の暗の夜ごろ、獺の如く立露はれ、實家の居廻りを迷ひ歩行き、ものの便に女房を呼び出し、偖もろともに姿を隱せ、一所に遁げずば、殺すなどと、附廻しまするため、遁れ方なく、一先づ其の隱家へ伴なはれましたるなれども、あれは盲目の手前と申しまするものござりまする故、土地を離れまする段思ひも寄らず。然れば膝突合はせた埴生の小屋、手前忍びまするに屏風の影もない始末。切なき思に痩せます上、活計とてもない飢死の境遇。旁々内談を極めまして、以前の數寄が猶留まぬ、藤次がもの好みを幸に、一の橋の水を汲みました時、毒を加へましたは私、薄茶手前に託せて一服飲ませましたは彼めにござりまする。恁く成りまする上は、毛頭祕し立ては仕りませぬ。お美波と同罪仰付け下さりませうならば、八裂とても厭ひますまい。

と横木に涙を流したと記したのである。——

天地大變、此で長濕氣の梅雨も明けようと騷いだが、盲人澤夫は、日も措かず、叱り下げられた。

固より當夜の相手の風采、朧氣ながら其の容貌、刑事が認めて居るのであるから、澤夫を見ると唯一目で、其の眞面目顏に噴出したほどだつたが。

豫審判事は、しかし、澤夫の家が、仙丹と號する金看板、先祖傳來の藥種を商ふ家である處から、或は毒藥の出處と、愼重に取檢べたけれども、何の取留めた事もなく、色情狂め、と大目玉で。

靈象

押丁が、

（下りませう！）

十二

此の號外は稍滑稽であつたが、二度目に出た初號活字の報道は、沈着に世を動かした、恰も地震の如く。

一頃、東京のが此邊まで大騒ぎだつた、惡三郎とか云ふ一大毒殺事件があつた處から、記者は、第二の大何三郎と標題を置いた。

市を去十里ばかりの溫泉で、湯治中捕縛になつた、山名夫人の密夫、卽ち毒殺の共犯者は、誰あらう！

此度新に東京から、當地工業學校繪畫部の教頭として就任した、西洋畫家、然も以前は市の貧民の孤兒で、謂はば故郷へ錦を飾つた、興津志乃吉である。

思はざりき、俊秀月の如き面の中に、自づから堅忍不拔の色ありとて、其の小影を紙上に揭げ、五日に亙る履歷を記し、學生の龜鑑と稱へ、東洋の花と歎美し、予等爰に相計りて、氏をして市の東丘なる梅林の中に、手づから月桂樹を植ゑしめむとす。諸子、それ是に鑑みよ、と絶叫した美術家の、一朝忽如として大惡の淫魔と變ぜむとは。記者は今や、毛穎を嚙んで唇裂けなむとす、唉、噫、嗚呼、嗟乎と呻くこと李太白に異ならず。

で、事實は恁うである。

毒茶事件の當月夜、一の橋の上で、略其の風采に接した刑事は、事爰に及んで、何條些とも猶豫すべき。假令ば目前に影を捉ふるやうな罪人を、一刻の遲延は一生の瑕瑾と、地踏鞴を蹈んで、血走つた眼に、やがて其の西洋畫家の、浴衣姿を縛り得た。

證據手懸りとて別にない。唯朧氣に見たばかりを、さて取檢べる、と正に一の橋橋上の客なる由。天網免れず、白狀に及んだ、と號して、刑事氏の眼は淨玻璃の如矣。惡魔は藕絲の孔中と雖も其の兇影を潛め得ず。見よ、炬の如き烱眼を。毫末も心に疚しきことあらむもの、一見して毛髮竪立せむ、是を愼めや、讀者、と又其の寫眞を――新聞に――揭げたが、何故か、刑事の肖像は、可笑く眦が垂れて居た。

讀いて此の名刑事の、探偵苦心談と言ふのが麗々と記載された。

苦心とても唯橋上の客が、微醉を帶びて居た處から、二の橋あたりの料理店に當つて見ると、其日午過ぎから某の樓上で、工業學校の教授連が、新教頭のために開いた歡迎會があつた。

して〳〵其の新教頭興津志乃吉は、となると、飲めない酒を强ひた所爲か、翌日忽ちに病氣屆けが出て、今は或溫泉に靜養中との事。出先から同僚へ手紙も屆いて居るくらゐ、南無三、風を食つたわ、と韋駄天二人曳後押で驅附けたまでの談。草を分けるまでもない、有名な溫泉宿だか

ら、番地を探す手數さへなかつたのに。

苦心談には、且つ此の刑事が、一の橋の欄干外を渡つた事を、特筆大書して、故ある哉、是ある哉、警察部内に於て、一來刑事、と渾名する飛鳥の如き名人とて、と遣つて、そも〳〵一來たるや、昔宇治川の合戰に、と註したのである。

然るに此の刑事が、欄干の外を渡つたのは、生れて以來、其の晩が最初であつたと。……何うして出來た渾名か知らぬ、新聞の記事は神聖である。從つて警察は豫言者であつたのである。

物好きな市民の内には、此處が、と雨の中をわざ〳〵一の橋へ出張つて、懸賞で、其の欄干外を渡つた。

白玉か何ぞ、と問はむ上臈の、鬼に取られて露よりも脆く消える身も、地獄の白洲では死にはせぬ。針の山に追はるゝに、羅の腰も靡くでないか。

山名の夫人も生命があつた。

係官が問へば應へたのである。されば未だ聲も出るのであらう。たゞ空蟬の果敢き狀で、疾く此處を斬れかし、と雪の頸を差伸べた。橋の上で出會つたと云ふ男を問はれた時は、言ひ淀んで震へながら、

（存じません。）

十三

係官は物和かに、

（知らないと言つてはなりません、此處は、貴女の家ではないから。又お祕しなさるのは、其者の爲にならない。貴女が男に出會つた事は、見たものがあつて分つて居る。早く其の名を言ふが宜しい。）

夫人は端麗なる顏を僅かに上げて、

（男の方には逢ひましたが、誰方か知らない方なのでございます。）

（では何うしたのです。其者と何う云ふことをしたのですか。）

（私が一釣瓶汲みました時、傍をお通りなさいまして、咽喉が渴くから飲まして欲しい、とおつしやいます。さあ、召食りますやうに、と申しますと、釣瓶から快く口移しにお飲みなさいました。水が覆れましたから、最う一度汲みませうといたしますと、自分の所爲で苦勞を懸けて、お氣の毒に思ひますと、しんせつにお手傳ひ下さいました。たゞそれだけでございます。）

（しかし現場を見たものは、其の間に、可なり長い間密談をなすつたと申します。何を話しましたか。）

（はい、）

と言白んだ、夫人の瞼が薄く染まつて、

（好い景色でございますの、佳い月でございますのと……）

（歌の話でもしたのですか。）

と係官は片頬に冷かな笑を含んで、

（それから、釣瓶を提げて歸つた門口で、其男が釣瓶を投げるやうにして、急いで驅出したのは何ういふ譯です。）

（水が充滿で重からう、と御自分でお持ち下さいましたのでございますが、少々醉つてお在でなさいましたやうで、お落しになりました。急いでお歸りになりましたのは、釣瓶を覆して氣の毒だとお思ひなさいましたのでございませうと存じます。）

美波の言に、言ひ知らず情が籠つただけ、男の嫌疑は尙增した。

興津志乃吉が、溫泉で捕縛に成つてから、其筋の消息はしばらく暗闇の中に葬られ去つたが、新聞の記事、街上の巷說、畫家が密夫であることは、日に日に人に確められて、この極惡人、と其の父祖の墓を考へ、石碑を覆したものさへあつた。

公判が開けると、夫人の前言は、公に、志乃吉の自白に因つて取消されたのである。

新聞は、其の太々しさ、面に唾せむと痛罵したが、美術家は、判官の面を仰ぐ事、恰も畫架に對するが如く。……

當日は午後から、歡迎の宴に侍し、夜に入り、時間は覺えず、月が良いので、唯一人、歸途を町盡へ出て、一の橋へ廻りました。

紺屋職人だつた、父の家は、一の橋近邊の小屋でしたから、懷しい處なのです。

酒氣があつて、咽喉が渴いて居ました處へ、あの淸しい、流の音を聞きますと、何うしても我慢が出來ません。然うでない時も、何爲か、川、淸水、泉などの繪を見てさへ、飲みたくなります性質ですから、折よく橋の上で水を汲んだ婦人がありました。一口無心をすると、快く釣瓶を貸して呉れましたのを引かぶつて飲みました。冷さは五臟に浸みて、判然目が覺めたやうになりました、朧氣だつた月も透通つて。

爾時見ますると、今ので大方覆したと見えます。婦人が又汲直さうと、釣瓶を投げましたので、これは餘計な手數を掛けたと思ひました上、一寸見ても然う云ふ事には馴れない人と存じましたから、瀨に引かれてはなりません。汲んで上げませう、と傍へ寄る時、否、と見向かれた顏を見ますと……お孃さんです。

丁ど十年ぶりで逢ひましたが、睫毛の濃いのも見忘れません。一晩も夢に見ない事のない方な

んですから。

最うこんな事を公に申さねばなりません運命になりましたから、假令無罪の御裁決を請けましても、私は再び人に顏は合はせません。

と一度、被告席に目を閉ぢて。……

十四

徐ろに語り續けた。

單に見忘れないばかりではありません。俤も十年前に少しも變らず、同一十七に見えたのです。唯髮の形が違ひましただけです。最後に見ましたのは、山名へ緣組が、お極りになつて、結納の祝の時、島田に緋手絡を掛けて居たのでした。

私は出入の者の倅でしたが、御贔屓だつたさうで、破格に其席に列したので。禮服もありませんから、木綿布子の筒袖を着て、片隅に小さくなつて畏つて居りました。

上座の挨拶から、席を起ちしなに、令孃が、私の傍を通つて、座蒲團の外に居たのを見て、

（敷くものですよ、）

と人知れず低聲で叱るやうに言つて、膝の下へ手を入れたんです。私は固くなつて、それなり

膝に手を重ねたまゝ座が開けるのを待ちました。

醉ッぱらひにからかはれて、令孃の笑聲を聞く度に、私の其の寂しさと言つてはありませんでした。最うお納め、お納め、と言ふ聲の聞える時分、漸々摺拔けたらしい風で、密と私の前へ來て、

（お一つ頂きませう、お別れに、）

と言つたんです。

何故か、胸が一杯になつて、

（お別なんですか。）

（お嫁に行くんですもの。）

と何氣なしに莞爾しました。

（お嫁に入らつしやると、最う、……）と言つて後が出ませんでした。

（名殘を惜むねえ。）

と横合から唐突に申した者があります、瀧山澤夫といふ盲目です。

傍聽席は一層耳を傾けたのであつた。

丁度私の隣に坐つて居て、初めから、頻に口叱言を言つて居たのです。僕の杯に龜裂は入つ

て居ないかの、燒物を突出して、君匂を嗅げ事の、何だ、蛤の吸物か、畜生、などと人事ながら私はハラ〳〵して居たのでした。

盲人に毒突かれて、赫と逆せた處を又、背後に立つて居て、背中を敲いたものがあります。

（感心に色氣がついた。はゝはゝゝ）と……

これは出入の大工でした。私の父と懇意な。

私は顏から火が出るやうになつて、獻さうとした杯を持つた切、固くなつて俯向いたので、

（では、お酌を、……）

と美波さんが銚子を取りますと、

（願ひませう。）

と盲人が猪口を突出しました。

向うで呼ぶ人があつて、美波さんは座を立ちました。其の氣勢が、夢枕に立つた神の姿が、遠ざかるやうに思はれました——其ッ切。此の間の晩まで逢つた事もなく、途中で見懸けた事もありません。

又逢ふやうな機會には、私の方で避けるやうに、避けるやうに、として居たんです。何故か、其の人に逢ふ事は、神佛禁斷の掟のやうに思はれましたから。

若しうつかりとでも、顏を合はせますと、非常な事が起りさうに、心に暗示がありましたものを。偶然とは言ひながら、一の橋で逢つたばかりで、恁う言ふことに及んだのです。

其の結納の晩の事は、恁る神聖なる法廷で申上げられる事ではありませんし、又嘸お聞苦しからうと恐入ります。

十五

けれども刑事の方が、お聞取りになつたさうで、美波さんに逢ひましてから、橋の上で少時話をして居た、其は何う言ふ事を饒舌つたか、と御尋ねでありまするから、有りのまゝ申すのです。

私は醉つて居りました。

而して其時、饒舌りましたのは、唯今申しましたと寸分違ひません、結納の晩の事で。但直接其の人に其時の事を話すのでありますから、恁うでしたねえ、彼でしたねえ、と此の過去で、（ありましたねえ）を澤山に言ひました事を覺えて居ります。

これは、美波さんが、

（何時お目に懸りました切でしたつけ、）

と言つたのに就いて。

月明りに、其人を見ました時は、ハッと思つて飛退きました。何故か、今飲んだ水が毒になつて、其まゝ一命が終るのだらうと考へられたものですから。

（おゝ、志乃ちやんですか。）

と言ひかけて、其の時洋畫家は苦笑しつつ、

夫人が私の名を呼んで、

（お懐しい。）

と言はれたので、何も彼も忘れました。

其處で、其の（何時逢つた切だつたか。）を聞かれましたものですから、結納の晩の事を立續けに話しました。

あの晩（最うお別れですから。）と言ふのを聞きました時、呼吸が留まつたやうになつて、其までに年とともに積つた一切の事を皆忘れて了つたんです。不孝な兒は、何うして育つたかさへ覺えなくなりました。

習つた事も忘れました。ものの味も忘れました。それから唯目に見るまゝを繪に描いて、描いたものの色が映るだけの事をして活きて居たのです。

實際、夫人に逢ひましても、其の他に些とも何も話す事がなかつたのです。

けれども是だけは、何時か一度美波さんに逢つて話す機會があるだらう、とよもやながら、其だけは信じて居ました。人は屹と死ぬものに極つて居るのと、同一やうにです。

刑事は何と見ましたか、口を利いたのも大概は、私ばかりで、夫人は多く聞いて居られた方でした。だが、

（すつかり見違へました、大きくなつてねえ。）と言ふことを、二度も三度もおつしやつた。

成程、其の筒袖とくらべては、不思議に生意氣に袴なんぞ穿いて居たからでせう。

丈はおなじでありますのに。

其に好い外套が出來ましたね、と障つて見ながら、

（お父さんのお墓參りはなさいましたか。）

夫人の言は、大抵此のくらゐなものでした。

門口まで、釣瓶を提げて持つて參つて、最う其處で別れませうと思ひました時、何心なく、

（これからお臺所なんでございますか。）

と尋ねますと、

（否、）と言はれた聲が曇つて、しばらく途絶えて、

（主人が、茶を飲まうと申しますから。）

私は前後を忘じ、むら〳〵となつて、血がくわッと湧いたんです。何故、と聞かれましてもお答は出來かねます。

（貴女のお手傳をしたんです、御主人のなら厭です。）と、突然釣瓶を叩き着けて、自分の身體を振飛ばすやうに驅出して了ひました。

私は結納の晩に、別れてから以來と言ふもの、如何なる場合にも、我と言ふものを思出したことはありません。何も彼も忘れたからです。ものの味も分らないやうです。暑さも寒さも人ほどには感じなかつたかも知れません。それは私の製作しました繪を御覽になると分ります。たとへば、風のまゝ、水のまゝに柳が動くやうに、筆を持つた手を動かして、自然が使ふ自分は唯、繪の具のやうなものでした。

ですから、口惜しい事も、腹の立つ事も覺えなかつたのでありますのに、爾時ばかりは、腹が立つた。予は美の神の寵兒である、何等の故に、藤次輩の權助になつたのだらう、と思はず切齒をしたのです。人には屈從に過ぎると言はれますほどに、謙讓の德だけは誰にも讓らず、自分が使ひます女中さへ呼棄てには出來ないまでに、抑壓された生立ちでありますのに。

それから、學校へも參らないで、溫泉に參りましたのは、靜に神の禁斷を破つた罪を、身を淸めまして、待つて居る覺悟なのでありました。

恁やうに申しますからは、假令法の上の罪はありませんでも、私は道德の上の大罪人です。一旦口外しましたからは、我から世の制裁を受けます決心、些とも隱す事はないのです。

夫人は夫を毒殺なすつたと言ふ嫌疑ださうです。打明けて此の事を申しますのは、其の人の利益であらうと信じて申上げます。眞實の告白は最良の辯護だと存じまするから。

私は美波さんは、然やうな罪惡を犯す人でないと信じて居ります——けれども夫人が、もし實際其の夫を毒殺する意志があつて、私に手を貸せと云ふ相談がありましたとすれば、斷じてそれを肯はなかつたか何うか、斷言は出來ません。……

と興津志乃吉は述べたのであつた。

しかし、確に毒殺の共犯者と認めるよしの、檢事の論告があつた後、畫家の辯護士の申請に因つて、喜兵衞と言ふ老大工が出廷に及んだ。

是は夫人の實家方へ古くから出入りの棟梁。此の結納の夜、爰に被告の志乃吉の背を敲いて、（色氣が……）云々と、揶揄一番した爺である。

渠が證人として呼ばれたのは、志乃吉の、當初から夫人に戀して居たことを、其の時の記憶を陳べしむる事に因つて、證據立てようとしたわけではない。

十六

志乃吉が工業學校の教授として、東京から當地に着した日、旅店で落着くと其まゝ、父の菩提所へ參詣した。其の足で、昔馴染の喜兵衞をぢを見舞つたと言ふ。其の日は、歡迎會の直ぐ前の日に當るから、毒殺の事に就いて、夫人と打合はせなどする暇のない證明なので。

喜兵衞は確に證言した。而して此のをぢの口から、山名の家沒落の次第を聞いて、志乃吉の餘りの事に歎息をした次第から、お孃さまは、實家へ歸つてござる、と話した時、もぢ〳〵しながら、一度顏が見られようか、と言つて其の年をして赤面した事も、正直な爺は、場所がらも構はず、吃々笑ひながら申立てた。

生憎泊りがけに二三日何處へかござらしけえ、歸らつしやりさへすりや、逢はせるのは譯はねえ。それとも疾く見てえなら、內の孫娘が頂いて來て持つてるだ。知事樣や市長樣なぞと、一所に大勢で取ンなされた何とか會の時の、圓髷の寫眞があるけえ、見せませうか、と言へば、考へ込んで、否、其には及ばないとツて、久しぶりだ、ハイ、お持たせの酒一杯、と引留めたけんど、早々と歸らしつたに違えごとはねえ。

爾時貰えました二升の酒さ、ちびり〳〵未だ醉も醒めねえ內に、えらい事がはだかつた、と今

度は又目を圓くする。

酒屋を檢べると、酒の銘も、升も、値段も、日も、小賣帳にぴつたり合ふ。

雖然、是だけでは、其の日着いた事の、十分な反證にならぬ。表向は其日でも、內々何時の間にか土地へ入込んで、人知れず、夫人と媾曳をしたかも知れない。疑が猶晴れぬ。

ト最う一條、被告の爲に有益な事實があつた。それは、同日の汽車の中で、縣の代議士、何某に逢つたと言ふので。尤も志乃吉は其の代議士と、一面識があつたのではない、だけ、一層事柄が確められよう。

早や、停車場も七つ八つ、故郷の山の形が可懷しかつたので、自分の坐つた座を立つて、其の山のある方の、隅の硝子窓から覗いて居た。其の二等室は客が込んで、椅子は殘らずぎつしり充滿。頃刻して志乃吉が舊居た席へ掛けようとすると、先刻から、革鞄を下に、白い毛布を手に下げて、居處がなく立つて居た、上下大島揃ひで、白の羽織の紐をぶらりと結んで、鼻の低い、大顏の、眉毛の賤げに太い、目のぎろりとした大漢が、何時の間にか、占領に及んだばかりか、革鞄さへ引上げて、志乃吉の分は落してあつた。

熟と顏を見ると、見ない振して、革鞄の口を大きくばつくりと開けて、一つかみ書類を引出した中から、一通封を切つた手紙を出して、捻くつて見せた、上包みに達筆で、……縣代議士、何

某殿……と一面に記してあつた。

函嶺を越えると、恁う云ふ事は有勝である。志乃吉は、其の紳士が假令代議士でなくても、別に咎めようとはしなかつたに。

是見よがしの名は覺えて居た。

辯護士は其の代議士の出廷を望んだ。

十七

代議士は、法廷で、椅子を吳れい、とあつて、肥つた膝を、毛だらけな片胡坐。腕を組んで、鼻と目と、四ツの穴で、じろ〳〵と被告を見て、

（うむ、此奴、知つちよるヨ、）

と肩を聳して言つた。

判事は默つて頷いた。

却説また、お美波も、公判の時に陳べた事は、或點まで志乃吉の言と符節を合はせた。

それからである。

宣誓の上、瞳に一點の曇もない、淸しやかな目を伏せた、睫毛の露を拾へば、……

山名の主人藤次は、身の成行きを果敢み、且つ人に恥ぢて、夫人に情死を計つた。お美波は謹んで同意した。此の相談は、前夜花屋の婆が奥の間の隱住居に於て、降りしきる雨の中で極つたので。

其の相對死の手段は、恁く成り果てても持ち傳へた、茶の湯の器は不足ながら整ふから、今生の思出に、一つの茶碗を夫婦で飲んで、折からの靑葉の蔭に綠の泡と消えるとしよう。武士の切腹より、われらには却つて本懷と言ふ。

翌晩、卽ち一の橋の月の夜、家主の婆さんが用達に出かけた留守、いざ、此の時と、鐵瓶に湯を沸さうとすると、雨なり、さらぬだに水は惡し、井戸は淺し、柄杓にも及ばぬほど、溢れたのは、山吹の影も映るまい、まるで泥水。

是で火を消すも心持が惡かつたので、直ぐに其の釣瓶を提げて、月の橋を渡つた。恰も可、川音の此處が名に立つて、數寄の茶人は故とも汲む。土地の漢詩人などは、東坡が汲み欺いたとか云ふ、中峽と稱へて、水の味を隣國に誇る處。

けれども、此の水は、其の半ば、門口で志乃吉の爲に棄てられた。

釣瓶の水の、底にのみ殘つたのを見るに就けても、夫人が馴れない水仕の勞を思遣つて、藤次は是に泣いたのである。

毒は水から入れて、火鉢に掛けた。湯が沸ると、衣紋を直して、お美波は其處に端坐して、心靜かに一手前した。

柄杓を置いて、會釋する時、夫婦齊しく手を支いて、今生と別離を、目と目で告げたのであつた。

裁判長は恁う云ふ問を起す。

（刑事が入つた時、被告は客の席に居たのではないか。）

（はい、後で座を更へましたのでございます。）

（何ういふ時か。）

（私が立てて差上げましたのを、主人が二口飲みまして、此方へ參れ、と申して、自分の居ました處に呼びましてございます。）

（其處で座を更へたのか。）

と言ひかけて打頷き、

（茶碗には、被告の飲む分が殘つて居たか。）

（半分に些と少うなつて居りましたのを、主人が、主人の席へ、ちやんと坐り直りまして、片手膝につきまして、定の處へ据ゑて寄越しましてございます。）

（何故、飲まなかつたか。）

（……）

（被告はなぜ、それを約束通り飲まなかつたか。）

（……）

（飲まうとした處へ、刑事が行つて、それで機會を失つたのか。）

（否、然やうではございません。）

と、特に此の聲は愛々しく優しく聞えた。

（それでは飲む隙はあつたのぢや。）

（はい。）

（被告。）

と少しく調子を上げて、

（お前が逡巡するのを見て、主人は何とも言はなかつたか。）

（兩手を膝につきましたなり、熟と視めて居りました。）とさしうつむいて答へたのである。

裁判長は屹と見て、

（それから……）

十八

（其の中に、蒼白かつた主人の顔が紫色になりまして、アッと申して倒れました。私は夢中で突伏しましてございます。）

（相濟まんと思つてか。）

（何う云ふ考へでございましたか、私は些とも存じません。）

（夫婦で情死をしようと、主人が申した時、お前はそれを留めたか、何うか。）

（一人と申すではございません、一所にと申してくれましたから、留めは爲ませんでした。）

（快く同意をしたのぢやな。）

（最う家はなくなります、兒もございませず、何にも便がありませんのに、主人が死ぬ、と申します。あとへ殘りましても何の効もございませんから。）

（什麼心持がしたか。）

（何時も、恁うしてくれ、とつい手許の用をいひつけられます、其を致します時と、同じ心持でございました。）

（然るにぢや、何故、其の場合に臨んで、其の薄茶が飲めなかつたか、被告、）

と言を更めて、

（熟と前後を辨別へて申せ。自殺は天命を損ふ一種の罪惡ぢや、と心着いたか。）

（否）と、言下に答へたのであつた。

（注意して、間違のないやうに、いつはりを言つてはならん、何故、急に心が變つた。）

（心變りがいたしましたのではございません、少し時が延ばしたかつたのでございます。）

（時間が延したかつたとか。時間とは、）

（誰か門口に來ていらつしやるやうに存じましたものですから。）

（門口に……）

と稍其の威嚴ある顏を傾けつつ、

（何故、其の事を申して、主人も一所に留めなかつた。）

（主人は最う其の時は飲みましたあとでございました。それに、今死なうと申します時に、たとひ何でございましても、他所の男の方に、最う一度逢ふまで待つて欲しいとは、申憎うございました。）

（他所の……男とは、それは誰か。）

答は途絶えて、美波はしばらくしてから、

（……ですが是は些とも其の方が御存じの事ではないのでございます。唯私の心だけ。……）

（其の方とは……）

と膠なく疊みかけて問詰める。

（其の……志乃さんでございます。）

傍聽席は動搖をなした。嘗て此の事件に就いて、自から共犯者である、美波の密夫である、と自首して出て、色情狂の宣告を與へられた、盲人瀧山澤も、同じく其の席にあつたことを、こに注意して置かねばならぬ。

（被告、）

と呼んで、愼重なる音調もて、

（志乃さんとは、興津志乃吉の事か。）

（は、）

（お前が毒を飲まうとした時、何か、興津が門口へ來て居たのか。）

（否、其の方とは分りませんが、誰方か門口にいらつしやるやうな氣のいたしましたのが、其の方が戻つてお出でなすつたやうに、思はれましたのでございます。）

（戻つてとは、何處からか。）

（はい、）と美波は聞返した。

（いや、被告は、興津が戻つて來たやうな氣がいたしたと言ふではないか。）

（それは、あの、何處からとは知りませんが。）

（が、何處からか戻つて來たらう。）

（はい、）

と言つて、美波はおろ〳〵して居た。

（それは、何處か、）

（何、何處と申して、）

（既に戻つたらうと想像するには、心當りがなくてはならん。其の心當りを言はなきや不可んのだ。――あゝ、お掛けなさい。）

と、椅子を許した。ハタと背後へ崩折れると、兩袖で犇と面を祕した。狀を見ろ、と傍聽席で怒鳴つたのがある。公衆は瞳を集めて、其の聲する方を見たが、誰も盲人とは思はなかつた。其の內に醫師が來て介抱した。

恁くて漸く顏を上げた、美波の色は、うたゝ蒼白なるものであつた。

十九

（何と、何と申しまして宜うございますか、）

と惱ましげに帶の上を壓へながら、

（唯、あの、釣瓶を打棄つて驅出しておいでなさいましたのが、戻つておいでなすつたやうに思はれましたのでございます。）

（すると何か。何處からか、それは知れんが、興津が引返して來て、家の様子を伺つたんだな。）

（えゝ、）

（藤次を毒殺する様子を。）

（えゝ、）

（確乎と答をなさい。）

と大音にて、

（藤次を毒殺する様子を伺つて居たのか。）

（えゝ、）

（被告、氣を確に持たんと不可ん。興津志乃吉の身の上ぢや。）

夫人は夢が覺めたやうに、判然と其の美しい、漆黑な瞳を睜つた。

（興津は、門口で、藤次が毒を飲む様子を見て居たのぢやな。）

（まあ、）と吃驚した風情で、わな〳〵と其の肩が震へて、

（飛んだことを御意遊ばします。志乃さんは、何にも御存じはありません。）

（何故、戸外から内の様子を伺つたか。）

（否、怪我にも、そんなことはありませんです。）

（被告が今申したではないか。外に立つて居るやうだと……申した筈だ。）

（それは、唯、私ばかり、そんな心持がいたしましただけなんでございます。）

（何にも約束をせず、又十年ぶりで其の晩はじめて逢つたものが、引返して來て、門口に立つて居さうな心持は、何うして起つた？被告！）

と聲が高かつた。

美波は、はら〳〵と落涙して、犇と又胸を壓へて、

（どうぞ、お仕置を遊ばして下さいまし、私が心得違ひでございます。志乃さんは、可、可哀相に、……）

と聲がうるんで、

（何にも、何にも知つちや居ないのにね。）
裁判長は調子をかへて、もの和かに又尋ねたのである。
（お前が、飲んで、夫とともに死なうといふ水を汲みに出た、橋の上で、興津に逢つた時は、どんな、思がしたか。）
（……懐しう存じました。）
（否、其の事ではない。）
と卓子に胸を屈めて、前へ出るやうな姿勢になつて、
（死なうとする事に就いてぢや。）
（餘り思ひがけない方に逢ひましたので、つい其の事は忘れて居ました。）
（多時立話をしたと聞いたが、其の間に、情死の事については、何事も言はなかつたか。）
（はい、申します處ではございません。まるで其の事は忘れまして、昔いたした、賑かな、春の歌留多や双六の事が、目の前に見えまして、負けて口惜しかつたこと、勝つて嬉しかつた事、福笑ひの面形が可笑かつたり……したのでございます。）
（分れるまで、些とも思ひ出さなんだと申すのか。）
（はい、否、志乃さんが、釣瓶を落しました時、ハッと思ひますと、これで死ぬのか、と氣がつ

きまして、急に心寂しうなりました。
それからは色々なことを考へまして、これは、志乃さんが、私の死ぬのを、止めて下さるのぢやないか、と存じましたり、最う一度あの、立派にお成んなすつた御様子が見たかつたり、急に最う些と活きて居たい、と存じました。
ですが、支度は濟みました。主人も飲みました。私もと存じますと、志乃さんが引返して來て、門にお立ちのやうでなりませんから、せめて、一度顏を見て、と立たうかといたしましたけれど、主人が丁と坐つて居ります、其の内に……）
と言ひかけて、差俯向いた。
（萬一、それが興津で、其場へ參つて、お前の死を止めたら、何うしたか。）
（否、志乃さんではないのでございます、それは、あの……唯私が然う思ひましただけで、あの方は何にも御存じはございません。）
（唯假にぢや、假に然うしたらぢや、）
と裁判長は溫顏に笑を含んで聞いた。

二十

（はい、）

と言つて又少時默つた。傍聽席は寂然となつた。檢事は屹と被告を見た。辯護士はじり〳〵と膝を向けた。

（思ひ留ります。）

（思ひ留る？）

と聞返して、

（何、思ひ留まるか。）

（留めてくれました其の方に、罪がございませんければ。）

（自殺を留めるに罪はない。が、罪がなければ、思ひ留まるか。）

（は……い。）

（被告、お前の夫は傍に死んで居たのぢや、それでもか。）

美波の答に、辯護士は茫然とした。檢事はすつくと起上つた。

法廷は、興津志乃吉に無罪を宣告した。

けれども畫家が、最早工業學校繪畫部の教頭でないことは云ふまでもない。其の影を隱したの

を、尙追跡して、土地の、正義團、矯風會などの壯士が、社會の制裁を加ふると稱して、東京までも奔走したが、遂に形影を捉へ得なかつたのである。

山名夫人美波子の罪狀は、讀者の想像に任せよう。お美波は公判廷に於ける最後の一言で、然らぬだに纔に黑髮の末に一縷つながつたばかりの同情の磐石は、奈落の底に切斷されて、新聞紙は二十世紀の刑法に十字架のないのを惜み、且つ檢事は控訴する（由）と記して、一般の喝采を得たけれども、しかし此の（由）は、唯讀んで字の如しであつた。

刑の名は確か然うではなかつたが、公衆は夫人を夫殺しと號した。雨も風もない年も、痛罵の怒號は轟々と、白日に且つ暴れに暴れて、土砂を捲き、樹を搖つて居たのである。

時維れ……午前七時、刑期滿ちて獄を出されようとする時刻些と前に、犇々と詰懸けた公衆の中を通つて、緋の法衣に紫の輪袈裟掛けたる、本願寺派の僧侶を眞中に、前後に連つて、同勢三十名ばかりの一行が靜々と練つて來て、女囚が其處から放たれる、監獄の裏門の高き土塀に添うて留まつた。

是は、報恩奉佛と、頭へ韻を踏んだ割書で、大きく佛教團と書く、團體から派出された、お美波を迎ひの行列であつた。此の團體には縣の貴婦人の連名が多いのだけれども、さすがに白襟も三枚襲も此の同勢の中には見えずに、一人白髮の切髮で、ずんぐり肥つた婆の、鼠の紬の被布に

黒のカシミヤの袴を裙長に穿いたのが、緋の法衣とともに異彩を放つ。此の婆さんは、特志で監獄へ入つて罪人を教化などする薩摩辯の達者もので、某男爵とかの後室で、渾名を勳章婆々と稱へる、（今其の被布の上に胸にさげた二つのキラ〳〵するのが其れで）佛教團の幹事である。あとは屈竟の壯士輩。いづれも矯風會、正義團の歴々方で、詮ずるに三派合同の一行が入交つて此處に押寄せた次第である。

是より先、苦役中に花もしぼまず、美波が舊の姿で世に出ると云ふ事になると、式の如き毒婦の形骸は燒いて粉にしても空氣を汚すと、昔佛蘭西に起つた、フウドル・ド・サクセッションの其よりも忌はしがつて、正義團の人々などは、假令法律は淫婦を死刑に處さなくつても、社會の制裁は生けて置かぬ、と喚いたのであつた。罪人でも人を殺せば、自分も死なければならない事は明であるが、正義の二字に對して死をだも顧みぬに不思議はなからう。

此の勢に恐をなして、お美波の實家も娘を引取るに躊躇した。否、社會の制裁の下に餘儀なくされたのである。

時に佛教團の貴婦人が計らひで、正義矯風の三派の前に、其の生命ごひを種々交渉の末、お美波を監獄の門に迎へて、立處に其の黒髪を斷つて、其場から然るべき監督の下に、一生尼寺に推籠めようといふことに妥協されたのであつた。新聞紙は貴婦人がたの博愛を、口を極めて讃歎した。恁う云ふことは、人に賴まれてするわけではない、其處で、博愛になる。誰も賴まないことをする、其處で、慈善ともいふのであらう、けれども沙汰の限りである。電車の燒打などと一般に。

二十一

盲人、（最う名告つても可からう）瀧山澤夫が控込んだ、荒物屋の店から、丁ど其の正面に見える。委にあらゆる群集を數珠繋ぎにして、一處へ線を纏めて犇と蓋したやうな灰色の門は、透間なくひた〳〵と鐵の釘隱を鎧うて、天地は長に幽冥の戸を開かず、明暗兩ながら內部は神祕であるかの如くである。

洵や、監獄の裏門は、舊藩の牢の表門を、其まゝ裏木戸に使つたので、雨の夜には、異類異形なる惡鬼の髣髴として露るゝ、色々の形に土の裂けた一帶の土塀は、冬木立の梢の如き參差とした忍返しの釘を貫き揃へて、空を飛ぶ鴉の胸も刺し通すべく左右に連り、一方は野墓を控へ、一方は次第高に坂にかゝつて、塹壕を抱いて畝つて居る。濠の水は流れずに、異臭を放つ塀の前の深溝には、今も兎もすれば鬼火が燃える。

此處を通らねば行けないから、彼處に曇天の如く空に横はる坂の上の、やがて公園にしようと

いふ設計のある高原を稱して、襄の河原と呼んだ。坂の下口から濠へ廻る土塀の角は、鬼の腕が出て摑むといつて、心弱いものは、今時分も一人では通らぬ。

されば此の群集ながら、處がらか寂寞して靜まり返つて居る。或は毒婦の姿を見てから、怒號の絶叫を發するために、音聲の有るが丈を、蓄積して居たかも分らぬ。

雨がぽつりと來た。

彈丸が落ちたやうに、處々、ぷす〳〵と小さな砂煙の輪が飛んだ。坂へ懸けて、一幅の黄色な砂が空ざまに吹いて通る。

日は監獄の釘隱を、怪しげに照らして居た。

雨がぱら〳〵と斜に。

風が颯と馳せた。

途端にピイーと、何處のか汽笛が唐突に空天に鳴り出した時であつた。是に度膽を拔かれた群集は、二度吃驚して、電かと思つた。斜にキラリと裂けたのは鐵のごとき横手なる潛門で、蒼き凄冷な光の、人目を射て閃いたのは、裡に籠つた祕密の風の、世の空氣に激觸した現象であらう。

唯見ると、巖の壁の如く、咄嗟に密閉された板戸の前に、夫人の姿は朦朧として描かれた——

月の世界は麗人を投げ落した。幽幻の扉は、蜃氣樓中の佳人を吐出したのである。

「出たぜ、」

と旅商人が飛上つた。

「ど、どれ、どれ、」

と其の肩に摑つて、ぬつくと立上つた盲人の足は、早や店前一杯の人の動搖む中に、高帽子とともにふら〳〵と幽靈の如くふらついた。

「どんな風で、ど、どんな風で、」

と其の肩にぬつぺりとした顏を重ねて、耳に口を差附けてしがみつくやうにする、呼吸の臭さに、旅商人はぶる〳〵と顏を掉つた。

「些と遠い。あゝ、向うむきになつて、了つた。」

夫人の姿は細りして、氷の如き門の扉に其の前髪をひたとつけた。黑髪の透間から雪なす色の漏れたのは、面を蔽うた掌に隱し餘つた片頰である。

末廣がりの扇の紙の、要をさして纏まる如く、一同の足は盲人まじりに、ぞろ〳〵と門をさして寄合うた。

眞先に出たのは太い杖で、續いて蹈出したのは袴穿いた皺びた脚で、直ぐに見えたのは勳章で、

切髪の尖が、犬の尾のやうに搖いで出る。
勳章婆々は、大溝に渡した缺け〳〵た石の橋を渡りかけて、其處だけ暗い、押入のやうな門の屋根の中へ、及び腰に前へ屈みながら、太い杖をづッと伸ばして、顏を隱したお美波の背中へ、其のさきを達かせた。
是で引出さうとするのである。此の大慈悲の救主がないと、地獄の口は、再び其の美しい罪人を啣へ込みさうに見えたから。

二十二

緋の法衣は迷惑さうに其の背後に控へた。矯風正義の人々は、續いて一列に垣を造る。
「これ、これ、」
と、ものを云ふ勳章婆々の頰の肉は、だぶ〳〵と黃色に搖れて、
「これ、この杖に縋らつしやい。難有い事にの、佛敎團で、お前を救うて遣るのぢや。貴い方たちが、如來のお手でお助けなさるゝのぢや、これ、縋らつしやい。」
と喪章の切が、燈明の灯影に搖らるゝ狀に、震へて居た、今も同一い、細い雨紐の紫紺のお召縮緬の、見るから棺の中から引出されたやうに、影の薄い羽織の上から、

「これ、此方向かつしやい、聞えんか。」
と觸れば縋れさうな細腰をぐい〳〵と突くと、是が膚身に應へたか、肩が落ちて、ハッと其の杖の尖を拂ふやうに手に取つて、振向いた。色は拔けるほど白くなつて、いくらか少くなつたらうと思はるゝ黑髪が、薄くなつただけ、束ね髪の品が好く、眉が一際濃くなつて、蔦たさは一層倍した。二かは目が目に立つほど一體に面痩せしたが、紅をさしたやうな唇あたり、淡く憂の影がかゝつて、淺葱の襟の若々と、近優する俤に、群集はハッと美に打たれて、火事場に月を仰ぐ思である。
毒婦と呼び、淫婦と叫び、殺せ、殺せと喚くのが、遠く隔つた方から聞えて、哄と騷ぎの烈しくなつたは、一つは雨の、やゝ亂れ落つる所爲であらう。
縋れ、と婆々が突出した其の杖にかけた手を、拂ひもせず、鬢を肩にあて、腮を衣紋につけて、打傾いて俯向きながら、襟のかゝつた絲織の袷に、白の勝つた茶博多の帶胸高く、翁格子の前垂の藤色の裏ばかり、足の運びにひら〳〵と捌いて、靜々と橋を渡る。
お美波は心に、自分のやうな罪人は、恁うした杖に導かれるのが、世の掟ぞと思つたので。
待構へた緋の法衣が、手首に數珠をかけた手で、少し引立てるやうにして、空ざまに夫人の手を握つた。

壯士は前後を取卷いた。風が颯と……揉立てられた美波の姿は、藻屑の中から枝珊瑚珠、荒浪に搖らるゝ狀して、潑と砂煙立つ折こそあれ。

群集ばら〳〵と左右に散つて、瞳を放てば坂かけて、賽河原を空に見るまで、灰色に赤味のさした、大幅の道一條、廣々と開けたたゞ中、雪を積んで重ねた上に、護謨を塗つて築けるごとき、山に似たる大肉團。

之は、そも何等のものぞ。

鼻を以て堤防を繞らし、耳を以て旗となし、頭を以て櫓となし、六尺二叉の戟を植ゑたる、唯見る城の如き大白象。高く土塀に聳えた背に、茶の外套の襟を立てて、おなじ色の帽を目深に、爪尖鎌の刃の如き鋭なるなめし皮の長靴を穿いて、横さまに腰かけたる一員の將軍を安置して、坂の上から唯霰雲の徐々として空に漲る狀に、次第に此處に來たのである。僅に其の前脚をずばと上ぐるさへ、――此の記事を記した、その枚の――輪廓を越すばかり。

やあ〳〵、坂の上の見世物だ、口上いひが乘つて來た、と雪頽を打つて口々に絶叫する、見物の中を、象の横合から衝と出て、颯と驅拔けた魔物がある。

褐色の布をくる〳〵と頭に卷いて、喧嘩かぶりの如くにした、膝までの蒼い洋袴で、露出の脛は牛の如く、雨に露に塵埃に汚れには汚れたが、緋羅紗の外套、唇簾のやうに飜して、腰に銀色の燦爛たる長劍を横へた、眼の色金色にして髯赤く、鼻は狐の如く高く尖つて、顏の黑さ煤に擬ひ、身の丈六尺に垂たる奇怪なる外來の客。

亞剌比亞人よ、印度人だ、ソレ黑奴が、といふ内に、通魔の閃いて過ぎたと見ると、夫人を引立てた緋の法衣の僧正の、背へ乘越すやうに上から覗いて、天窓から鬼一口、豹の唸るが如き聲して、喝と叫んだ。

二十三

ワッと言つて僧正は、頭を壓へて眞俯向けになる。

婆々は尻餅を搗いた。

夫人の身は倒れぬ前に、横さまに緋羅紗をかけて抱かれた時、象の脚は圓を描いて其處で止まつた。

爾時輕々と、腰をさゝげられた夫人の肩へ、上から徐ら手が懸ると、象の背へ搔乘せた。裳が向うへすらりと靡いて、姿はしなやかに仰向けになつたが、腰のあたりで背筋が捩れて、半ば起上らうとした、顏は、片膝を胡坐した男の膝に突伏した。其の黑髮と、焦茶の筒袴との間に、五指の白きが戰くのである。

亞剌比亞の象つかひは、立直つて手綱を控へた。白象の鼻は、龍の昇るが如く、折から次第に雲かさなる仄暗き空ざまに、蜿蜒として監獄の門を擢いて、次回興行の開かるべき前途の山を指すのであつた。

譬へば洋海の荒浪を乘切り通る、白き色の艦の如く、市民が怒號のあれ荒ぶ、あらしの中を悠悠として、のつしと過るを、怒髪冠を衝く壯士輩も、一指を加ふることを得なんだ。惡く礫でも打つて見ろ、四五十人は立處に踏殺されよう。

二の橋を一杯に、渡果てると、俯向けの帽子を少しずらして、象の背なる丈夫は、夫人を片手に抱いたまゝ、手巾で其の額を拭つた。群集は散つた。雨が烈しく降出したので、夫人の上へも男の肩へも、護謨引の黑い布の雨具がかゝる。

準備は此のくらゐの事ではない。象に振分けにした大貨物の中には、鍋釜はじめ、皿小鉢、米、鹽、鑵詰の飲食物、寢道具はいふに及ばず、長棹にからんで、大旗の如く捲き込んで、騎の腹に着けたのは、見世物小屋にも住家にもなる天幕であつた。

男兒三年間獻身的の經營に、此のくらゐなことは怪むに足りまい。夫人が同じ年苦役の間に、海外で獲得して齎し歸つた興津志乃吉の土產である。

晚景、町端で雨が上つて、地平線上に一顆夕日の紅玉落ち、濕ひたる雲の桃色美しき並木の中、

青田の末に海を劃つて、東海道の空に入る、浪なす一帶の山脈に、白象は其の白き滑かなる背を並べて、松と松との奧深く、一團の霞となり行くほどに、

何處もかはらぬ戀路のならひ、
雨が降らうが日が暮りよが。
何とそんなもんぢやないかないか象よ。
ホンニ一寸さきや暗夜の世だけれど、
思や人目のないが增。
何とそんなもんぢやないかないか象よ。
たとひ人目があらうとまゝよ、
二人顏さへ見ればよい。
脚が四つと誹らば誹れ、
姿二つに氣はひとつ。
何とそんなもんぢやないかないか象よ。
死んで蓮の花借ろよりも、
象の背中の四疊半。

友よ安かれ、家主は俺だ。
たとひ形は鬼でも魔でも、
おなじ思ひのわしぢやもの。
何とそんなもんぢやないかない象よ。
寝籠揺ぶる子守唄やめば、
寝物語がしたくなる。
よしや他人の睦言なりと、
木の根枕に聞いて寝よう。
何とそんなもんぢやないかない象よ。
こゝは日本といふ處、
鞭をば高らかに上げつつ唄ふ、亞剌比亞人の蠻歌は、奇鳥の聲の幽林を鳴らすが如く、谺を返して響き渡つた。
四五町後から結束した八九人、屈竟な壯士は、淫婦姦夫を唯置くまじき、正義團の有志である。
一人おくれて、黄昏をとぼ〳〵と、影の如く通るもの、知る是れ、盲人瀧山澤夫。
[illegible]れの[illegible]を離れた、唯ある嶺守の森の彼方に、湧き細瀧の音がして、雨上りの月光に、白

銀の如き水の色の前に横はつた處で、一聲高く口笛を鳴らすと、象はハタと止まつた。
鞭が光ると、靜に前足を折つて、夕月は一隈消殘つた雪を照らした。
志乃吉は、夫人を助けて、ともに下りた。
天幕が張られ、調度が運ばれ、焚火が出來るまで、亞剌比亞人の働きは迅速に且つ活潑に、馴れたもので。役目が濟むと、二人を離れて、象の腹に背を凭せて、よりかゝり、兩足を小兒のやうに投出して、仰向けに月を仰いだ髭の中へ、衣兜から壜を出して、薫高き酒を注いだ。
其の焚火に映つた、夫人の顏は、はじめて目のふちに紅が見えた。バケツを提げて、のそ〳〵と流へ出かけて、志乃吉が一杯提げて立直つた處へ、扱帶を解いて肩にかけて、お美波は腕白く乳のわきに結びながら、急足に追着いて、ト顏を見合せると、前後十幾年の間に、はじめて相逢つて泣いた。
亞剌比亞人は、ごろりと仰向けに寝轉んだが、森の中から種々な頭が出て此方を伺ふと、むくむくと起直つた。
ざわ〳〵と音がして、壯士の且つ進み且つ退く氣勢がするのを、苦笑ひして唯其の黄なる星の如き一雙の眼を光らすのみであつたが、盲人の顏が、ぬつと出た時、襲はれたやうにすつくと起きて、屹と突立つたと思ふと、腰なる白銀の鞘をするりと拂つて、氣を附け！にキラリと取つた。

二人は靜に晩飯の支度。

二十四

「えゝ、魂消た、これ驚かしちや不可ねえだよ、いくらハイこんな、片田舍の山國だつて、大日本だあ、象が出て堪るもんか、馬鹿にするもんでねえ。」

と年嵩の一人の獵師は、手にした鐵砲の臺尻を捻くりながら、口叱言のやうに言つた。

一叢茂つた樹立の中から、目の下に、谷を貫いて麓に通ずる、海道筋でも、繪にも物語にも山の中に隱れた、一町の故道を前に、白壁の土藏のついた、可なり大きい一軒家が、盆の上に乘つたやうに、四邊を森に圍まれつつ瞰下さるゝ、恰も狹間の山の上で。

「それでは、何を見ようと思つて、大勢こんな處に集つて居なさるんだ。」

と嗄びた聲して聞いたのは、見紛ふ方なき瀧山澤夫で、體裁恰好は、故鄕を出た時其のまゝであるが、彼是五十里餘も離れた處で、日數も大分かゝつたから、髭が伸び、目が窪んで、繕はぬ白襟のはだかつた下に、蒼黑い胸が、ものをいふ度に動悸が打つて、肋骨に響くのである。

獵師の爺は、其の容子をじろ〳〵と視めながら、

「何をツて、怪物よ。」

と言つて、異な顏をして夥伴同士面を見合ふ。夥伴はともに五人居た。くす〳〵と土を嗅ぎ、ぞそ〳〵と樹の根を穿つて、時々ぶる〳〵と胴震ひをするのは獵犬で、屈强な地犬に、洋種も交つて、これも五疋。手に手に五條の綱を控へて、五人の獵師は、くるりと盲人を輪取つて居る。

盲人は鼻の頭に、例のせゝら笑ひをして、

「象は居まいもんでもない、獸類ぢやからな。何處に怪物が居るものか。」

「然う言ふがね、然うおつしやるがね、」

と獵人の一人は、癪に障つたらしく突懸るやうに、

「それが居るから怪物だア、正體が知れねえだ。體が知れねえから、恁うやつて眼張つとるだ。」

「どんな事をする怪物だな、はゝゝゝはゝ、」

と冷笑ふ。と忌々しさうに、又一人、

「どんなツて、そんなこツちやねえ、なあ、爺樣。」

「むゝ、己も此の年紀になるが聞いた事はねえ。希代な譯よ、お前樣には見えめえが、此の眞下に一軒昔の庄屋樣の家があるだ。」

「むう、むう、庄屋の一軒家が、」

と目に見えるやうに打頷く。

「其處の息子どんが、此の間嫁を娶らしつたわ。何が、評判の別嬪よ。若いものさ、皆指を啣へたてね、まあ、そんな事は何うでも可え。

親類廻りをさつせえて、つい此の間の事よ。嫁婿がハイ内へ歸つて、先づ其の他所行を脱いでよ、爐ばたに茶一つ飲む間さなえ、小便から出た嫁殿が、其の他所行さ疊まうとすると、敷居一つ其方へ脱いだのが、丸帶から、扱帶から、裾模様の京染の小袖ぐるみ。婿殿は袴だけ脱いだつけな、其の袴と一所に、綺麗に掃いたやうにお前様、影も形もねえだ。

家内中總立ちになつて騒いだつけ。もの何んと、納屋の隅ッ子の大きな糠味噌桶ン中へ、一纏めにして突込んであッけえ、可恐しい。其の納屋の屋根さ、ちいら〳〵風に舞つてるのは、嫁御の紅い褌だあ。

それからよ、夜さり寢てござると、二人の上へ屏風が突轉ぶ、枕がひよいと飛ぶ、行燈が驅出す。石臼が地鞴踏むだ。親仁様は寢たなりで、どつこいしよ、と土間の藁の上へ持つて行かれる。婆様は目が醒めると、圍爐裏の中に坐つてござる。火がないから可いやうなものの、生命がけの怪物だあえ。

先祖代々一向宗で、二十八日には精進を缺かさねえ、神佛の祟うける筈ウねえだ。

畜生めが、狐狸の業だつぺえと、戰爭に行つて來さしつた新屋の一等卒どの、それは豪え、鐵

砲痕二つある村一番の兄アだ。

鬼門の隅にしつかり構へて、藪の方へ鐵砲さ向けて、さア來い、と構へたと思はつせえ。眠るでもねえにお前様、其の鐵砲他愛がねえ。手の上にありやあるが、紙を乘ッけたほどにも感じねえで、煙を持つてるやうだッけの、おや、と思ふと、最うずる〳〵と障子の穴から拔出いて、背戸さ、ひとりで歩行いて行くだ。」

と目の見えぬものにも丁寧に、己が鐵砲を山に這はせて。

二十五

「餘りの事に、村中ひつそりして、咳するばかりになつたが、庄家様が、がたびしは鎭まらねえ。段々に酷くなつて、どさり〳〵屋根さ打拔くやうな大石が打つかる。梁から鋸屑が落ちるな、みしみし家鳴震動だ。

氣イ着けるものがあつて、郡の方に、稻荷さげする婆さまがあるもんだで、賴んで來て佛間へ据ゑたが、私等も見に行つけえ。ハア爭はれねえもんだ。合掌した數珠の輪が、桶箍が刎ねたやうに額の上へ押立つたッけえ。ぶる〳〵と震へると、石のやうに固つた、女の糸の平内様だね。

はい、伺ひます、と問ふ方ぢや恐る〳〵低い聲で、手をついて言ふのぢやが、こゝが乘移つた

證據にや、右の婆さま名代の聾だがね、其の時ばかりは鼻息も聞きつけるだ。
伺ふとか。ハイ。貴様は何者ぢや。當家亭主にござります。亭主か。何歳ぢや、といくつを何歳ぢやッて豪え事知つとるだ。だけんども、何も分らねえ。怪物の正體は分らん、貴様たち心の迷ひぢや、と言はつしやるばッかりだよ。
心の迷ひに、鍋釜の踊る法はねえね。
是さなんねえと、今度は神主様呼んで來たが、御幣が御酒徳利の中で躍り踊つたで。やあ、こりや、夥伴だつぺいし、鍋釜さ踊るのとお友達ぢやで、様子が知れべい、と思ふと矢張り分らねえ。
別に祟はない。御祈禱はして置いた、六根清淨と申す、六根を清淨にいたせ、とあつて、何うしてこれ五臟六腑が洗へるもんだよ。
三度目に來たのは、豪え易者さ。諸國修行さつしやる行者で、何でもクン〳〵と嗅いで當さつしやる。薄痘痕のある四十恰好の、書生帶〆めた、先生だつけ。
お供についたのがたのもしかつたよ。五十あまりの大坊主だッけ。手ッ首まで倶利迦羅紋々のほりものだね、いらたか數珠さ首から胴へ輪がけにして、脊の高さ六尺もあッつらう。
格幅だけでも怪物は退散しさうだッけがね。

先生さ、天井の隅から、釜前、縁側など、懐手で、クス〳〵と嗅いで廻らしつけえ。
別條はねえの。
御意で、と供の大坊主が言ふだね。
アバタとテキが大分に居るが、と又クンと嗅いで、こいらは、しかし業をする譯はねえ。いや、何にも祟ではないやうだ、と又言はつしやつた。
アバタが蛇で、テキは鼬だとの。えてものの渾名まで御存じの先生にも分らずじまひで、騒動は未だに納らねえだよ。
氣味イ悪くッて家にや居られねえで、庄屋殿ぢや、昨夜から、外へ出て遠くから屋の棟を眺めて居るだね。
其處でハイ、私等獵夫夥伴が頼まれて、恁うやつて高い路から森を透かいて狙つてるだ。影でも見えたら、遁がしッこねえ、と思ふだに、風もなくッて、ハア樹の葉も落ちねえ。
形のねえものだつぺしが、怪物にや相違あんめえ。お前様、現に恁うやつて、獵夫夥伴の一粒選が、手ン手に自慢の犬を引張つて、集つてるのが證據でねえかね。」
「聞いた話でねえ、見た事だア。」と、少いのが言ひ足して意氣込んだ。
言葉の切れるを待つたやうに、ニヤリと尻について頭を擡げて、

「それだから、象を待つて居るかと聞いたのぢや。」と指を折るやうにして、打傾いて、
「彼是晩方だな。」
「山は蔭つたよ。」と云つて、其の容子を訝つた。中には擔いだ鐵砲とともに、首を傾げて居るのがある。
盲人は獨り打頷いて、
「最う、そろ〳〵來る、」と呟いた。顔の色は、其の相好とともに、極めて險惡なものであつた。
「えゝ、何が來るだ。」と不氣味さうな聲を出したものさへある。
「否、そろ〳〵見える時分だ。逢魔が時ぢやわ。」と杖を握つて、ぬつと立つて、麓の道を考へながら、
「怪物ではないと言ふのぢや。これ、其の業は魔が爲す事ぢや。
これ、お前たちは知らんのか、其の魔物と云ふのは、眞白な象ぢや。」
「象、」と顔を見合はせる。
「其の象の背に、綺麗な、お姫樣のやうな婦女と、三十恰好の男が、抱合つて、影のやうに乘つて居る。」
一同これに悚氣とする、息の氣勢を聞澄まして、

「まだある。緋色の風呂敷やうのものを被つたものが、象の前に立つて居るわ。見えぬか、むう、お前たちには見えまい。私には見える。これ盲目には見えるぞ。不義、非道な惡魔ぢや、世を亂す鬼神ぢや、人道の敵ぢや、憎い奴等ぢや、不、不埒な畜生、」
とコト〳〵と杖で大地を敲いて、躍り上つて、白眼で黑息を吐いた。
頭を揃へて、犬が一齊に森を衝いて、背を立てて、びやう〳〵と吠えると同時に、……今や暮れる、四邊は颯と黃色になつた。
「やあ、象が、」と獵夫の一人は絕叫した。
「見えたか。打て、打て！」と杖を揮つて、盲人は二三尺宙に飛んだ。五人一度に折敷いた。
淫婦姦夫は其處が最後の場であつたと聞く。
記者は人道のために、其の事實なるを信ぜむと欲す。否正に然あるべきなりと、土地の新聞紙は報道した。が、五名の獵師が過失で人を殺傷した風說は、諸國に聞いて露ほどもなかつた。殊に一頭の巨象と、一人の外國人が附隨して居るのに。
但盲人の、其の日故鄕を出た切、未だ歸らぬのは實である。恐らく長に續くべき奇怪なる新婚旅行のあとを追うて、睦言を聞いて憤死するまで、今もとぼ〳〵と歩行いて居よう。

縁結び

一

襖を開けて、旅館の女中が、

「旦那、」

と上調子の尻上りに云つて、坐りもやらず莞爾と笑ひかける。

「用かい。」

と此の八疊で應じたのは三十ばかりの品の可い男で、紺の勝つた絲織の大名縞の袷に、浴衣を襲ねたは、今しがた湯から上つたので、其なりでは些と薄ら寒し、着換へるも面倒なりで、亂箱に疊むであつた着物を無造作に引摺出して、上着だけ引剝いで着込んだ證據に、襦袢も羽織も床の間を辷つて、坐蒲團の傍まで散々のしだらなさ。帶もぐる〳〵卷き、胡坐で火鉢に頰杖して、當日の東雲御覽といふ、一寸變つた題の、土地の新聞を讀むで居た。

其の二の面の二段目から三段へかけて出て居る、清川謙造氏講演、とあるのが此の人物である。たとひ地方でも何でも、新聞は早朝に出る。其の東雲御覽を、今や是午後二時。然るにても朝

寢のほど、昨日の其の講演會の歸途のほども量られる。

「御客様でございますよう。」

と女中は其の思入たつぷりの取次を、些とも先方氣が着かずで、つい通りの返事をされたもどかしさに、聲で威して甲走る。

吃驚して、ひよいと顏を上げると、横合から硝子窓へ照々と當る日が、片頰へ赫と射したので、ぱち〳〵と瞬いた。

「そんなに吃驚なさいませんでも可うございます。」

と猶更可笑がる。

謙造は一向眞面目で、

「何といふ人だ。名札はあるかい。」

「否、名札なんか用りません。誰も知らないものののない方でございます。ほゝゝ、」

「そりや知らないもののない人かも知れんがね、他所から來た私にや、名を聞かなくつちや分らんぢやないか、誰方だよ。」

と眉を顰める。

「そんな顏をなすつたつて可うございます。些とも恐くはありませんわ。今に直にニヤ〳〵とお

笑ひなさらうと思つて。昨夜あんなに晩うくお歸りなさいました癖に、」
「否、」
と謙造は片頬を撫でて、
「まあ、可いから。誰だといふに、取次がお前、そんなに待たして置いちや失禮だらう。」
些と躾めるやうに言ふと、一層頬邊の色を濃くして、益々氣勢込むで、
「何、貴客、些と待たして置きます方が却つて可いんでございますよ。晝間ッから貴客、何ですわ。」
と厭な目つきで又ニヤリで、
「眞個は夜來る方が可いんだのに。フン、フン、フン、」
突然川柳で折紙つきの、(あり)といふ鼻をひこつかせて、
「旦那、まあ、まあ、まあ、あら良い香ひ、何て香水を召したんでございます。フン、」
といひ方が仰山なのに、此方もつい釣込まれて、
「何處にも香水なんぞありはしないよ。」
「ぢや、あの床の間の花か知ら、」
と一歩首を突込みながら、

「花と云へば、貴客お逢ひ遊ばすのでございませうね、お通し申しましても宜いんですね。」
「串戲ぢやない。何といふ人だといふに、」
「あれ、名なんぞ何うでもよろしいぢやありませんか。お逢ひなされば分るんですもの。」
「どんな人だよ、じれつたい。」
「先方もじれつたがつて居りませうよ。」
「婦人か。」
と唐突に尋ねた。
「ほら、ほら、」
と袂を其の、ほら〳〵と煽つてかゝつて、
「御存じの癖に、」
「どんな婦人だ。」
と尋ねた時、謙造の顏が颯と暗くなつた。新聞を窓へ翳したのである。
「お氣の毒樣。」

二

「何だ、最う歸つたのか。」
「えゝ、」
「だつてお氣の毒樣だと云ふぢやないか。」
「眞個に性急でいらつしやるよ。誰も歸つたとも何とも申上げはしませんのに。否、然うぢやないんですよ、お氣の毒樣だと申しましたのは、貴客は屹と美しい姉さんだと思つておいでなさいませう。でせう、でせう。
處が、どうして、跛で、めつかちで、出尻で、おまけに、」
といひかけて、又フンと嗅いで、
「眞個にどうしたら、こんな良い匂が、」
とひよいと横を向いて顏を廊下へ出したと思ふと、ぎよツとしたやうに戸口を開いて、斜ツかけに、
「あら、まあ！」
「お伺ひ下すつて？」
と内端ながら判然とした淸い聲が、壁に附いて廊下で聞える。
女中はぽツとした顏色で、

「まあ！」
「お帳場にお待ち申して居りましたんですけれども、おかみさんが二階へ行つて可いから、と然うおつしやつて下さいましたもんですから……」
と優容な物腰。大概、莟から咲きかゝつたまで、花の香を傳へたから、跛も、めつかちも聞いたであらうに、仂なく笑ひもせなんだ、包ましやかな人柄である。
「お目にかゝられますでせうか。」
「御勝手になさいまし。」
くるりと入口へ仕切られた背中になると、襖の棧が外れたやうに、其の縱縞が消えるが疾いか、廊下を、ばた、ばた、ばた、どたん也。
「お入ンなさい、」
「は、」
と幽かに聞いて、火鉢に手をかけ、入口をぐつと仰いで、優い顏で、
「御遠慮なく……私は淸川謙造です。」
と念のために一ツ名乘る。
「御免下さいまし、」

はらりと沈むだ衣の音で、早入口へ丁と兩手を。肩がしなやかに袂の尖、搖れつゝ疊に敷いたのは、藤の房の丈長く末濃に靡いた裝である。

文金の高髷ふつくりした前髪で、白茶地に秋の野を織出した繻珍の丸帶、薄手にしめた帶腰柔に、膝を入口に支いて會釋した。背負上げの緋縮緬こそ脇あけを漏る雪の膚に稻妻の如く閃いたれ、愛嬌の露もしつとりと、ものあはれに俯向いた其の姿、片手に文箱を捧げぬばかり、天晴、風采、池田の宿より朝顏が參つて候。

謙造は、一目見て、紛ふべくもあらず、それと知つた。

此の藝妓は、昨夜の宴會の餘興にとて、催しのあつた熊野の踊に、朝顏に扮した美人である。女主人公の熊野を勤めた婦人は、此のお腰元に較べて太く品形が劣つて居たので、何故あの瓢簞のやうなのがシテをする。根占の花に蹴落されて色の無さよ、と怪んで聞くと、藝も容色も立優つた朝顏だけれど、——名はお君といふ——其の妓は熊野を踊ると、後で屹と煩らふとの事。仔細を聞くと、然せる境遇であるために、親の死目に合はなかつたからであらう、と云つた。

不幸で沈むだと名乘る淵はないけれども、孝心なと聞けば可懷しい流れの花の、旅の衣の俤に立つたのが、しがらみかゝる部屋の入口。

謙造はいそ〳〵と、

「何うして。さあ、此方へ。」

と行儀わるく、火鉢を斜めに押出しながら、

「ずつとお入んなさい、構やしません。」

「はい。」

「まあ、何うしてね、お前さん、驚いた。」と思はず云つて、心着くと、お君はげつそりと又姿が痩せて、極りの惡さうに小さくなつて、

「濟みませんこと。」

「いや〳〵、驚いたつて、何に、其の驚いたんぢやない。はゝはゝ、吃驚したんぢやないよ。まあ、よく來たねえ。」

三

「其の事で。あゝ、成程言ひましたよ。」

と火鉢の緣に輕く肱を凭たせて、謙造は微笑みながら、

「本來なら、こりやお前さんがたが、客へお世辭に云ふ事だつたね。誰かに肖て居らつしやるなぞと思はせぶりを……些と反對だつたね。言ひました。あゝ、肖て居る、肖て居るッて。

然うです、確に然う云つた事を覺えて居るよ。」
お君は敷けと云つて差出された座蒲團より膝薄う、其の傍へ片手をついたなりで居たのである。
が、薄化粧に、口紅濃く、目のぱつちりした顏を上げて、
「他所の方が、誰に肖て居るとお尋ねなさいましたから、貴客がどうお返事を遊ばすかと存じまして、私は極が悪うございましたけれども、密と氣をつけましたんですが、恁ういふ處で話をする事ではない。まあ〳〵、とおつしやつて、其切りになりましたのでございます。」
謙造は親しげに打頷き、
「然う〳〵然う云ひました。それが耳に入つて氣になつたかね、然うかい。」
「否、」と又俯向いて、清らかな手巾を、袂の中で引靡けて、
「氣にいたしますの、なんのつて、然ういふわけではございません。あの……伺ひました上で、それにつきまして少々お尋ねしたいと存じまして。」と俯目になつた、睫毛が濃い。
「聞きませうとも。其の肖たといふ事の次第を話すがね、まあ、最つとお寄んなさい。大分眩しさうだ。どうも、まともに日が射すからね。さあ、遠慮をしないで、お敷きなさい。恁うして尋ねて來なすつた時はお客樣ぢやないか。威張つて、威張つて。」
「否、どういたしまして、それでは……」

しかし眩ゆかつたらう、下搔を引いて座をずらした、壁の中央に柱が許、肩に浴びた日を避けて、朝顏はらりと唉きかはりぬ。
「實は最う些と間があると、お前さんが望みとあれば、今夜にも又昨夜の家へ出向いて行つて、陽氣に一つ話をするんだがね、最う東京へ發程んだから然うしては居られない。」
「はい、あの、私もそれを承りましたので、お歸りになりません前と存じまして、お宿へ、飛んだお邪魔をいたしましてございますの。」
「宿へお出は構はんが、こんな處で話しては些と眞面目になるから、事が面倒になりはしないかと思ふんだが。」
然うかと云つて昨夜のやうな、杯盤狼藉といふ場所も困るんだよ。
實は墓參詣の事だから、」
と云ひかけて、だん〳〵火鉢を手許へ引いたのに心着いて、一膝下つて向うへ壓して、
「お前さん、煙草は？」
默つて莞爾する。
「喫むだらう。」
「生意氣でございますわ。」

「遠慮なしにお喫り、お喫り。上げようか、卷いたんで可けりや。」
「否、持つて居りますよ。」
と帶の處へ手を當てる。
「其處でと、湯も沸いてるから、茶を飲みたければ飲むと……羊羹がある。一本五錢ぐらゐなんだが、可ければお撮みと……今に何ぞ御馳走しようが、まあ、御尋の件を濟ましてからの事にしよう、それが可い。」
獨りで云つて、獨りで極めて、
「扨て、其の事だが、」
「はあ、」
と又片手をついた。胸へ氣が籠つたか、乳のあたりがふつくりとなる。
「餘り氣を入れると他愛がないよ。些と恁う更つては取留めのない事なんだから。可いかい、」
ともの優しく念を入れて、
「私は小兒の時だつたから、唾をつけて、恁う引返すと、臺なしに汚すと云つて厭がつたつけ。死んだ阿母が大事にして居た、繪も、歌の文字も、對の歌留多が別にあつてね、極彩色の口繪の八九枚入つた、綺麗な本の小倉百人一首と云ふのが一冊あつた。

其の中のね、女用文章の處を開けると……」と疊の上で、謙遜は何にもないのを折返した。

四

「ト其處に高髷に結つた、瓜核顏で品の可い、何とも云へないほど口許の優い、目の淸い、眉の美しい、十八九の振袖が、裾を曳いて、嫋娜と中腰に立つて、左の手を膝の處へ置いて、右の手で、筆を持つた小兒の手を持添へて、其の小兒の顏を、上から俯目に覗込むやうにして、莞爾して居ると、小兒は行儀よく机に向つて、草紙に手習の處なんだがね。
今でも、其の繪が目に着いて居る。衣服の縞柄も眞にしなやかに、能く其の膚合に叶つたといふ工合で。小兒の背中に、其の膝についた手の仕切がなかつたら、膚へさぞ移香もするだらうと思ふやうに、ふつくりとなだらかに褄を捌いて、恁う引廻した裾が、小兒を庇つたやうに、しんせつに情が籠つて居たんだよ。
大袈裟に聞えようけれども。
私は、其の繪が大好きで、開けちや、見い〳〵したもんだから、百人一首を持出して、颯と開ると、又何時でも其處が出る。
此の姉さんは誰だい？と聞くと阿母が、それはお向うの姉さんだよ、と言ひ〳〵したんだ。

其のお向うの姉さんと云ふのに、……お前さんが肖て居るんだがね――まあ、お聞きよ。」

「はあ、」

と睜つた目がうつくしく、其俤が映りさう。

「お向うと云ふのは、前に土藏が二戸前。格子戸に並んで居た大家でね。私の家なんぞとは、すつかり暮向きが違ふ上に、金貸ださうだつたよ。何となく近所との隔てがあつたし、餘り人づきあひをしないと云つた風で。出入も餘計なし、猶更奥行が深くつて、裏は何處の國まで續いて居るんだか、小兒心には知れない程だつたから、つひぞ遊びに行つた事もなければ、時々、門口ぢや、其の姉さんと云ふのの母親に口を利かれる事があつても、此方は含羞で遁げ出したやうに覺えて居る。

だから、其のお孃さんなんざ、年紀も違ふし、一所に遊んだ事は勿論なし、又内氣な人だつたと見えて、餘り戸外へなんか出た事のない人でね、堅く言へば深閨に何とかだ。祕藏娘さね。

其處で、輕々しく顏が見られないだけに、二度なり、三度なり見た事のあるのが、餘計に心に殘つて居るんで。其の女用文章の中の插畫が眞物だか、眞物が繪なんだか分らないくらゐだつた。

しかし何方にしろ、顏容は判然今も覺えて居る。一日、其の母親の手から、娘が、お前さんに、と云つて、縮緬の寄切で拵へた、迷子札につける硬巾着を一個くれたんです。爾時格子戸の傍の、

出窓の簾の中に、ほの白いものが見えたよ。紅の色も。

蝙蝠を引拂いて居た棹を拋り出して、内へ飛込むだ、其の嬉しさッたらなかつた。夜も抱いて寢て、あけると其百人一首の繪の机の上へのつけたり、立つて居る娘の胸の處へ置いたり、胸へのせると裾までかくれたよ。

惜い事をした。其の巾着は、私が東京へ行つて居た時分に、故郷の家が近火に燒けた時、其の百人一首も一所に燒けたよ。」

「まあ……」

と果敢なさうに、お君の顏色が寂しかつた。

「迷子札は、金だから殘つたがね、其の火事で、向うの家も燒けたんだ。今度通つて見たが、町は最う昔の俤もない。煉瓦造りなんぞ建つて開けたやうだけれど、大きな樹がなくなつて、山が直ぐ露出しに見えるから、却つて田舍になつた氣がする、富士の裾野に煙突があるやうに。向うの家も、何處へ行きなすつたかね、」

と調子が沈んで、少し、しめやかになつて、

「勿論其の娘さんは、私が未だ十ウにならない内に亡くなつたんだ。――産後だと言ひます……」

「お産をなすつて？」
と俯目で居た目を睜いたが、それが何うやらうるんで居たので。
謙造は熟と見て、傾きながら、
「一人娘で養子をしたんだね、いや、其時は賑がだッけ。」
と陽氣な聲。

五

「土藏がづッしりとあるだけに、何時も火の氣のないやうな、寂とした、大きな音ぢや釜も洗はないと云つた家が、夜になると、何となく灯がさして、三味線太鼓の音がする。時々哄と山颪に誘はれて、物凄いやうな多人數の笑聲がするね。
何ッて、母親の懷で寢ながら聞くと、これは笑つて居るばかり。父親が店から聲をかけて、魔物が騷ぐんだ、恐いぞ、と云ふから、乳へ顏を押着けて息を殺して寢たつけが。
三晩ばかり續いたよ。田地田畠持込で養子が來たんです。
其の養子と云ふのは、日にやけた色の赤黑い、巖乘づくりの小造な男だつけ。何だか目の光る、些ときよと〳〵する、性急な人さ。

性急なことをよく覺えて居る譯は、桃を上げるから一所においで。姉さんが、然う云つた、坊を連れて行けと云ふからと、私を誘つてくれたんだ。
例の巾着をつけて、いそ〳〵手を曳かれて連れられたんだが、髮を綺麗に分けて、帽子を冠らないで、確か其の頃流行つたらしい。手甲見たやうな、腕へだけ嵌まる毛絲で編んだ、萌黃の手袋を嵌めて、赤い襯衣を着て、例の目を光らして居たのさ。私は其の娘さんが、あとから來るのだらう、來るのだらうと、見返り〳〵しながら手を曳かれて行つたが、なか〳〵路は遠かつた。
途中で負つてくれたりなんぞして、何でも町盡へ出て、寂い處を通つて、しばらくすると、大きな榎の下に、清水が湧いて居て、其處で冷い水を飲んだ氣がする。清水には柵が結つてあつてね、晝間だつたから、點けちやなかつたが、床几の上に、何とか書いた行燈の出て居たのを覺えて居る。
其處で一時、人通りがあつて、最う些と行くと、又ひつそりして、やがて大きな桑畠へ入つて、あの熟した桑の實を取つて食べながら通ると、二三人葉を摘んで居た、田舍の婦人があつて、養子を見ると、慌てて襷をはづして、お辭儀をしたがね、其處が養子の實家だつた。
地續きの桃畠へ入ると、さあ、澤山取れ、今ぢや、姉さんのものになつたんだから、何時でも來るが可い。まだ、瓜もある、西瓜も出來る、と嬉しがらせて、何うだ。坊は家の兒にならんか、

姉さんがいゝ兒にするぜ。
厭か、爺婆が居るから。……然うだらう。あんな奴は、今に已がたゝき殺して遣らう、と恐ろしく意氣込んで、飛上つて、高い枝の桃の實を引もぎつて一個くれたんだ。
歸途は、其の清水の處あたりで、最う日が暮れた。婆がやかましいから急がう、と云ふと、髪をばらりと振つて、私の手を無手と取つて驅出したんだが、引立てた腕が捲げるやうに痛む、足も宙で息が詰つた。養子は、と見ると、目が血走つて居ようぢやないか。
泣出したもんだから、横抱にして飛んで歸つたがね。私は何だか顏はあかし、天狗にさらはれて行つたやうな氣がした。袂に入れた桃の實は途中で振落して一つもない。
そりや可いが、半年經たない内に其の男は離緣になつた。
段々氣が荒くなつて、姉さんのたぶさを摑んで打つた、とかで、田地は取上げ、と云ふ評判でね、風の便りに聞くと、其の養子は氣が違つて了つたさうだよ。
其後、晩方の事だつた。私は又例の百人一首を持出して、同一處を開けて腹這ひで見て居た。其繪を見る時は、屹と、此の姉さんは誰？　と云つて聞くのがお極りのやうだつたがね。又尋ねようと思つて、阿母は、と見ると、秋の暮方の事だつけ。ずつと病氣で寢て居たのが、些と心持がよかつたか、床を出て、二階の臂かけ窓に袖をかけて、熟と戸外を見てうつとり見惚れたやう

な樣子だから、遠慮をして、默つて見て居ると、何うしたか、ぐッと肩を落して、はら〳〵と涙を落した。
どうしたの？　と飛ついて、鬢の毛のほつれた處へ、私の頰がくつついた時、と見ると向うの軒下に、薄く青い袖をかさねて、しよんぼりと立つて、暗くなつた山の方を見て居たのが其の人で、」
と謙造は面を背けて、硝子窓。其のおなじ山が透かして見える。日は傾いたのである。

六

「爾時は、艶々した丸髷に、淺葱絞りの手柄をかけて居なすつた。ト私が覗いた時、くるりと向うむきになつて、格子戸へ顏をつけて、兩袖で其の白い顏を包むで、消えさうな後姿で、ふるへながら泣きなすつたつけ。
桑の實の小母さん許へ、姉さんを連れて行つてお上げ、坊やは知つてるね、と云つて、阿母は横抱に、しつかり私を胸へ抱いて、
こんな、お腹をして、可哀相に……と云ふと、熱い珠が、はら〳〵と私の頸へ落ちた。」
唯見ると手巾の尖を引啣へて、お君の肩はぶる〳〵と動いた。白齒の色も涙の露、音するばか

り戦いて。
言を折られて、謙造は溜息した。
「貴下、もし、」
と涙聲で、衝と、腰を浮かして寄つて、火鉢にかけた指の尖が、眞白に震へながら、
「其の百人一首も燒けてなくなつたんでございますか。私、私は、お墓も何處だか存じません。」
と引出して目に當てた襦袢の袖の燃ゆる色も、紅寒き血に見える。
謙造は太息ついて、
「あゝ、然うですか、ぢやあ里に遣られなすつたお娘なんですね。音信不通と云ふ風説だつたが、然うですか。——いや、」
と言を改めて、
「二十年前の事が、今目の前に見えるやうだ。お察し申します。
私も、其頃阿母に別れました。今ぢや父親も居らんのですが、しかしまあ、墓所を知つて居るだけでも、貴女より增かも知れん。
然うですか。」
又歎息して、

「お墓所も御存じない。」
「はい、何にも知りません。貴下は、よく私の兩親の事を御存じで居らつしやいます、せめて、其の、其の百人一首でも見たうございますのにね。……」
と言も亂れて、
「墓の所を御存じではございますまいか。」
「……困つたねえ。門徒宗でおあんなすつたつけが、トばかりぢや……」
と云ひ淀むと、堪りかねたか、蒲團の上へ、はつと突俯して泣くのであつた。
謙造は目を瞑つて腕組したが、おゝ、と小さく膝を叩いて、
「餘りの事の御氣の毒さ。肝心の事を忘れました。貴女、貴女、」
と二聲に、引起された涙の顏。
「此方へ來て御覽なさい。」
謙造は座を讓つて、
「此方へ來て、此處へ、」
と指さゝれた窓の許へ、お君は、夢中のやうに、つか〳〵出て、硝子窓の敷居に縋る。
謙造は犇と背後に附添ひ、

「松葉越に見えませう。あの山は、それ茸狩だ、彼岸だ、二十六夜待だ、月見だ、と云つて土地の人が遊山に行く。貴女も朝夕見て居ませう。彼處にね、私の親たちの墓があるんだが、其の居まはりの回向堂に、貴女の阿母さんの記念がある。」

「えゝ。」

「確にあります、一昨日も私が行つて見て來たんだ。其處へ是からお伴をしよう、連れて行つて上げませう、直ぐに、」

と云つて勇んだ聲で、

「お身體の都合は、」

其の花やかな、寂しい姿をふと見つけた。

「しかし、其はどうとも都合が出來よう。」

「まあ、眞個でございますか。」

といそ〳〵裳を靡かしながら、なほ其の窓を見入つたまゝ、敷居の手を離さなかつたが、謙造が、脱ぎ棄てた衣服にハヤ手をかけた時であつた。

「あれえ、」と云ふと疊にばつたり、膝を亂して眞蒼になつた。

窓を切つた松の樹の横枝へ、お君の顏と正面に、山を背負つて、むずと摑まつた、大きな鳥の

翼があつた。狸の如き眼の光、灰色の胸毛の逆立つたのさへ數へられる。

「梟だ。」

とから〳〵と笑つて、帶をぐる〳〵と卷きながら、

「山へ行くのに、那樣ものに驚いちや不可んよ。然う極つたら、急がないと又客が來る。貴女支度をして。山の下まで車だ。」と口でも云へば、手も叩く、謙造の忙がしさ。其の足許にも鳥が立たう。

七

「前刻の、前刻の、」

と微笑みながら、謙造は四邊を睜し、

「前刻のが……聲だよ。お前さん、然う恐がつちや不可ん。一生懸命の處ぢやないか。」

「あの、梟が鳴くんですかねえ。私は又何でせうと吃驚しましたわ。」

と、寄添ひながら、お君も莞爾。

二人は麓から坂を一ツ、曲つて最う一ツ、それから此處の天神の宮を、梢に仰ぐ、石段を三段、次第に上つて來て、これから隧道のやうに薄暗い、山の狹間の森の中なる、額堂を拔けて、見晴

しへ出て、最う一坂越して、草原を通ると頂上の廣場になる。彼處の回向堂を志して、此處まで來ると、あんなに日當りで、車は母衣さへおろすほどだつたのが、梅雨期のならひ、石段の下の、太鼓橋が掛つた、乾いた池の、葉ばかりの菖蒲がざつと鳴ると、上の森へ、雲がかゝつたと見るや、こらへず颯と降出したのに、雜と一濡れ。石段を驅けて上つて、境内にちらほらとある、青梅の中を、裳はら〳〵でお君が潛つて。

さて此の額堂へ入つて、一息ついたのである。

「暮れるには間があるだらうが、暗くなつたもんだから、此處を一番と威すんだ、惡い臭さ。此の森にや昔から澤山居る。良い月夜なんぞに來ると、身體が蒼い後光がさすやうに薄ぼんやりした態で、樹の間にむら〳〵居る。

それを又、腕白の强がりが、よく賭博なんぞして、故と此處まで來たもんだからね。臭は仔細ないが、弱るのは此の額堂にや、古から評判の、鬼、」

「えゝ、」

と又擦寄つた。謙造は昔可懷しさと、お伽話でもする氣とで、うつかり言つたが、成程是は、

「何處にでございます。」

と何にか押向けられたやうに顏を向ける。

「何、何でもない、唯繪なんだけれど、小兒の時は恐かつたよ、見ない方が可からう。はゝは、、然うか、見ないとなほ可恐い、氣が濟まない、とあとへ殘るか、それ其の額さ。」

と指したのは、蜘蛛の圍の間にかゝつて、一面漆を塗つたやうに古い額の、胡粉が白くくつきりと殘つた、目隈の蒼ずんだ中に、一雙虎の如き眼の光、凸に爛々たる、一體の般若、被の外へ躍出でて、虛空へ颯と撞木を揖、渦いた風に乘つて、緋の袴の狂ひが火焰のやうに飜つたのを、よくも見ないで、

「あゝ。」と云ふと、犇と謙造の胸につけた、遠慮の眉は間をおいたが、前髮は衣紋について、襟の雪がほんのり薰ると、袖に縋つた手にばかり、言ひ知らず力が籠つた。

謙造は、爾時は未だ然までにも思はずに、

「母樣の記念を見に行くんぢやないか、そんなに弱くつては仕方がない。」

と半ば勵ます氣で云つた。

「否、母樣が活きて居て下されば、なほこんな時は甘えますわ。」

と取縋つて居るだけに、思ひ切つて、をさないものいひ。

何となく身に染みて、
「私が居るから恐くはないよ。」
「ですから、恁うやつて、恁うやつて居れば恐くはないのでございます。」
思はず背に手をかけながら、謙造は仰いで額を見た。
雨の滴々しと〳〵と屋根を打つて、森の暗さが廂を通し、翠が黒く染込む繪の、鬼女が投げたる被を背にかけ、纔に烏帽子の頭を拂つて、太刀に手をかけ、腹卷したる體を斜めに、ハタと睨むだ勇士の面。
と顏を合はせて、フト其の腕を解いた時。
小松に觸る雨の音、ざら〳〵と騷がしく、番傘を低く翳し、高下駄に、濡地をしやき〳〵と蹈んで、からずね二本、痩せたのを裾端折で、大股に歩行いて來て額堂へ、頂の方の入口から、のさりと入つたものがある。

八

「やあ、これから又お出かい。」
と腹の底から出るやうな、奥底のない聲をかけて、番傘を横に開いて、出した顏は見知越。一

昨日も一寸顏を合はせた、峰の回向堂の堂守で、耳には數珠をかけて居た。仁右衞門と云つて、いつも同一年の爺である。
其の回向堂は、又庚申堂とも呼ぶが、別に庚申を祭つたのではない。去る天保庚申年に、山を開いて、共同墓地にした時に、居まはりに寺がないから、此の御堂を建立して、家々の位牌を預ける事にした、其處で回向堂とも稱ふるので、此の堂守ばかり、別に住職の居室もなければ、山法師も宿らぬのである。
「又、東京へ行きますから、最う一度と思つて來ました。」
と早、離れては居たが、謙造は傍なる、手向にあらぬ花の姿に、心置かるゝ風情で云つた。
「よく、參らつしやる、些と又休んでござれ。」
「一寸休まして頂くかも知れません。爺さんは、」
「私かい。講中に些と折込みがあつて、これから通夜ぢや、南無妙、」
と口をむぐ〳〵さしたが、
「はゝはゝ、私ぐらゐの年の婆さまぢや、お目出たい事いの。位牌になつて嫁入りにござらつしやる、南無妙。戸は閉めて來たがの、開けさつしやりませ、掛金も何にもない、南無妙、」
と二人を見て、

「はゝあ、傘なしぢやの、いや生憎の雨、これを進ぜましよ。持つてござらつしやい。」
とばツさり窄める。
「何、構やしないよ。」
「うんにやよ、お前さまは構はつしやらいでも、はゝはゝ、それ、其方の姉さんが濡れるわ、さあさあ、さゝつしやい。」
「濟みませんねえ、」
と顏を赤らめながら、
「でも、お爺さん、あなたお濡れなさいませう。」
「私は濡れても天日で干すわさ。いや、又まこと困れば、天神樣の神官殿別懇ぢや、宿坊で借りて行く……南無妙、」
と押つけるやうに出してくれる。
捧げるやうに兩手で取つて、
「大助りです、此處に雨やみをして居るも可いが、此の人が、」
と見返つて、莞爾して、
「どうも、嬰兒のやうに恐がつて、取つて食はれさうに騷ぐんで、」

と今の姿を見られたらう、と極の惡さにいひわけする。
お君は俯向いて、紫の半襟の、縫の梅を指で一寸。
仁右衞門、はツはと笑ひ、
「おゝ、名物の梟かい。」
「否、それよりか、其のもみぢ狩の額の鬼が、」
「ふむ、」
と振仰いで、
「是かい、南無妙。これは似たやうな繪ぢやが、餘吾將軍維茂ではない。見さつしやい。烏帽子素袍大紋ぢや。手には小手、脚にはすねあてをして居るわ……大森彦七ぢや。南無妙、」
と豐かに目を瞑つて、鼻の下を長くしたが、
「山頰の細道を、直樣に通るに、年の程十七八計なる女房の、赤き袴に、柳裏の五衣着て、鬢深く鍛ぎたるが、南無妙。
山の端の月に映じて、只獨り彳みたり。……これからよ、南無妙。
女些打笑うて、嬉しや候。さらば御棧敷へ參り候はんと云ひて、跡に付きてぞ歩みける。羅綺にだも不勝姿、誠に物痛しく、未だ一足も土をば不蹈人よと覺えて、南無妙。

彦七不怯、餘に露も深く候へば、あれまで負進せ候はむとて、前に跪きたれば、女房些も不辭、便なう、如何かと云ひながら、軈て後にぞ靠りける、南無妙。

白玉か何ぞと問ひし古へも、角やと思知れつゝ、嵐のつてに散花の、袖に懸るよりも輕やかに、梅花の匂なつかしく、蹈足もたど〳〵しく、心も空に浮れつゝ、半町ばかり歩みけるが、南無妙。

月些暗かりける處にて、南無妙、さしも嚴しかりける此の女房、南無妙。」

といひ〳〵額堂を出ると、雨に濡らすまいと思つたか、數珠を取つて。頂いて懷へ入れたが、身體は平氣で、石段、てく、てく。

九

二ノ眼ハ朱ヲ解テ。鏡ノ面ニ洒ゲルガ如ク。上下齒クヒ違テ。口脇耳ノ根マデ廣ク割ケ。眉ハ漆ニテ百入塗タル如ニシテ。額ヲ隱シ。振分髪ノ中ヨリ。五寸計ナル犢ノ角。鱗ヲカヅイテ生出でた、長八尺の鬼が出ようかと、汗を流して聞いて居る内、月些暗カリケル處ニテ、仁右衛門が出て行つた。まづ、可し。お君は怯えずに濟んだが、偏に梟の聲に耳を澄まして、あはれに物寂い顔である。

「さ、出かけよう。」

と謙造は最う此處から傘ばッさり。

「はい、貴下飛んだ御迷惑でございます。」

「私は些とも迷惑な事はないが、貴女、それぢや不可ん。路はまだそんなでもないから、跣足には及ぶまいが、裾をぐいとお上げ、構はず、」

「それでも、」

「うむ、構ふもんか、いまの石段なんぞ、ちら〳〵引絡まつて歩行悪さうだつた。極の悪いことも何にもない。誰も見やしないから、是から先は、人ッ子一人居やしない、よ、然うおし、」

「でも、餘り、」

片褄取つて、其の紅のはしのこぼれたのに、猶豫つて恥しさう。

「だらしがないから、よ。」

と叱るやうに云つて、

「母様に逢ひに行くんだ。一體、私の背に負んぶをして、目を塞いで飛ぶ處だ。構ふもんか。さ、手を曳かう、辷るぞ。」

と言つた。暮れかゝつた山の色は、其の滑かな土に、お君の白脛と且つ、緋の裳を映した。二

人は額堂を出たのである。
「御覽、目の下に遠く樹立が見える、あの中の瓦屋根が、私の居る旅籠だよ。」
崖のふちで危つかしさうに伸上つて、
「まあ、直其處でございますね。」
「一飛びだから、梟が迎ひに來たんだらう。」
「あれ。」
「おつと……番毎怯えるな、しつかりと摑つたり……」
「貴下、邪慳にお引張りなさいますな。綺麗な草を、もう些とで蹈まうといたしました。可愛らしい菖蒲ですこと。」
「紫羅傘だよ、此の山には澤山吹く。それ、一面に。」
星の數ほど、はら〳〵と咲き亂れたが、森が暗く山が薄鼠になつて濡れたから、頻なく梟の聲につけても、其の紫の俤が、燐火のやうで凄かつた。
辿る姿は、松にかくれ、草にあらはれ、坂に沈み、峰に浮んで、其峰つゞきを畝々と、漆のやうなのと、眞蒼なると、赭の如きと、中にも雪を頂いた、雲いろ〳〵の遠山に添うて、こゝに射返されたやうなお君の色。やがて傘一つ、山の端に大な蕈のやうになつた時、二人は其の、さ

す方の、庚申堂へ着いたのである。
と不思議な事には、堂の正面へ向つた時、仁右衞門は掛金はないが開けて入るやうに、と心着けたのに、雨戸は兩方へ開いて居た。お君は後に、御母樣が然うして置いたのだ、と言つたが、知らず堂守の思違ひであつたらう。
框が直に緣で、取附きが其の位牌堂。是には天井から大きな白の戸帳が垂れて居る。其の色だけ仄に明くつて、板敷は暗かつた。
左に六疊ばかりの休息所がある。向うが破襖で、其の中が、何疊か、仁右衞門堂守の居る處。勝手口は裏にあつて、臺所もついて、井戸もある。
が謙造の用は、些とも其處等にはなかつたので。
前へ入つて、其の休息所の眞暗な中を、板戸漏る明を見當に、がたびしと立働いて、町に向いた方の雨戸をあけた。
横手にも窓があつて、其處をあけると今の、其の雪をいたゞいた山が氷を削つたやうな裾を、紅、綠、紫の山でつゝまれた根まで見える、見晴の絶景ながら、窓の下がすぐ、ばら〳〵と墓であるから、又怯えようと、それは閉めたまゝで置いたのである。

十

其の間に、お君は縁側に腰をかけて、裾を捻るやうにして懐がみで足を拭つて、下駄を、謙造のも一所に拭いて、それから穿直して、外へ出て、廣々とした山の上の、小さな手水鉢で手を洗つて、これは手巾で拭つて、裾をおろして、一つ揺直して、下褄を掻込んで、本堂へ立向つて、ト頭を下げた處。

「此方へお入り、」

と、謙造が休息所で聲をかける。

お君が密と歩行いて行くと、六畳の眞中に腕組をして坐つて居たが、

「まあお坐んなさい。」

と傍へ坐らせて、お君が、丁と膝をついた拍子に、何と思つたか、づいと立つて、其處らを見廻したが、横手の其の窓に並んだ二段に釣つた棚があつて、火鉢燭臺の類、新しい卒堵婆が二本ばかり。下へ突込んで、鼠の嚙つた穴から、白い切のはみ出した、中には白骨でもありさうな、薄氣味の惡い古葛籠が一折。其の中の棚に斜つかけに乗せてあつた經机ではない小机の、脚を抉つて滿月を透したは可いが、雲のかゝつたやうに蟲蝕のあとのある、塗つたか、古びか、眞黑な、

引出しのないのに目を着けると……

「有つた、有つた。」

と嬉しさうに衝と寄つて、兩手でがさ〳〵と引き出して、立直つて持つて出て、縁側を背後に、端然と坐つた、お君のふつくりした衣紋つきの帶の處へ、中腰になつて舁据ゑて置直すと、正面を避けて、お君と互違ひに肩を並べたやうに、どつかと坐つて、

「是だ。是がなからうもんなら、わざ〳〵足弱を、暮方にはなるし、雨は降るし、こんな山の中へ連れて來て、申譯のない次第だ。

薄暗くつて先刻から一寸見つからないもんだから、これも見た目の幻だつたのか、と大抵氣を揉むだ事ぢやない。

お君さん、」

と云つて、無言ながら、懐しげな其の美い、而して恍惚となつて居る顏を見て、

「其の机だ。お君さん、貴女の母樣の記念と云ふのは、……

恁う云ふわけだ。又恐がつちや不可いよ。母樣の事なんだから。

可いかい。

一昨日ね。私の兩親の墓は、つい此の右の方の丘の松蔭にあるんだが、其處へ參詣をして、墳

墓の土に、薫の良い、堇の花が咲いて居たから、東京へ持つて歸らうと思つて、三本ばかり摘んで、こぼれ松葉と一所に紙入の中へ入れて。それから、父親の居る時分、連立つて阿母の墓參をすると、何時でも歸りがけには、此の仁右衛門の堂へ寄つて、世間話、お祖師樣の一代記、時に寄ると、軍談講釋、太平記を拾ひよみに譜記でやるくらゐ話がおもしろい爺樣だから、日が暮れるまで坐り込んで、提灯を借りて歸ることなんぞあつた馴染だから、此處へ寄つた。

好いお天氣で、からりと日が照つて居たから、此間中の濕氣拂ひだと見えて、本堂も廊下も明つ放し……で誰も居ない。

座敷の此處に此の机が出て居た。

机の向うに薄く恁う婦人が一人、」

お君は颯と蒼くなる。

「一生懸命にお聞きよ。それが、貴女の母樣だつたんだから。

高髷を俯向けにして、雪のやうな頸脚が見えた。手を恁うやつて、何か書ものをして居たらう。紙はあつたが、筆は持つて居たか、其處までは氣がつかないが、現に、其處に、貴女と丁ど向ひ合せの處、」

正面の襖は暗くなつた、破れた引手に、襖紙の裂けたのが、ばさりと動いた。お君は堅くなつて眞直に、そなたを見向いて、瞬もせぬのである。

「確乎して、お聞き、恐くはないから、私が居るから、」と謙造は、自分も一寸本堂の今は煙のやうに見える、白き戸帳を見かへりながら、

「私が其を見て、あゝ、肖たやうなと悚然とした時、密と顏を上げて、莞爾したのが、お向うの其の姉さんだ、百人一首の插畫にそツくり。

はツと氣がつくと、最う影も姿もなかつた。

私は、思はず飛込んで、其の襖を開けたよ。

がらん堂にして仁右衛門も居らず。懷しい人だけれども、其處に、と思ふと、私も些と居なすつた幻のあとへは、第一なまぐさを食ふ身體だし、勿體なくツて憚つたから、今、お君さん、お前が坐つて居る其處へ坐つてね、机に凭れて、」

と云ふ時、お君は其の机にひたと顏をつけて、うつぶしになつた。あらぬ俤とゞめずや、机の上は煤だらけである。

「で、何となく、あの二階と軒とで、泣きなすつた、其の時の姿が、今さしむかひに見えるやうで、私は自分の母親の事と一所に、しばらく人知れず泣いて、やう〳〵外へ出て、日を見て目を拭いた次第だつた。翌晩、朝顏を踊つた、お前さんを見たんだよ。目前を去らない娘さんにそつ

くりぢやないか。そんな話だから、酒の席では言はなかつたが、私はね、前刻お前さんがお出での時、女中が取次いで、女の方だと云つた、それにさへ、悚然としたくらゐ、まざ〳〵と此處で見たんだよ。

しかし其の机は、昔から此處にある見覺えのある、庚申堂はじまりからの附道具で、何も貴女の母様の使つておいでなすつたのを、堂へ納めたと云ふんぢやない。

それが又何うして、此處で幻を見たらうと思ふと……恁うなんだ。

私の母親の亡くなつたのは、貴女の母様より、二年ばかり前だつたらう。

新盆に、切籠を提げて、父親と連立つて墓參に來たが、其の白張の切籠は、此處へ來て、仁右衛門爺様に、アノ威張つた髯題目、それから、志す佛の戒名、進上から、供養の主、先祖代々の精靈と、一個々々に書いて貰ふのが例でね。

内ばかりぢやない、今でも盆には然うだらうが、餘所の爺様婆様、切籠持參は皆然うするんだつけ。

其年はつひにない、どうしたのか急病で、仁右衛門が呻いて居ました。

さあ、切籠が迷つた、白張でうろ〳〵する。

ト同じ燈籠を手に提げて、とき色の長襦袢の透いて見える、羅の涼しい形で、母娘連、貴女の

祖母と二人連で、此處へ來なすつたのが、姉さんだ。

やあ、占めた、と云ふと、父親が遠慮なしに、お絹さん——貴女、母様の名は知つて居るかい。」

突俯したまゝ、すねたやうに頭を振つた。

「お願だ、お願だ。精靈大まごつきの處、お馴染の私が媽々の門札を願ひます、と燈籠を振廻はしたもんです。

母様は、町内評判の手かきだつたからね、それに大勢居る處だし、祖母さんが又、些と見せたい氣もあつたかして、書いてお上げなさいよ、と云つてくれたもんだから、扇を疊んで、お坐んなすつたのが——其の机です。

是は、祖父の何々院、是は婆さまの何々信女、其處で、これへ、媽々の戒名を、と父親が燈籠を出した時。

(母様のは、)と傍に畏つた私を見て、

(謙ちやんが書くんですよ、)

と然う云つておくんなすつてね、私を其の机の前へ坐らせて、」

と云ふ時、謙造は聲が曇つた。

「すらりと立つて、背後から私の手を柔かく筆を持添へて……

おつかさん、と假名で書かして下さる時、此襟へ、」

と、しつかりと腕を組んで、

「はら〳〵と涙を落しておくんなすつた。

父親は墨をすりながら、伸上つて、と其の假名を讀むで……

おつかさん、」

いひかけて謙造は、ハツと位牌堂の方を振向いて慄然とした。自分の胸か、君子の聲か、幽に、おつかさんと響いた。

ヒイと、堪へかねてか、泣く聲して、薄暗がりを一つあふつて、白い手が膝の上へばたりと來た。

突俯したお君が、胸の苦しさに悶えたのである。

其の手を取つて、

「其だもの、忘、忘れるもんか。其時の、幻が、此處に殘つて、私の目に見えたんだ。ね、だから其が記念なんだ。お君さん、母様の顔が見えたでせう、見えたでせう。一心にお成んなさい、私が屹と請合ふ、屹と見える。可哀相に、名、名も知らんのか。」

と云つて、ぶる〳〵と震へる手を、緊乎と取つた。が、冷いので、何所と驚き、膝を突かけ、

背を抱くと、答へがないので、慌てて、引起して、横抱きに膝へ抱いた。

慌しい聲に力を籠めつゝ、

「確乎おし、確乎おし、」

と涙ながら、其まゝ、じつと抱しめて、

「母様の顔は、姉さんの姿は、私の、謙造の胸にある！」

と熟と見詰めると、恍惚した雪のやうなお君の顔の、美しく優しい眉のあたりを、ちら〳〵と蝶のやうに、紫の影が行交ふと思ふと、菫の薫が發として、やがて縋つた手に力が入つた。

お君の寂しく莞爾した時、寂寞とした位牌堂の中で、カタリと音。

目を上げて見ると、見渡す限り、山は其の戸帳のやうな色になつた。が、やゝ艶やかに見えたのは雨が晴れた薄月の影である。

遠くで梟が啼いた。

謙造は、其の聲に、額堂の繪を思出した、けれども、自分で頭をふつて、齊しく莞爾した。

其時何となく机の向が、かはつた。

襖がすらりとあいたやうだから、振返へると、あらず、仁右衞門の居室は閉つたまゝで、たゞほのかに見える散れ松葉の其の模様が、可懷い百人一首の表紙に見えた。

雌蝶

一

路地を入りかけて、不圖胸騒ぎのしたのは、丁ど過般のやうである――其の時は飛んだ騒動、今夜は又格別ひつそりして居るが、はツと立窘むまでに、氣を打つた心地は同じであつた。

過夜は小火、……今夜は祝言。

世の中に、どんな狼狽ものがあつても、小火と祝言を一所にする事はない。が、しかし考へて見ると、「絲卷」の一人娘が、婿を取る日の、宵の口の、近所合壁の動搖は、案ずるに小火と大差はなかつたらう。……仔細あつて此の話をする男は、午から他所へ行つて居て、其の樣子はさて見なかつたが。

そんな事から、何も似たやうな思ひがしたのではない。

尤も、拔裏の木戸を入らうとして、ぎよつとした段は、今夜も過般も些とも違はぬ。其の小火の時は……確か、然う、表町の床屋へ行つた歸りがけで……

七日ぶりのおめかし、特の外綺麗になつて、翌日見合に出掛けると云ふ譯でもないが、直ぐに湯に入るつもりの處、床屋で二ツ三ツ待つたため、餘寒の頃なり、腹は空く、聊か卑しい言種ではあるが、是で熱湯は些と堪へる。

湯は晩飯を濟ましてからと、しやぼん箱を手拭で卷いたなり、懷へ突込んだので、少し襟が開いて、尙ほ薄寒いのを、早く搔合はせれば可いのに、いけ不精な懷手。蕎麥屋の角を曲つて、横町の慶庵の前をぶらりと通り、左へ曲つて、深い溝について垂々と下りると、下切つた右が一段高い、此處が路地の裏木戸で、此の地内の鬼門に當る。

其處まで來ると、わや〳〵四五人、中には片襷で裾を端折つた、圓髷の女房も交つて、人立ちして、中を覗込んで居たのがはじまり。

細い路地を七八間、絲卷の裏圍について、左へ又細いのを曲ると、二階家、平家が、夕霞の中に浮出して、三方から取圍んだ池のやうな植込みが、此の地内に一つ。舊、茶畑であつたなごりには、茶の樹の垣を取廻して二十坪ばかり。北に向合つて、地主の竹垣、庭を前にした座敷の緣側が、其の一方をづらりと仕切る。路地内の誰彼は、これを公園、と洒落に名づけた。

其の時は未だ咲かず、今は最う散つて、花片のやうな美しい葉になつたが、公園には紅梅の樹がある、白梅、李、桃の樹も、松もあつて、中に其の梅松に梢を並べた、木瓜の大きなのが一本ある。

絲卷は、下町の然る金物屋の妾だつたのが、旦那が亡くなつた忘れ記念の綾子に、此の地所と、四五軒の家作がついて、母娘ぐらし。乳母と女中で男を交ぜない。主婦が今も髮長く、脊の

高い所爲か、此處に生える烏扇、雁皮も皆丈がよく伸びる。一昨年だつたか、烏が上の李へ來て、羽についた種を落したらしい、忽然として其の下へ芽ぐんだ鷄頭の一種は、山鳥の羽を倒に懸けたやうになつて、丈、凡十三尺。路地内の住人、物干から小手を翳して、彗星、と呼はつた事さへある。

公園の紫薄く萌えはじめた、如月の末の夕霞、恰も幻の羽衣靉靆く、樹々の梢に遮られた、此處から見て、筋違の瓦屋根……が我が家は可いが、茶の樹に掛つて、斜めに畝つて、樹の根を卷いて、丁ど其の見當へのたり込んだ喞筒の管は何うだらう。

四邊は一面の水になつて、宛然海蛇が、アノ虎斑のある、ぶよ〳〵した、横ひだに蒼い水氣を持つて膨らんだ、だぶりと肥い胴體を横へて居るのに違はぬ。

言ふまでもなく、人混雜黒山の如く、地内を塞いで、跣足もあれば、肌脱もあり、向顱卷をしたのもあるし、驅廻つて巡査も居た。

既に木戸口の人立ちを見た時から、人殺しか、見投げか、必定事こそあれ、と顚倒して驅込んだのであるが、我が家へ向けて、蒸氣喞筒のかゝつたのを見た時の、心持は一寸言へぬ。

尤も見受けた處、屋根の形が原の通りで、其處等の樣子も一騷動の、一呼吸吐いたらしいから、さしたる大事にも到らなかつたものであらうが、然りとては近所の手前、それは内には老人があ

る。……

二

ブル〳〵と震へると、窘んだ足が最う先へ出ぬ。其まゝ無意識に裏木戸の方へ引返したが、我ながら、大なる犯罪者でもあるやうで、恐ろしいまで四邊の人目が憚られたので。

足も地につかず、木戸を出る時、其處に顔を知つた近所の米屋の女房が居たので、又ぎよつとした。幸見付からずに横町へ出て、床屋から歸つたとは逆に、ばた〳〵と驅出した。

我家で、疎匆火を出したものなら、何も恁うしたからと云つて、其の罪を遁れ終せらるゝのではないが、知つたものに捉まつて、

「やあ、お宅が、」

と眞向から、浴せられては、差當り其の挨拶に困つた處から、一寸伸びを遣つたらしいが、咄嗟には自分ながら、扨て然うとまでも氣が付かないほど、とつちて居た。

横町の中ほどにある、質屋の庫の前の、右も左も薄暗い處へ、ト先づ蝙蝠のやうに身を密めて、後前を密と伺ふと、屋越に聞ゆる、がや〳〵した地内の聲が、一々己を責め立てる城下に迫つた敵の聲かと胸に應へる。いや、疾くの昔、兵糧責めの晩飯前。寒さは寒し、髯を剃立ての頤も、

今の間にげつそりと痩せたやうで、胴震ひを一ッして、廂合から喟然として天を仰ぐ。と下界は騒ぐ、とも思はぬ色で、あゝ、二日月。

上が市兵衛町の崖を離れて、麻布の我が店借りの其の公園の上に白い、梢を辷つて、梅も、桃も、枝を蒼く染めて居よう。

思へば夢見たやうである。其の周囲を、あの、人數、あの騒動。黄昏を宛然、道陸神が喧嘩をするやうな。

しかし夢ではあるまい。地内は其の混雑で、未だ何の家の障子越にも、戸の隙にも、燈の影は見えなかつたが、此處から見る、表通は早や夜で、突當りの荒物屋の店の洋燈は、毎時見る煤びたのであるが、宵の明が薄り冴々と點いて居る、……と其まで確に見えながら、未だ依然として目が覺めぬ。夢ではない、と落膽したやうに其の灯を熟と見た。

時に其の灯影はづれに、店前へ蹲んで、膝から支へて、頤杖で表を見て居た、荒物屋の婆さんの態度と言ふのが、何となく、如何にも無事で、平和で、町内安全の權化ででもありさうに見受けられる。

此なら其の前を何事もなく通してくれよう——又通つて差支へのないほど、自分にも罪がなさうに、格別寛大に見て取られたので、爲に少なからず力を得た。

其處で、懐から手拭を出して、だらりと提げて、小さな咳をして、藏の壁を離れて出たが、此の擧動は、何の爲めだつたか今以つて些とも分らぬ。

で、角屋敷の質屋の瓦斯燈に照らされて、湯歸りめいた其の姿は、出端に然うして居る婆さんの目に入つて……尤も急足で通つたが、

「まあ……」とも何とも聲を懸けぬ。

ヤレ難有い。是で若し疎匆が我家で無かつたら、祝ひの赤の飯は、壽留女を添へて、眞先に此の婆さんに贈らうと、早や外してはあつたが、伊勢屋の暖簾の前を過ぎて、同じ家の、忍返しの嚴重な黒塀について曲る。

此處が路地の表口で、裏とは違つて、路も廣い。

一方は其の取廻した質屋の塀、左の角から三軒目の我が住居は無事であつた。人の瀬は自家の出格子の前から淀んで、隣家の勝手口へ渦いて居たのである。

尤も路地は水びたしで、水筋の、未だ蜘蛛手にさら〳〵と走るのを、もう、此方のもので悠々と跨いで歸ると、格子戸の前に、黒の石持の紋着、拔衣紋、腕組をした襯衣の袖口、ゆつたりと彳んで居たのは、渾名を船頭さん、と云ふ我が同宿の男で。

同じに浮世繪を……其の勉强しながら、身體をゆら〳〵と前へ搖る癖がある、漕ぐやうだ、と

云ふので其處で船頭。
いつもゆつくりと氣永なのが、流れるやうな濕りの前に、呑氣に立つた處なぞ、小火は是だけでも消えたらう、と嬉しかつた。

三

「何うしたんだい、まあ。」
「やあ、お歸り。飛んだ騷動で……しかし、おめでたうございました。」
其處で、お船頭に聞くと、隣家が内務省の一寸した官吏の、主人は他所へ廻つた日、退省が遲く、細君は湯に行つた。留主の書生が、よくある疎匆で、洋燈を點けようとした燐火の燃さしを、石油鑵の中へ落したのだ、と言ふ。
「ドン！と云ふ音で、えゝ、緣側にぽかんとして居た私は、隣家で襖でも倒したのだらうと思ひましてな。大して氣にも掛けないで居りますと、其の途端に何でして、筋向うの、あの、斑犬ですがね、ウヽウーと唸り出しました、其の可厭な聲と云つたら。
や、大きな地震でもぐら〳〵と來やしないか、と可訝く茫とした時でしてな。
お船頭さん、何でせうね。

と臺所を働いておいでなすつた、露月町の姉さんが、がらりと何です、水口の戸をお開けなすつたつけ。
あれ、
と云ふと、ばら〳〵と驅けて來て、襷がけの濡手のまんま、六疊に居なすつた、お祖母さんの手を引摑むと、
火事です、ッた切——疾い事、もう遁出してお了ひなすつた。はあ……や、其の時の顚倒さ加減たらありませんでした。まあ、何しろ結構で、」
先づ祖母に怪我もなし。
難有い事には、上框の障子に映る、内の燈火も景氣が可い。と思ふ其の障子へ、鼻筋の通つた横顏と、簪の影が美しくぼつとさして、すらりと蓮葉に一枚開けて、花やかな藤紫の裾の、白足袋で敷居に乘つて、玉のやうな顏を出した、目の大きい、眦の切れた、ふつくりとした、括頤だが面長の所爲で薄く見える、緊つた口許の可愛らしい、藤長けた眉の、前髮の膨りとした、これが絲卷の一人娘で、今年十七になる綾子と云ふので、顏を見ると、いきなり、
「あら、先ちやん……」
と來た。

其の浮世繪を描く處から、誰に教はつたか、先生と云ふ處を、此方で綾公と行くから、先でも先ちやんと來る。尤も、學校の繪畫の淸書を內證で描いてくれ、と强請られて、畏つて候と、芭蕉の葉に蝸牛か何か手本通りに書いて渡すと、たつた六十點しか取れなかつたので、ぷッ〳〵怒つた——此のくらゐな腕だから、「先ちやん」で先づ恰好である。……

「大變よ、一寸、」

とたしなめるやうに云つて眞顏になる。

「大變は最う去つ了つた、綾公に宜しくッて。」

と澄まして土間へ入る、と驚かすつもりの的が外れて、

「まあ、」

と目を圓くして熟と見ながら、朱鷺色の、へりの細い、羽二重の筒袖の、胡蝶の羽で、くるッと包んだやうな腕を露はに、障子のふちに高くかけて、細い額の中のやうに上から見て立つて居るのを、押退けなければ入れないから、先生は其處で立停つて、

「ふゝゝ、」

と笑ふと、お船頭も格子の外で、

「遣られましたな、令孃、あはゝ、」

「口惜い、私、」

「先ちやんが歸つたかい。」

カチリと膳立ての茶碗の音、臺所から露月町の姉さんと云ふのが聲を懸けた。

私の從妹で、年紀下ながら、遊びに來る綾子が、姉さん姉さん、と云ふし、其の從弟で、高等學校へ通ふのが、露月町の家は、些と賑な稼業で、人出入が多い處から、勉强しに、此の住居へ來て居るのが、同じく姉さん、と云ふ處から、家中——祖母までが、姉さんや。

此の姉さんは、時々遊びながら、臺所の整理に來るので、祖母は何にも構はず、女中は少し、男世帶も同然だから。

露月町のは二十を一ッ二ッ越して居るが、恐ろしく綾子と仲よしで、一昨年、越立てには一寸一寸來たのが、此頃ぢや、最う兩方とも殆ど連日のお入であつた。

四

今も路地內の混雜の中を、寒い晩方、其の袖の大い翁格子の銘仙の羽織の袖を、一寸手の中へ折込んで、肩を細うして、擦拔けて來て居たものらしい。

「否、」

と臺所へ向いて大きく云つて、莞爾して、
「默つていらつしやいよ、姉を擔ぐんだから、」
と低聲で云つて、目で知らせて、笑を忍んだ音を含めて、
「些とも歸りはしないんだわ。」
はて、妙な言種な、しかし兎も角も是までは聞えたが、
「一寸、お湯へ行つて來たの、」
と直ぐに尋ねる。
又これが些とも忍んだ調子でない。此の娘は棚橋へ通つて居る、其處の繪畫の代作をして、漸と六十點の所帶であれば、言はずとも大概奥行は知れて居るのに、今泣いた烏が最う笑ふ、これぢや袂も擔がれない。が、そんな事は一向お構ひなし……
（綾ちやん、）
（はゝい、）
（又遊びに行くのなら、御飯が濟んでからにおしよ。）
乃至は、
（お溫習をなさい！）

で、母樣にぴたりと出足を留められる。其でも我慢が出來ない、と密と座敷を拔出して、拔足差足玄關へ、一寸づゝ一生懸命、呼吸を殺して戸を開ける。……までは可いが、後を閉めるのはがらんぴしやり——横飛びに路地を驅けて、鳥のやうに飛込むと、誰でも構はぬ、居合はせた者の肩さきへ嚙りついて、
（かくれて來たの、あゝ、恐かつた、まあ、可かつた。）
と長い膝で崩れたやうにがツくり坐る、と叩きつけた戸のがらん、鈴の音の其のがら〳〵が、未だ響いて居ようでないか。
いや腹を抱へさせる。
これだから、人を擔がうと云ふ本人と、話聲の如何などを分別する事ではない。
「あゝ、可い湯だつた、」
と手拭を提げて居たから、可加減に答へると、ひよいと蹲んで、今度は仰向いて圓い目で見上げながら、
「あの、お湯屋にね、先生、」
大分慇懃だ、と不思議に思ふと、眞面目に教が受けたいのであつた。
「湯花ッて、花は、どんな花？」

「芽花ぢやないか、」
背後から、船頭が、
「三助堇の事でせう、」
「然うか、成程。」
と堪らなく笑ひ出すと、以ての外な顔をして、
「まあ、靜になさいよ、聞えるわ。」
と今になつてむきに留めた。
「かついだね、此の娘は、さあ、こちよ〳〵〳〵〳〵。」
と不意に露月町のに擽られて、くるりと倒れて、圓くなつて、牡丹の花が轉がるやうに、
「あはゝ、御免なさい、御免なさい。」
此の娘が今夜、三々九度をするのである。

五

否、最う式は濟んだであらう。他所から歸つて裏木戸へかゝつた時は、彼是一時近であつたから。其に近所の此の寂然となつたのでも分る。……式も早や、床杯も納つたらう。

勿論一人娘であるから、絲卷へ婿、養子であることは斷るまでもない、――さて其の養子と云ふのは、色の白い、上方ものの醫學生である。
姓を篠田と云ふのだが、緣は不思議なものであつた。
去年の秋、從妹が誘はれ、二人づれで、向島の秋草見物。午飯を濟ましてから出掛けたが、途中で綾子の方は兎も角、從妹なぞは止せば可いに、女同士、白木屋の二階を覗いて、其れから淺草へ行くと、綾子が觀音樣を附あつたかはりに、從妹は水族館に引張られる事になつた。あの薄暗い隧道の中を見て歩行くと、入り口邊から、一人後になり前になり、二人の目にちら〳〵して、海を通りもののするやうに、硝子に映る、色の白い、鼠の洋服を着た年少な男があつたが、出口近くで、ひらりと白いものを落して、其のまゝ見えなくなつた。
「何か落してよ、」
と綾子が拾ふと、其は名札で。
「一寸、醫學生――篠田……」
「そんなものはお打棄り、」
と拐り取る勢で從妹の云ふ時は、もう其を忘れたやうに摘んで提げて、綾子は硝子越に透通る水の上から、鯛の大きな目を指の尖で突いて居た。

「大きな針刺だわね。」

行路は東橋を。百花園へ入つたが、從妹は花の映る、綾子の顏に見恍れたと言つて話す——白芙蓉の面に淸い瞳がくる〳〵と動いたり、嫁菜に睫毛が濃くなつたり、紅蓼に眉が伸びたり、黃蜀葵が簪に擦れたり——

「おゝ、可愛い、」

と桔梗に口紅。其の間に萩が袂に搦む。葛がはら〳〵と背に飜る、……又少し風があつた——見た目に殘つたか、大川べりを歸り路には、隅田の水がもみぢに早い、花の錦を紅の夕日に宿した。

途中トある土堤の下の、濕々した藪の蔭に、ぱつと咲いて火花を散らしたやうな、曼珠沙華を見付けて、

「姉さん、あれは……」

「彼岸ぢやないか。」

「綺麗だね、」

「あゝ、だけれどもね……」

「百花園にはなかつたよ。」

「あゝ、庭なんかへは植ゑないものなの。何故つて？花が咲く時は一枚も葉がないし、葉のある時は花がないの。だから緣起でないでせう。綾ちやん、お前さんは、花よ、お前さんの母さんは、まあ、葉だわ、どつちが缺けても大變ぢやないか。」

「まあ可哀相ねえ、葉がないからつて、こんな處に此の花ばかり、一人ぼつちで寂いわ。」

で、わざ〳〵舞踏沓を汚して、折つて、一束胸へ抱いたのを見ると、被布にかゞつた總のやう。言問の前まで返る、と從妹は向うから一人が杖を支いて、洋服の些と反身で來る、少い男を見た。

近づくまゝに、此方を見て笑ひかけたので、急いで、綾子の袖を引いて、何も知らせまいと、恰も可で茶屋へ入つた。

其處でお汁粉を、あとで勘定をしながら、伸上つて見ると、最う何處にも其の男の姿はなかつたから、落着いて、徐々出る。

是非船で、と綾子が言ふので、渡場にかゝると、背後から、すいと來て、今度は二人に擦違ふばかりに、前の男が船へ下りた、最う其の棹を突く處。

「お待ち、否、何故でもさ。」

わけは言はず、從妹は此方の岸に立つて、一船後れて乘る算段。

「まあ、あの山谷の景色を御覽よ、待乳沈んで梢乘込むと言ふんぢやないか。」
首尾よく後の船に乘つて、中流に出た、と思ふと、フト又氣にかゝつた雲がある、向うの棧橋に彳んで、誰か此の船を見て居るのが、どうやら同じ男らしい。
胸は浪とともに搖らめいたが、次第に判然と見えて來た、其の男が、然も眞白な半巾を、招くが如く掉つて居る。
「其をお打つちやり、皆さんが笑つて居る、そんな草を持つてるから、」
「然う、」
と惜しさうだつたが逆らはないで、
「お前も百花園へおいでな。」
曼珠沙華は、はら〳〵と、船べりに掛つて水に落ちたが、一度引寄せられたやうになつて、颯と亂れて、白魚が寄りさうに、篝火かと影がこぼれた。
熟と俯向いた目を上げた時、綾子が、あゝ、棧橋の其の半巾を見つけた。すつと靡いて、風に絞られて、ゆら〳〵と伸びたのを。
「一寸、白百合のやうだわねえ。」
從妹は悚然としたと言ふ。

船が着くと、誰にするともなく、四五人乘合の中へ輕く會釋して、莞爾して、其の男は一人すたすたと山谷の方へ行つて了つた——
「だから、袴なんぞ穿いてお出掛でないと云ふのに、學校の規則だつて。それだから、あんな魔が魅します。前垂がけで御覽なさい、職人はからかつたつて、學生は目をつけないのに。もう、庭へ白百合はお植ゑなさるなよ。」
と從妹がいきせいて言ふから、
「馬鹿な、百合の花が知つた事か。」
と私は笑つたが、此の話を聞いた時、何となく綾子の運命のほどが思ひやらるゝやうな氣がした。
果せる哉、其の歳の暮の事、一日、來がけに寄つたと云ふ絲卷の內から、從妹が此方へ驅込んで、
「大變よ。」
今日、綾子が學校のかへりがけに、トある下宿屋の二階の緣から、インキ壺がころがり落ちて、礑とぶつかつて袴を汚した。
驚く處へ、箒を持つたなりの學生が飛んで出て、掃除の不注意、飛だ疎匆、まあ、入つて下さ

い、と引張る。可いわ、と言ふ。でも相濟まぬ、それではお詫びながら、御邸へ伺はうと、今綾子を送つて來て、平にわびをして居るのがね、其の過般の向島の。……

ちやん〳〵め、撲れ、と高等學校へ行く從弟は息まく。大分町内が物騒で、へゝゝ、と船頭は身體を搖る。就中苛立つたのは、政といふ同人で、これは一ツ内に住むのではないが、毎日のやうに來て矢張畫を描く、芝の植木屋の忰。

「さあ、火事だ、畜生、天窓から水を浴びせろ。生命を惜んで消防夫がなるか。」と握拳で鼻頭を引擦つた。

六

近頃こんな話がある。政の親父の夥伴だと云ふ、小石川大塚邊の植木屋が、築土の方へ仕事に行つた。仕事先に祝があつて、一杯馳走になつた處から、夜が更けて、第六天の暗闇を入つて、折れて切支丹坂へ上らうとする坂の下で、慄然として急に心持の悪い冷汗が垂々。踏切つて上り掛けると、何事もなかつたが、其の時の身の毛の慄立つたと云つたらない。

其處で翌日又仕事に出掛に、同じ坂を下りて、確か昨夜此處で慄然とした、と見ると、石垣の角の草の上に、竹の皮包みを開いて、黒豆の入つた飯を供へて、塗箸の新しいのが立てゝあつた。

何かの禁厭にしたものらしいが、朝露にも崩れず、未だ日に乾かず、冷々として白かつた、と云ふ。

其を丁ど思出した。裏の路地口は眞暗だし、俄に總毛立つたといふのもこんなのだらう、と考へたが、串戯にも儀式にも迷信にも、婿取の晩、木戸口へ赤飯を裝りつける法はあるまい。

恁う又他愛のない事を思つたのも、實は爾時と同一やうな胸騒ぎがする、又火沙汰ではないかと危ぶまれる、其の可忌い念を、自分で打消さうとしたのであらう。

空は眞暗で星一ツない、然うかと云つて、今が今降出しさうにも思はれぬ陽氣だつた。で、夜は遲くても方々軒明の殘つた、辻には茶飯屋も居る明い表町から、つか〳〵と横道へ切れたから、目が未だ馴れない所爲で、こんな時は、段々目の曇が拭はるゝやうに、星が見えはじめるものである。

胸の動悸を、恁う打傾いて聞くやうにしながら、薄氷を踏むとあるが、今夜の溝板がソレと云ひたい。

暗闇の路地を擦拔けるやうにして、取着きの絲卷の裏圍から、ぐいと引ッこぬくばかりに、身體を例の公園と竹垣の間へ出ると、向うの角に斜かひに、綾子が一件の其のがらんのついた格子

戸の前が、地紙の形の空地になつて、眞中に絲卷、とした瓦斯が一基立つて居る、其の茫として赤い灯で、忽ち大變なものを見て、震へ上つた。

「是だ！」

目の前に、邪慳に、自棄に、放り出したと云ふ風に、引傾げて、尤も、物だから打倒れはせぬけれども、粗略に置放しの駕籠一挺。

唯見ると今時見馴れない目には、恰も人無き里に於ける乾坤一草亭の觀があるし、あの柄を兩方に開いた形は、仙人が作つた偉大なる折鶴の、風を待つて飜然と虚空へ舞上りさうにも見える。

「遣ッ附けたな、」と思はず口に出たのを、咽で殺して息を詰めて棒立ちになつた。

蓋し此の謀叛の頭人や、植政で、豫て聲言して曰く……世にも可愛い綾ちやん……

「一生一代、晴の祝言と云ふ時は、絲卷揃ひの半纏で、白の振袖に緋鹿子の長襦袢と云ふ、山の手一番の姿を舁がう。

尤も婿取りだから外へは出すまい、地主が澤瀉の提灯をつけて、此の路地の中をぐるりと廻るだ。」

「可からう。」と從弟が机を敲くと、

「是非ね、私は一番肌脱で鐵棒をつきませう。」と其の姉が喝乎と云ふ。

が、是は未だ養子の話の極らなかつた前の事で。

「其のかはり女房が何と云はうが、當畫長屋の連中が目鑑に叶はん田舍ものを授けようとしたが最後、其の駕籠ぐるみ引拔つて逐電だ。」

「けれどもですな、政君、其の場合に於て、どつちにしろ、令孃を駕籠に乘せる、と云ふ事をですな、先方で承諾をいたしませうか。」とお船頭がぐら〳〵と膝を搖る。

變な顏をして、政が大いにひるんだから、

「何それは可からう。半纏を揃へて、駕籠を据ゑて、此の顏觸れで、づらりと並んで、へい、御祝儀、と云つたら、路地内だけなら聞屆けよう。一寸親たちは澁つても、綾公は何時も玉乘りの眞似をする形で、屋根から飛乘るよ。」

と私が勢をつけたので、一つシヤンと占めて取極めてあつたのである。

七

いづれ一度は、其の祝儀をせねばならぬが、どうぞ駕籠のまゝ逐電するのでなしに、絲卷の揃ひで路地の中を廻られますやう、從妹は神佛に、可愛い、罪のない、虚榮のない、氣取り氣のない、色氣のない、雛を宛然活かしたやうな綾子のために――信心して居た程だつた、――今度の

婿は實に溫順しい、學問好な、人づきの可い、而してしんせつな、行屆いた思遣りのある方だ…
…と言ふ。

學校でも大層出來たが、お氣の毒な、故郷に據ない事が起つて、學資が續かなくなつたもんだから、中途でよして、これから一本だちで内務省の試驗を受けるんだつて、下町の一醫者へ助手に行つて、夜は勉强して、大層見立てが上手で、患者の中には、若先生に、と名ざして來るのが大分ある、と先づ女中が近所へ觸れた。

但根生ひの江戸兒で、主婦は竹を割つたやうな氣象だし、女ばかりだし、内福で苦勞はせず、富士が砂利になつた、と言つても、目に見るまでは、決して人を怪まない。

澁谷邊で汽車が衝突した。居まはりの親類の緣側へ、女の腕が一ッ斜ッかひに乘つたし、恐しい響がしたと思ふと、打ッつかつて窓を破つて、結綿に結つた娘の首がばさりと落ちたが、さした花簪がまだゆら〳〵して居た、と恁う聞いて信じて居るから、懷紙を啣へて、チョンと鴨居へ乘つたと云つても、恐らくは疑ふまい。

其の内に、丁ど、と云つては可訝しいが、主婦にはさし込の持病がある、陽氣のかはりめには節々惱むが、大概は合藥で間に合ふけれども、些と仕こじつた時は醫師を呼ぶのを、僥倖だ、と醫學生の許へ驅付けた、事があつた。

少きドクトル、唯一匙を振つて、立處に平癒となつた處から信仰は彌が上。

妙なもので、何時でも醫者が間に合つて、直ぐに治る、と氣がゆれる、と持病の方でも我儘が出ると覺しく、是までにない、一寸々々起る、と直ぐに學生が驅けつける。一晩なんざ、枕許へ着切で、夜徹し看病をしたとかで、親身も及ばぬ、と主婦は喜ぶ。

さあ、侍醫が出來たも同然で、皆がぴん〳〵達者な時でも、時候が惡いから一寸診てあげませう、と脈を取る。是に甘えるやうになつて、少し頭痛がする、ソレ篠田さん、些と食過ぎた、ソレ篠田さん、となつた時分に、——

「御愼みなさい、そんな事で藥は上げられません。」

と斥ける、と藥は賣らぬ豪いもの、と尊くなる。緩急時を得たもので。

その内、絲卷の袋戸棚の中に、藥劑瓶がづらりと並んだ。

さて改めて披露に及ぶ、——養子と云ふのは其である。

八

是より以前、一度は、今日はと入つて行く從妹を見て、座敷で御飯を食べて居た學生が、ふい、と奥へ隱れた。二度目の時は、平氣で長火鉢の前の座蒲團に坐つて、京燒の——從妹が心を罩め

て綾子に贈つた湯呑で、篠田が茶を喫んで居たのを見た、と女氣の身を震はして口惜がつた。
此の復讐として、私も留めるし、自分でも謹んで居た、醫學生の、あの水族館の名札一件。
「あれを母さんにお言ひつけよ。」
と、蔭で綾子をそゝのかした事がある。
ト告げたか何うだか、其の返事は聞かれなかつた。以來、綾子は最う此方へ來なくなつたから。
——其までにも、
「何處の娘だか分りません、寐る時ばかりの私の兒ぢやないのに、」と母さんが云つた事があつて、學校がへりに直ぐに飛び込むことを禁められたが、然う云ふ時は、澄まして家の前を通りながら、路地に向つた出窓の中へ、洋傘をトンと入れて、コト〳〵と音づれて通つたつけ……
いつかなんぞは、ちやうど降り積つた雪を握つて、大きな團にして、ドンと投込んで澄まして行つたものだつたが。
此の二月ばかりは、學校通ひに、出窓の前さへ通らなくなつたのは、母さんが格子戸に見張つて居て、裏木戸から往來させると云ふ。
又漏れ聞けば、婿について本人の意志を確むるのに、親たちが取つた手段は、極めて簡單なものだつた。

「綾ちやんや、まだ學校へ行きたいかい？」
「あゝ。」
「最うお前十七だから、學校は止しても可からう。」
「あゝ。」
あとの(あゝ)で、皆決着。
是非に及ばぬ。
「自由行動、駕籠だ。さあ、引かついで逃げませう。」と政が疊を叩く、と從弟が、
「勿論！」と机を拊つた。
はじめ苦笑ひをした、お船頭までが、
「行るべしですあ、私は此の髯で、半纏は不可んですで、いつかのお花見の形をそつくり、大森かつらの福助を被つて、袴の股立ちを取るとします。で、宰領の格で、棒先へ立ちませう。」
「占めた、其處で半纏の工夫だが。」
政の方に遣らせつけのがあると云つて、眞個に二枚染めた。
「一生の思出に、私に縫はして下さいな、」と從妹が針を取りはじめたのは、昨日の午で、今朝は早や出來上つたではないか。

で、其の針を運びながら、しく〳〵泣いて居る從妹の容子なぞは、本氣の沙汰ではない。

最初は地主よりも、むしろ、私が一同の要求を斥けて、（此の婚禮を打壞すやうに懸合へ）と云ふのを、親も緣者も附いて居る。第一、袴を汚したと言つて、綾子を送つて來たのは紳士の禮を辨へた沙汰で、然もあるべき事を、蛇蝎の如く思ひ取るやうな間違つた奴があるか、と悟して拒んだ、……自分に對する八ツ當りの示威的に行る、とばかり思つて居たが、幸ひ心當り借りる處がある、と云つて、お船頭が駕籠の才覺に事實出懸けたので、私は驚いて午前から家を遁出したのであつた。產婦の懸念に、じつとして居られないで、卑怯な亭主が遁出すのも、幽靈が恐いと云つて、天窓から夜具を引かぶるのも同一心持のものと見える。

泰然と本を讀んで居ても、產れるものなら、おぎあ、と產れる。目を塞いだ處で、出る幽靈なら出ようけれども。

裏木戸から冷汗は此の所爲で。……一か八か入つて見ると、それでも心の底には、まさか、と思つた駕籠が其處に。しかも瓦斯燈の灯で見える、灰色に夜のふけた新夫婦が閨と覺しい、雨戸を前に、垣根に押つけて置いてあつた。

窘まずに居られようか。

「さあ、事だぞ。此處へ擔ぎ出したくらゐでは、兎に角町內を騷がせた、惡くすると、洋劍の音

ぐらゐはしたらうも知れぬ、狂人沙汰は、火沙汰と擇ぶ處はない。」

と茫然とした體は、狸の所爲で、あらぬ處へ駕籠が出た、と同然に、我ながら化かされた風にも見えて動かれぬ。

九

ざら〳〵ざら、さゝらで顏を洗はれたやうに思ふと、近くの湯屋で、板の間を洗ふ音。

其の中空の煙突が、尖つた峰のやうに見えた。幽に吹靡いた名殘の煙が、蜃氣樓中の火山を見るやう、ほんのりと薄赤い、ト其の色で雲が分れて、仰いだ空が朧になる。

表通りは、灯を便るし、路地は廂合の暗さに紛れて、それまでは見るものとも、見えるものとも思はなかつた傍の樹々の綠は、艷はなけれど、くツきりと種々の形に黑い。結繞らした竹垣の其の竹の、くひ違つた節もこんもり浮く。但新しいに似ないで、荒果てたものの如く、處々傾き、倒れ、且つ大穴のあいた風情なのは、更けむとしつつ移り行く雲のたゝずまひと、夜の隈とが映るのである。

松葉の香頻也。屋根にかゝつた木の葉はないが、路を塞いだ駕籠は、森の中なる風情して、我は山路に蹈迷ふ。不思議に里を隔てたやうに、近頃疎くなつた絲卷の雨戸は、然も今夜、婿の

手ならでは透あらせじ、と嚴重に、犇とあつて、唯見るにさへ心苦しい。

打背いて、小公園の樹立を見ると、松の根を透き、梅ケ枝を洩れながら、木瓜の紅があからさまに、瓦斯燈の明に映つた——今を盛と思はれる。

松明を束ねたやうな、爀燿たる此の盛春の錦木は、日中は只美女の血潮が漲つて、太陽の色をさへ燒き亡はんず、見るものの目は、其の花の中なる金色の光に眩くが、いま恁くて、新婦が緋縮緬の姿を偲ぶ。

熟と見る內、目前へ紫の光が絡んで、薄い萌黃が一搖れ搖れると、蒼くなつてフト失せた……あゝ、風に煽つたのではなく、上へ吸取つたやうに、恰も爾時、瓦斯燈が消えたのである。餘り急で、未だ「絲卷」とした幻の字が見える。

のみならず、吸ひ消された火が、私の瞳を去らなかつた。廂を壓して、大釜の、赤錆にさびて青い水を湛へた用水の、格子と並んだ、庭へ入口の木戸の間に、づッしり据つて、如何にも金物屋が此處へ根を下ろさうとした其の思ひのほどの料られる、數千尺の地の底から生拔になつて居さうで、近まはりは、歩行くとカーンと響きさうなのが、此の時歴然と顯れた。

瓦斯の灯をフイと吸ひ取つたのは、此の古釜であるらしい。ふちに搦んで、底へ潛つて、しばらく燃ゆるやうに見えたから。

婚姻の夜と云ふのに、本家傳來の大釜が、此の現象は可忌しい。

身ぶるひして目を外らすと、これにもなごりは消えやらず、木瓜の花の紅は、尙ほ朦朧と其處に彳む。

これでは動き出さうも知れぬ。

然う云へば、新婦が廊下を通りはしないか。

否其には限るまい、廁の水口は直き其の雨戸の端にある、誰が開けても、こゝに人があるのを見よう、と思はず懸念の駕籠の柄に手をかけた。ト其の塗の黑いのが、手に映つた——別に押しも動かしもせなんだけれども、ひたと其の駕籠が袷の袖に應へて重い。

尤も、元來輕かるべき所謂はないが、此の時重く應へたのは、中が空ではないやうな氣がしたのである。

然うだ、情も、愛も、嫉妬も、罪も、佛も、鬼も籠るものを、と漫に身に沁み、冷たく鐵の柱から手を放すやうにした時、ふつと浮いて、駕籠の戸を、白く離れたものがある。

ひらり、向うの柄を流るゝやうに、ふは〳〵と舞上つたのは一羽の蝶々。

と誘はれるやうに足が浮いた。

時に薄月が雲に透いた。影は弱く、地の上までは射通さぬが、蝶々の羽は透したか、冷い陽炎

となつて消えた、と思ふと、薄り、木瓜の紅が、羽を桃色に目前に映して漾はせた。

もう公園を向うへはづれて、眞直に、我家の門に面したのである。

此の稍廣い路地を、ひら〳〵、と吹きもせぬ風に漂うて行くのに、誘はれて歩行いた時は、唯あれ、あれ、とばかりで、踏む路は蹠に、恰も高くふつくりと綿を踏んだ。

自家の格子戸と直角に、すぐ庭へ通る開戸の木戸一ツ。

此の上を越した時、蝶の姿が一番衝と高かつた。翼が搦んで、月の輪へ、袱紗をかけたやうに成つたが、はらりと外れて、低くなつて庭へ入つた。

遲く歸る時のために、何時も此處だけは開けてある。

すぐに押すと、音もしないで開く。

あとを締める氣もしないで、其まゝ衝と潛つて入ると、廻縁の此處は、隣家の竹垣と、我家の雨戸、並んだ四枚に、草の影すら〳〵と、間は細長い庭になつて、秋草を植ゑて置く、萩の盛には花の露が、縁へ紫の雫と落ちる。

十

其の萩も、藤袴も、桔梗も若葉で、まだ葉と葉、莖と莖とは間を置いて、隣の垣の、すら〳〵

と竹が透く……のに、小さい葉には紛れまい、薔薇の花片ほどはあつた蝶の、何處へ宿つたか此の秋草の中には見えぬ。

なつかしさに、跡を慕ひ、葉ずれに其處を辿つて出ると、廂を載せた柱が立つて、雨戸がぐるりと庭へ折れる、此の角から、五坪ばかり、これも向うを茶の木で仕切つた、下が崖で、品川まではは屋根の波、晴れると富士が空へ浮く、見霽の此の花園。埴生の宿の背戸ながら、花のためには園とせよ。

雛菊、菫、櫻草、雛菊、菫、櫻草。搖らめく瓚、香ある玉、紫雲英の雲の紫が、其の簪を乘せ、玉を敷き、銀河を渡る橋かと見ゆる飛石を繞つて居る。春雨なれば一重よし、梅雨には蓑なす八重山吹、夜の間に濡を乾かすか、黄色な霞が俤立つ。

花菱草は黄金の杯を露に傾け、俤白く醉へるやう。千鳥草の美しさ、夕日の浪の五色に碎けて、海松にかゝるに異ならず。虞美人草の唇は、東雲の雲を分けて、紅玉の面を接吻しよう、と夢にもほんのりと面を染める。

折から誘ふ風もなく、音信るゝ鐘もなく、眠りしか、覺めたるか、幻の、色ばかり打搖ぎ、むら〳〵と美しい呼吸の霞を吐いて、薄月を包む雲の上を、淺葱に、朱鷺に彩つて、誰が取出でて咲くともなく苫むともなく枕を並べた。

其處へちら〳〵、臺を潛り、花に乘つて、仄に白くほのめくのを……今また見着けた蝴蝶の翼の、輕く浮き沈みする狀は、ふつくりした娘の手らしい。

何時も其の姿で戯れた、綾子の姿を思出したが、フト又他のもののやうにも見えた。蝴蝶の此の手は、花を摘むのではなく、花を育てるものの如くなれば。——

考へると、白露で虹を解いた繪の具のやうな、種々の花の微妙なる色彩は、こんな時、天女が來て、苔を一ツ一ツ染めて行くのであらうも知れぬ。

繪筆持たずに、手でなしに、白きは其の袖、緋なるは其の褄。打かさなつて透いて搖れれば、絞ともなり、斑ともなり、隈ともなる。黄や紫は帶の綾。映せば映り、宿せば宿つて、苔は天衣の色に咲かう。櫻のやうな高い樹は、袂を開いて蒼空の、朝日、夕日の影を染め、颯と翳して梢にかける、と霞が取つて咲き擴げよう。

貝殼草の堅いのは、花の女神の人さし指の、密と指す爪紅に彩られたか、と疑はるゝ。

然ればこそ、浦島草の色の單純なのも、我が繪具の、紅を解いても、緋を染めても、朱を灌いでも、黄を彩つても、同一美しさは染め得られぬ。

いづれか天の匠ならざる。

花や霞の其の佐保姫、もみぢに霧の龍田姫、わが花園に在るは誰ぞ。

曉や人はしらずも桃の露

時に此の白雄の句を思ひ浮んだ、桃の露の曉さへ知らずに過ごす——朧に艶ある現の花の眞夜中に、神來らじと誰が言ふや。

花はものいはぬ、と世は信ずる。非ず、言はざるにあらず聞かないのかも知れない。黄菊白菊、菖蒲の冠、萩の褄、嫁菜の花の一枝をも、戀ひ、慕ひ、憧憬れ、悶えて、戀人の如くせよ。浴した胸に抱け、清らかなる額に翳せ。莖は血潮の色に出で、蕋の戰ぎは戀を囁く。

從妹弟にも、我が友にも、失はれたる綾子のかはりに、いで、花束を、と思つたが、いや、しばらく、其處に花守……彼處へ、彼處へ、——指が見ゆる、花がくれに、手が露はるゝ、葉の上へ——

蝶の姿の搖めくを、硯の水に響くやう、靜に熟と瞻るほどに、其のはたらきを妨げるやう、我ながら憚られたので、片隅に寄つて蒼い塗笠、をかしく傾く芋の葉のかげに蹲る。と立籠む薫が馥郁として、心ゆくばかり芬とした。

眉に迫つて白百合一輪、すつと俯向けに、たら〳〵と露を受けて、昨日一昨日まだ苔だつたのが、今咲かされたか開いて居た。

蝶は此處から、舞ひはじめたらう。……

ト搖りと振向いたやうになつた。トタンに來て、蝶々は、白銀の鈴のやうな百合の花に翼を休めた。其の羽が言合はせたやうに、頷いたやうに、人の目を忍ぶやうに、縋るやうに、其の癖たよりなささうに、密と寄ると、姿が片々になつた狀に熟と留つて……少時動かぬ。

離れた時は、女神の如く、崇高の念に打たれたが、恁う近々となれば、扨凡夫の、唯蝶々の愛愛しい。

其處で思はず頰を寄せた。

其の相觸れたる時、蝶の膚の滑さは、我が綾子の翼に似た。

まだ何等、意を運らす暇もなく、其の蝶が力なげに、はらりと落ちた。落ちた處が、櫻草、雛菊の上だつたら、紫雲英だつたら、枕をかへて寢返りしたか、天へ歸つた事と思つたのであらうけれども、恰も芋の葉の傍で、其處が地だつたので、ハツとした。

思はず、指がふるへた所爲か、其の時觸れると、冷たかつた——蝶を掌に据ゑたが……飛ばぬ……

袂に燧火があつたのに心着いて、急いで、地に置いて片手で擦つた。

しゞまの折から慌じい、ぱツと燃える、と此の光に驚いたか、こは如何に蝶の首に、しつかりと喰ひついて居た蜘蛛が一ツ。血のやうに、ぽたりと落ちたが、其の色は青かつた。

咄嗟に、冷却した全身の血潮は癇となつて、足を擧げて蹂躙らうとした。

が、待て、待て。

蜘蛛は血と肉に餓ゑて居たかも知れぬ。

從妹弟だちよ、友も聞け。

いづれも同一人間である。

あの、可憐なる娘の、其の手を携へ、其の頸を抱くを見て、われらがひとへに、唯愛のみを感ずべきは、大慈大悲の觀世音でなければならぬ。

獅子、白象、猛獸の許に美しき其の姿を跪かせて、われらが、ために見て、芙蓉、薔薇に齊眉くやう、些の畏怖と、不安を感ぜざるには、其處に居給ふ菩薩にして、普賢文珠の他には在はさぬ。

瑜伽を奪つた旅商人は、血を吸ひ肉を嘗めたとする。渠に憧がれた里人の誰も彼も、われらが目には、齊くこれ、鶯の細き頸に花笠被せ、蜻蛉の尾に松葉さして愛でくつがへる其ならずや。

可、我汝を損はじ。

蜘蛛はさら〳〵と又白百合の花にかくれた。

恍惚して離した蝶は、ひらりと舊の處へ留まつた。さては……接吻して居たのであつた。言は

ぬことか、私は徒らに、其の夢を覺まし、其の眠を驚かしたのである。

蜘蛛よ、青き蜘蛛よ、
香に醉へ、花に眠れ。
巣を營むこと勿れ。
血と肉とに餓うとならば、
汝が犧牲を妨げじ。
さりながら礫柱のあたりを選べ、
なせそ、花の中に潜むことを。

と言不束、眞心に打念じて、眼を開いた時は、白き其の翼を被いで、一人は高島田に笄さして、蒼白い、あの醫學生の顏と、並んで、互に莞爾とあるのを見た。

あゝ、祝着候。

草迷宮

向うの小澤に蛇が立つて、
八幡長者の、をと娘、
よくも立つたり、巧んだり。
手には二本の珠を持ち、
足には黄金の靴を穿き、
あゝよべ、かうよべと云ひながら、
山くれ野くれ行つたれば……

一

三浦の大崩壞を、魔所だと云ふ。

葉山一帶の海岸を屏風で劃つた、櫻山の裙が、見も馴れぬ獸の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の濱で、逗子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、此の邊では此處が多い。

一夏激い暑さに、雲の峰も燒いた霰のやうに小さく焦げて、ぱち〳〵と音がして、火の粉になつて覆れさうな日盛に、是から湧いて出て人間に成らうと思はれる裸體の男女が、入交りに波に浮んで居ると、赫とたゞ金銀銅鐵、眞白に溶けた霄の、何處に龜裂が入つたか、破鐘のやうなる聲して、

「泳ぐもの、歸れ。」と叫んだ。

此の呪詛のために、浮べる輩はぶくりと沈んで、四邊は白泡となつたと聞く。

又十七ばかり少年の、肋膜炎を病んだ擧句が、保養にとて來て居たが、可恐く身體を氣にして、自分で病理學まで研究して、0，などと調合する、朝夕檢溫氣で度を料る、三度の食事も度量衡で食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際を、生白い瘦脛の高端折、跣足でちよび〳〵横歩行きで、日課の如き運動をしながら、つく〴〵不平らしく、海に向つて、高慢な舌打して、

「あゝ、退屈だ。」

と呟くと、頭上の崖の胴中から、異聲を放つて、

「親孝行でもしろ——」と喚いた。

爲に、其の少年は太く煩ひ附いたと云ふ。

そんなこんなで、其處が魔所だの風説は、近頃一層甚しくなつて、知らずに大崩壞へ上るの

を、土地の者が見着けると、百姓は鍬を杖支き、船頭は舳に立つて、下りろ、危い、と聲を懸ける。

實際魔所でなくとも、大崩壞の絶頂は藥研を俯向けに伏せたやうで、跨ぐと鐙の無いばかり。馬の背に立つ巖、狹く鋭く、踵から、爪先から、ずかり中窪に削つた斷崖の、見下ろす麓の白浪に、搖落さるゝ思がある。

さて一方は長者園の渚へは、浦の波が、靜に展いて、忙しく然も長閑に、鷄の羽たゝく音がするのに、唯切立ての巖一枚、一方は太平洋の大濤が、牛の吼ゆるが如き聲して、緩かに然も凄じく、うゝ、おゝ、と呻つて、三崎街道の外濱に大畝りを打つのである。

右から左へ、僅に瞳を動かすさへ、杜若咲く八ツ橋と、月の武藏野ほどに趣が激變して、浦には白帆の鷗が舞ひ、沖を黑煙の龍が奔る。

是だけでも眩くばかりなるに、蹈む足許は、岩の其の劍の刃を渡るやう。取縋る松の枝の、海を分けて、種々の波の調べの懸るのも、人が縋れば根が搖れて、攀上つた喘ぎも留まぬに、汗を冷うする風が絶えぬ。

然ればとて、是がために其の景勝を傷けてはならぬ。大崩壞の巖の膚は、春は紫に、夏は綠、秋紅に、冬は黃に、藤を編み、蔦を絡ひ、鼓子花も咲き、龍膽も咲き、尾花が靡けば月も射す。いで、紺靑の波を蹈んで、水天の間に絲の如き大島山に飛ばんず姿。巨匠が鑿を施した、靑銅の

獅子の俤あり。其の美しき花の衣は、彼が威靈を稱へたる牡丹花の飾に似て、根に寄る潮の玉を碎くは、日に黃金、月に白銀、或は怒り、或は殺す、鋭き大自在の爪かと見ゆる。

二

修業中の小次郎法師が、諸國一見の途次、相州三崎まはりをして、秋谷の海岸を通つた時の事である。

件の大崩壞の海に突出でた、獅子王の腹を、太平洋の方から一町ばかり前途に見渡す、街道端の——直ぐ崖の下へ白浪が打寄せる——江の島と富士とを、簾に透かして描いたやうな、一寸した葭簀張の茶店に休むと、媼が口の長い鐵葉の湯沸から、澁茶を注いで、

人皇何代の御時かの箱根細工の木地盆に、裝溢れるばかりなのを差出した。

床几の在處も狹いから、今注いだので、引傾いた、湯沸の口を吹出す湯氣は、むら〳〵と、法師の胸に靡いたが、其さへ颯と涼しい風で、冷い霧のかゝるやうな、法衣の袖は葭簀を擦つて、外の小松へ飜る。

爽な心持に、道中の里程を書いた、名古屋扇も開くに不及、疊んだなり、肩をはづした振分けの小さな荷物の、白木綿の繫ぎめを、押遣つて、

「千兩、」とがぶりと呑み、
「あゝ、旨い、是は結構。」と莞爾して、
「おいしい序に、何と、其も甘さうだね、二ッ三ッ取つて下さい。」
「はい〳〵、此の團子でございますか。是は貴方、田舍出來で、澤山甘くはございませぬが、其のかはり、皮も餡子も、小米と小豆の生一本でございます。」
と小さな丸髷を、ほく〳〵もの、折敷の上へ小綺麗に取つてくれる。
扇子だけ床几に置いて、澁茶茶碗を持つたまゝ、一ッ撮まうとした時であつた。
「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突ご奇聲を放つた、濁聲の蜩一匹。
法師が入つた口とは對向ひ、大崩壞の方の床几のはづれに、竹柱に留まつて前刻から——胸をはだけた、手織縞の汚れた單衣に、弛んだ帶、煮染めたやうな手拭をわがねた首から、頸へかけて、耳を蔽ふまで髮の伸びた、色の黑い、巖乘造りの、身の丈拔群なる和郎一人。目の光の晃々と冴えたに似ず、あんぐりと口を開けて、厚い下唇を垂れたのが、別に見るものもない茶店の世帶を、きよろ〳〵と眴して居たのがあつて——お百姓に、船頭殿は稼ぎ時、土方人足も働き盛り、日脚の八ッさがりを其の體は、いづれ界隈の怠惰ものと見たばかり。小次郎法師は、別に心にも留めなかつたが、不意の笑聲に一驚を吃して、和郎の顏と、折敷の團子を見較べた。

「串戲ではない、お婆さん、お前は見懸けに寄らぬ剽輕ものだね。」
「何でございますえ。」
「否さ、此の團子は、こりや泥か埴土で製へたのぢやないのかい。」
「滅相なことをおつしやりまし。」
と年寄は眞顏に成り、見上げ皺を澤山寄せて、
「何を貴方、勿體もない。私もはい法然樣拜みますものでございます。吝嗇坊の柿の種が、小判小粒になればと云うて、御出家に土の團子を差上げまして濟むものでございますかよ。」
眞正直に言譯されて、小次郎法師は些と氣の毒。
「何々、然う眞に受けられては困ります。此の涼しさに元氣づいて、半分は冗戲だが、旅をすれば色々の事がある。駿州の阿部川餅は、そつくり正のものに木で拵へたのを、盆にのせて、看板に出してあると云ひます。今これを食べようとするのを見て其の人が、」
と其方を見た、和郎はきよとんと仰向いて、烏も居らぬに何ぢややら、頻に空を仰いでござる。
「唐突に笑ふから、はゝあ、此の團子も看板を取違へたのかと思つたんだよ。」
「えゝ、えゝ、否、お前樣、」
と小薩張した前かけの膝を拍き、近寄つて聲を密め、

「これは、もし氣ちがひでございますよ。はい、」
と云つて、獨りで媼は頷いた。問はせ給はば、其の仔細の儀は承知の趣。

三

小次郎法師は、掛茶屋の庇から、天へ蝙蝠を吹出しさうに仰向いた、和郎の面を斜に見遣つて、
「然う、氣違ひかい。私は又啞でもあらうかと思つた、立派な若い人が氣の毒な。」
「お前樣ね、一ッは心柄でございますよ。」
媼は、罪と報を、且つ悟り且つあきらめたやうなものいひ。
「何か憑物でもしたと云ふのか、暮し向きの屈託とでも云ふ事か。」
と言ひ懸けて、澁茶に又舌打しながら、圓い茶の子を口の端へ持つて行くと、然あらぬ方を見て居ながら天眼通でもある事か、逸疾くぎろりと見附けて、
「やあ、石を嚙りやあがる。」
小次郎再び化轉して、
「あんな事を云ふよ、お婆さん。」
「惡い餓鬼ぢや。嘉吉や、主あ、最う彼方へ行かつしやいよ。」

其の本體は却つて差措き、砂地に這つた、朦朧とした影に向つて、窘めるやうに言つた。
潮は光るが、空は折から薄曇りである。
法師も是あるがために暗いやうな、和郎の影法師を伏目に見て、
「一ッ分けて遣りませうかね。團子が欲しいのかも知れん、其だと思ひが可恐しい。眞個に石にでもなると大變。」
「食氣の狂人ではございませんに、御無用になさりまし。
石ぢや、と申しましたのは、是でも幾干か、不斷の事を、覺えて居ると見えまして、私が何時でもお客樣に差上げますのを知つて居りまして、今のやうに云うたのでございましよ。
又埴土の團子ぢや、とおつしやつてはなりません。此のお前樣。」
と、法師の脫いで立てかけた、檜笠を兩手に据ゑて、荷物の上へ直す序に、目で敎へたる葭簀の外。
さつくと倒つた荒造の仁王尊が、引組む狀の巖續き、海を踏んで突立つ間に、倒に生えかゝつた竹藪を一叢隔てて、同じ巖の六枚屏風、月には蒼き俤立たう——ちらほらと松も見えて、いろいろの浪を縅した、鎧の袖を澈に翳す。
「あれを貴下、お通りがかりに、御覽じはなさりませんか。」

と背向きになつて小腰を屈め、姥は七輪の炭をがさ〳〵と火箸で直すと、藥罐の尻が合點で、丁と据わる。

「何の道貴下には御用はござりますまいなれど、大崩壞の突端と睨み合ひに、出張つて居りますあの巖を、」

と立直つて指をさしたが、片手は据ゑ腰を、えいさ、と抱きつゝ、

「あれ、あれでござります。」

波が寄せて、恰も風鈴が碎けた形に、ばら〳〵と其の巖端に打かゝる。

「あの、岩一枚、子產石と申しまして、小さなのは細螺、碁石ぐらゐ、頃あひの御供餅ほどのから、大きなのになりますと、一人では持切れませぬやうなのまで、こつとり圓い、些と、平扁味のあります石が、何處からと無くころ〳〵と產れますでございます。

其の平扁味な處が、恰好よく乘りますから、二つかさねて、お持佛なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方が、いや、最う、年子にお出來なさりますと、申しますので。

隨分お望みなさる方が多うございますが、當節では、人がせゝこましくなりました。お前樣、蓆戸の壓へにも持つて參れば、二人がかりで、澤庵石に荷つて歸りますのさへございますに因つて、今が今と申して、早急には見當りませぬ。

隨分と御遠方、わざ〳〵拾ひにござらして、力を落す方がございますので、恁うやつて近間に店を出して居りますから、朝晩汐時を見ては拾つて置きまして、お客樣には、お土產かた〴〵、毎度婆々が御愛嬌に進ぜるものでござりますから、つい人樣が御存じで、葉山あたりから遊びにござります、書生さんなぞは、

（婆さん、子は要らんが、女親を一つ寄越せ。）

なんて、おからかひなされまする。

其を見い〳〵知つて居て、此の嘉吉の狂人が、如何な事、私があげましたものを召食らうとするのを見て、石ぢや、と云ふのでございますよ。」

四

「それではお婆さん樂隱居だ。孫子が嘸大勢あんなさらうね。」

と小次郎法師は、話を聞き〳〵、子產石の方を覗きたれば、面白や浪の、云ふことも上の空。トお茶注しませうと出しかけた、塗盆を膝に伏せて、不圖默つて、姥は寂しさうに傾いたが、

「何のお前樣、此の年になりますまで、孫子の影も見はしませぬ。爺殿と二人切で、雨のさみしさ、行燈の薄寒さに、心細う、果敢ないにつけまして、小兒衆を欲しがるお方の、お心を察しま

すで、なう、子産石も一つ一つ、信心して進じます。
長い月日の事でござりますから、里の人達は私等が事を、人に子だねを進ぜるで、二人が實を持たぬのぢや、と云ひますがの、今ではそれさへ本望で、せめてもの心ゆかしでござりますよ。」
とかごとがましい口ぶりだつたが、柔和な顏に顰みも見えず、溫順に莞爾して、
「御新造樣がおありなさりますれば、御坊樣にも一かさね、子産石を進ぜませうに……」
「飛でもない。此の團子でも石になれば、それで村方勸化でもしようけれど、生憎三界に家なしです。」
しかし今聞いたやうでは。嘸お前さんがたは寂しからうね。」
「はい、はい、否、御坊樣の前で申しましては、お追從のやうでござりますが、佛樣は御方便、難有いことでござります。恁うやつて愛想氣もない婆々が許でも、お休み下さります御人たちに、お茶のお給仕をして居りますれば、何や彼や賑やかで、世間話で、ついうか〳〵と日を暮らしますでござります。」
あゝ、もし〳〵、」
と街道へ、
「休まうしやりまし。」と呼びかけた。

車輪の如き大さの、紅白段々の夏の蝶、河床は草にかくれて、清水のあとの土に輝く、山際に翼を廻すは、白の脚絆、草鞋穿、かすりの單衣のまくり手に、其の看板の洋傘を、手拭持つ手に差翳した、三十ばかりの女房で。
あんぺら帽子を阿彌陀かぶり、縞の襯衣の大膚脫、赤い團扇を帶にさして、手甲、甲掛嚴重に、荷をかついで續くは亭主。
店から呼んだ姥の聲に、女房が一寸會釋する時、束髮の鬢が戰いで、前を急ぐか、其まゝ通る。前帶をしやんとした細腰を、廂にぶらさがるやうにして、綻びた脇の下から、狂人の嘉吉は、きよろりと一目。
ふら〳〵と葭簀を離れて、早や六七間行過ぎた、女房のあとを、すた〳〵と跣足の砂路。
ほこりを黃色に、ぱつと立てて、擦寄つて、附着いたが、女房の其の洋傘から伸かゝつて見越入道。
「イヒヒ、イヒヒヒ、」
「これ、惡戲をするでないよ。」
と姥が爪立つて窘めたのと、笑聲が、殆ど一所に小次郎法師の耳に入つた。
恰も爾時、亭主驚いたか高調子に、

「傘や洋傘の繕ひ！――洋傘張替繕ひ直し……」

蟬の鳴く音を貫いて、誰も通らぬ四邊に響いた。

隙さず、這般不氣味な和郎を、女房から押隔てて、荷を眞中へ振込むと、流眄に一睨み、直ぐ、急足になるあとから、和郎は、のそのそ――大な影を引いて續く。

「御覽じまし、あの通り困つたものでございます。」

法師も言葉なく見送るうち、沖から來るか、途絶えては、づしりと崖を打つ音が、松風と行違ひに、向うの山に三度ばかり浪の調べを通はすほどに、紅白段々の洋傘は、小さく鞠のやうになつて、人の頭が入交ぜに、空へ突きながら行くかと見えて、一條道の其處までは一軒の苫屋もない、彼方大崩壞の腰を、點々。

五

「あれ、あの大崩壞の崖の前途へ、皆が見えなくなりました。

丁ど、あれを出ました、下の濱でございます。唯今の狂人が、酒に醉つて打倒れて居りましたのは……はい、あれは嘉吉と申しまして、私等秋谷在の、いけずな野郎でございましての。

其飲んだくれます事、怠ける工合、まともな人間から見ますれば、眞に狂氣の沙汰ではございませなんだが、それでも何うやら人並に、正月はめでたがり、盆は忙しがりまして、別に氣が觸れた奴ではございません。何時でも村の御祭禮のやうに、遊ぶが病氣でございましたが、此の春頃に、何と發心をしましたか、自分が望みで、三浦三崎の然る酒問屋へ、奉公をしたでございます。

つい夏の取着きに、御主人のいひつけで、清酒をの、お前樣、澤山でもございませぬ。三樽ばかり船に積んで、船頭殿が一人、嘉吉めが上乘りで、此の葉山の小賣店へ卸しに來たでございます。

葉山森戸などへ三崎の方から歸ります、此の邊のお百姓や、漁師たち、顏を知つたものが、途中から、乘けてくらつせえ、明いてる船ぢや、と渡場でも船つきでもございませぬ。海岸の岩の上や、磯の松の樹の根方から、おゝい〳〵、と坂東聲で呼ばり立つて、とう〳〵五人が處押込みましたは、以上七人になりました、よの。

どれも〳〵、碌でなしが、得手に帆ぢや。船は走る、口は辷る、風はよし、大話しを爲草臥れ、嘉吉めは胴の間の横木を枕に、踏反返つて、ぐう〳〵高鼾になつたげにございます。

路に灘はございませぬが、樽の香が芬々して、鮪も浮きさうな風の好さ。せめて船にでも醉ひたい、と一人が串戲に言ひ出しますと、何と一樽賭けまいか、飲むことは銘々が勝手次第、勝負

の上から代錢を拂へば可い、面白い、遣るべいぢや。
煙管の吸口ででも結構に樽へ穴を開ける徒が、大びらに呑口切つて、お前様、お船頭、辨當箱の空はなしか、といびつ形の切溜を、大海でざぶりとゆすいで、その皮づつみに、せゝり殘しの、醬油かすを指のさきで嘗めながら、まはしのみの煽切。
天下晴れて、財布の紐を外すやら、胴卷を解くやらして、賭博をはじめますと、お船頭が默つては居りませぬ。」
「叱言を云つて留めましたか。さすがは船頭、字で書いても船の頭だね。」
と眞顏で法師の言ふのを聞いて、姥は、いかさまな、其の年少で、出家でもしさうな人、と然も憐むだ趣で、
「まあ、お人の好い。なるほど船頭を字に書けば、船の頭でございましよ。そりや最う船の頭だけに、極り處は丁と極つて、間違ひのない事をいたしました。」
「何うしたかね。」
「五人徒が賽の目に並んで居ります、眞中へ割込んで、先づ帆を下ろしたのでございます。」
と莞爾して顏を見る。
聊も其の意を得ないで、

「何故だらうかね。」
「此の追手ぢや、帆があつては、丁と云ふ間に葉山へ着く。ふは〳〵と海月泳ぎに、船を浮かせながらゆつくり遣るべい。
其の事よ。四海波靜かにて、波も動かぬ時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや、と勿體ない、祝言の小謠を、聞嚙りに謳ふ下から、勝負！　とそれ、錢の取遣り。板子の下が地獄なら、上も修羅道でござります。」
「船頭も同類かい、何の事ぢや、」
と法師は新になみ〳〵とある茶碗を大切さうに兩手で持つて、苦笑ひをするのであつた。
「それはお前様、あの徒と申しますものは、……まあ、海へ出て岸をば眴して御覽じまし。巖の窪みは何處も彼處も、賭博の壺に、鰒の蓋。蟹の穴でない處は、皆意錢のあとでござります。珍しい事も、不思議な事もないけれど、爾時のは、はい、嘉吉に取つては、あやかしが着きましたぢや。なう、便船せう、便船せう、と船を渚へ引寄せては、巖端から、松の下から、飜然々々と乘りましたのは、魔がさしたのでござりましたよ。」

「魅入られたやうになりまして、ぐつすり寢込みました嘉吉の奴。浪の音は耳馴れても、磯近へ舳が廻つて、松の風に搖り起され、肌寒うなつて目を覺ますと、其のお前樣……體裁。

山へ上つたと云ふではなし、たか〳〵船の中の車座、そんな事は平氣な野郎も、酒樽の三番叟、とう〳〵たらり〳〵には肝を潰して、(やい、此奴等、)とはずみに引傾がります船底へ、仁王立に踏ごたへて、喚いたさうにござります。

騷ぐな。

騷ぐまいてや、やい、嘉吉、恁う見た處で、二歩と一兩、貴樣に貸のない顏はないけれど、主人のものぢや。引負をさせてまで、勘定を合はせうなんど因業な事は言はぬ。場錢を集めて一樽買つたら言分あるまい。代物さへ持つて歸れば、何處へ賣つても仔細はない。

なるほど言はれれば其通り、言譯の出來ぬことはござりませぬわ、なう。

錢さへ拂へば可いとして、船頭やい、船は何うする、と嘉吉が云ひますと、ばら錢を摑つた拳を向顱卷の上さ突出して、半だ半だ、何、船だ。船だ〳〵、と夢中で居ります。

嘉吉が、其處で、はい、櫓を握つて、ぎつちらこ。幽靈船の歩に取られたやうな顏つきで、漕出したげでござりますが、酒の匂に我慢が出來ず……

御繁昌の旦那から、一杯おみきを遣はされ、と咽喉をごく〳〵さして、口を開けるで、さあ、

飲まつせえ、と注ぎにかゝる、と幾干か差引くか、と念を推したげで、なう、此處等は確でござりました。

幡隨院長兵衞ぢや、酒を振舞うて錢を取るか。しみつたれたことを云ふな、と勝つた奴がいきります。

お手渡で下される儀は、皆の衆も御面倒、是へ、と云うて、あか柄杓を突出いて、だふ〳〵と受けました。あの大面が、お前樣、片手で櫓を、はい、押しなから、其の馬柄杓のやうなもので、片手で、ぐい〳〵と煽つたげな。

酒は一樽打拔いたで、些とも惜氣はござりませぬ。海からでも湧出すやうに、大氣になつて、もう一つやらつせえ、丁だ、それ、心祝ひに飲ますべい、代は要らぬ。

歸命頂禮、賽ころ明神の兀天窓、光る〳〵、と追從云うて、あか柄杓へ又一杯、煽るほどに飲むほどに、櫓拍子が亂になつて、船はぐら〳〵大搖れ小搖れぢや。こりやならぬ、賽が据らぬ。

えゝ、氣に入らずば代つて漕げさ、と滅多押しに、それでも、大崩壞の鼻を廻つて、出島の中へ漕ぎ入れたでござります。

さあ、內海の靑疊、座敷へ入つたも同じぢや、と心が緩むと、嘉吉奴が、酒代を渡してくれ、勝負が濟むまで內金を受取らう、と櫓を離した手に錢を握ると、懷へでも入れることか、片手に、

あか柄杓を持つたなりで、チヨボ一の中へ飛込みましたが。

はて、河童野郎、身投するより始末の悪さ。恁うなつては、お前様、もう浮ぶ瀬はござりませぬ。

取られて取られて、とう〳〵、なう、御主人へ持つて行く、一樽のお代を無にしました。處で、自暴ぢや。賽の目が十に見えて、わいらの頭が五十ある、濱がぐる〳〵廻るわ廻るわ。さあ漕がば漕げ、殺さば殺せ、と又ふんぞつた時分には、ものの一斗ぐらゐ嘉吉一人で飲んだであろ。七人のあたまへ四斗樽、是があらかた片附いて、濱へ樽を上げた時、重いつもりで兩手をかけて、えい、と腰を切つた拍子抜けに、向うへのめつて、樽が、ばつちやん、嘉吉がころり、どんとのめりました切、早や死んだも同然。

船はそれまで、ぐるり〳〵と長者園の浦を廻つて、丁どあの、活動寫眞の難船見たやう、波風の音もせずに漂うて居ましたげな。兩膚脱の胸の毛や、大胡坐の脛の毛へ、夕風が颯とかゝつて、慄然として、皆が少し正氣づくと、一ツ星も見えまする。大巖の崖が薄黑く、目の前へ蔽被さつて、物凄うもなりましたので、褌を緊め直すやら、膝小僧を合はせるやら、お船頭が、ほういほういい、と鳥のやうな懸聲で、濱へ船をつけまして、正體のない嘉吉を撲ぐる。と、むつくり起きたが、其の酒樽の輕いのに、本性違はず氣落がして、右の、倒れたものでござりますよ。はい。」

七

「仰向様に、火のやうな息を吹いて、身體から染出します、酒が砂へ露を打つ。晩方の涼しさにも、蚊や蠅が寄つて來る。

奴は、打つても、叩いても、起ることではござりませぬがの。

かゝり合は免れぬ、と小力のある男が、力を貸して、船頭まじりに、此の徒とて確ではござりませなんだ。ひよろ〳〵しながら、あとの先づ二樽は、荷つて小賣店へ屆けました。

嘉吉の始末でござります。其なり船の荷物にして、積んで歸れば片附きますが、死骸ではない、醉つたもの、醒めた時の挨拶が厄介ぢや、とお船頭は遁を打つて、帆を掛けて、海の靄へと隱れました。

何の道譯を立てていでは、主人方へ歸られる身體ではござりませぬで、一先づ、秋谷の親許へ屆ける相談にかゝりましたが、又此のお荷物が、御覽の通りの大男。それに、はい、のめつた切、捏でも動かぬに困じ果てて、すつぽ〳〵煙草を吹かすやら、お前様、嘘をするやら、向脛へ集る蚊を踵で揉殺すやら、泥に醉つた大鮫のやうな嘉吉を、浪打際に押取卷いて、小田原評定。持て餘して居りました處へ、丁ど荷車を曳きまして、藤澤から一日路、此の街道つゞきの、長者園の

土手へ通りかゝりましたのが……」

茜色の顱卷を、白髪天窓にちよきり結び。結び目の押立つて、威勢の可いのが、辨慶蟹の、濡色あかき鋏に似たのに、又た其の左の腕片々、へし曲つて脇腹へ、ぱッと開け、ぐいと握る、指と掌は動くけれども、肱は附着いて些とも伸びず。銅で鑄たやうな。……其の仔細を尋ぬれば、心がらとは言ひながら、去る年、一膳飯屋でぐでんになり、冥途の宵を照らしますぢや、と碌でもない秀句を吐いて、井桁の中に横木瓜、田舍の暗夜には通りものの提灯を借りたので、蠣殼道を照らしながら、安政の地震に出來た、古い處を、鼻唄で、地が崩れさうなひよろ〳〵歩行き。好い心持に眠氣がさすと、邪魔な灯を肱にかけて、腕を鍵形に兩手を組み、ハテ怪しやな、汝、人魂か、金精か、正體を顯せろ！　とトロンコの据眼で、提灯を下目に睨む、とぐたりとなつた、並木の下。地蟲のやうな鼾を立てつゝ、大崩壞に差懸ると、海が變つて、太平洋を煽る風に、提灯の蠟が倒れて、めら〳〵と燃えついた。沖の漁火を袖に呼んで、胸毛がぢり〳〵に仰天し、やあ、コン畜生、火の車め、まだ疾え、と鬼と組んだ横倒れ、轉廻つて揉消して、生命に別條はなかつた。が、其時の大火傷、享年六十有七歳にして、生れもつかぬ不具もの——渾名を、てんぼう蟹の宰八と云ふ、秋谷在の名物親仁。

「……私が爺殿でございます。」

と姥は云つて微笑んだ。

小次郎法師は、壽く如く一揖して、

「成程、尉殿だね。」と祝儀する。

「否、最う氣まゝものの碌でなしでございますが、お庇さまで、至つて元氣がようございますので、御懇意な近所へは、進退が厭ぢや、となう、葉山を越して、日影から、田越逗子の方へ、遠くまで、てんぼうの肩に背負籠して、榮螺や、とこぶし、もろ鰺の開き、うるめ鰯の目刺など持ちましては、飲代にいたしますが、其時はお前樣、村のもとの庄屋樣、代々長者の鶴谷喜十郎樣、」

と丁寧に名のりを上げて、

「これが私ども、お主筋に當りましての。其のお邸の御用で、東海道の藤澤まで、買物に行つたのでございました。

一月に一度ぐらゐは、種々入用のものを、鹽やら醬油やら、小さなものは洋燈の心まで、一車づゝ調へさつしやります。

横濱は西洋臭し、三崎は品が落着かず、界隈は間に合はせの俄仕入れ、しけものが多うございますので、何うしても目量のある、づッしりしたお堅いものは、昔からの藤澤に限りますので、おねだんも安し、德用向きゆゑ、御大家の買物は又別で、」